

600
129



2

0029333-000

600-129

無尽業態の研究

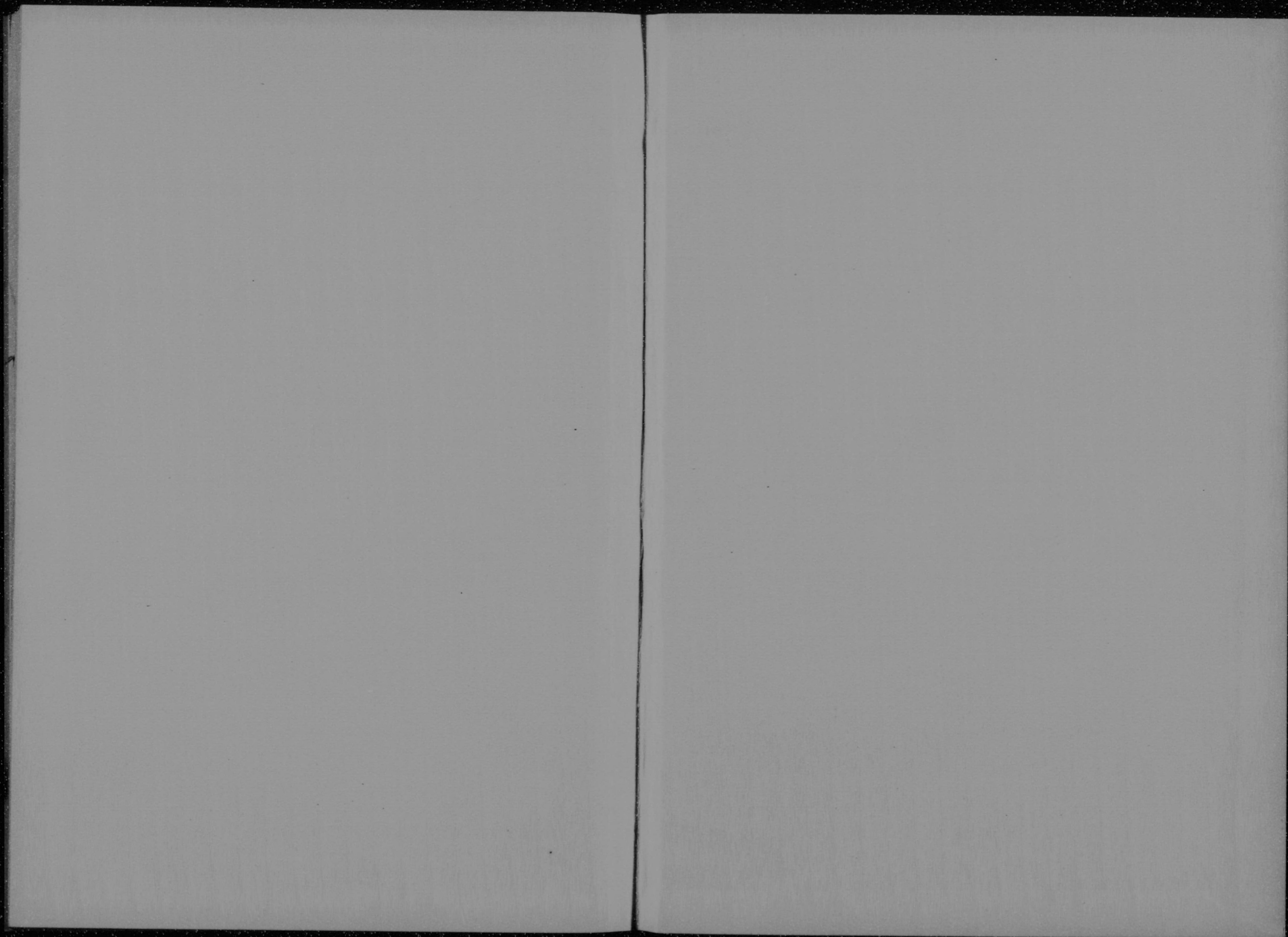
小坂珠城・著

文雅堂

昭和5

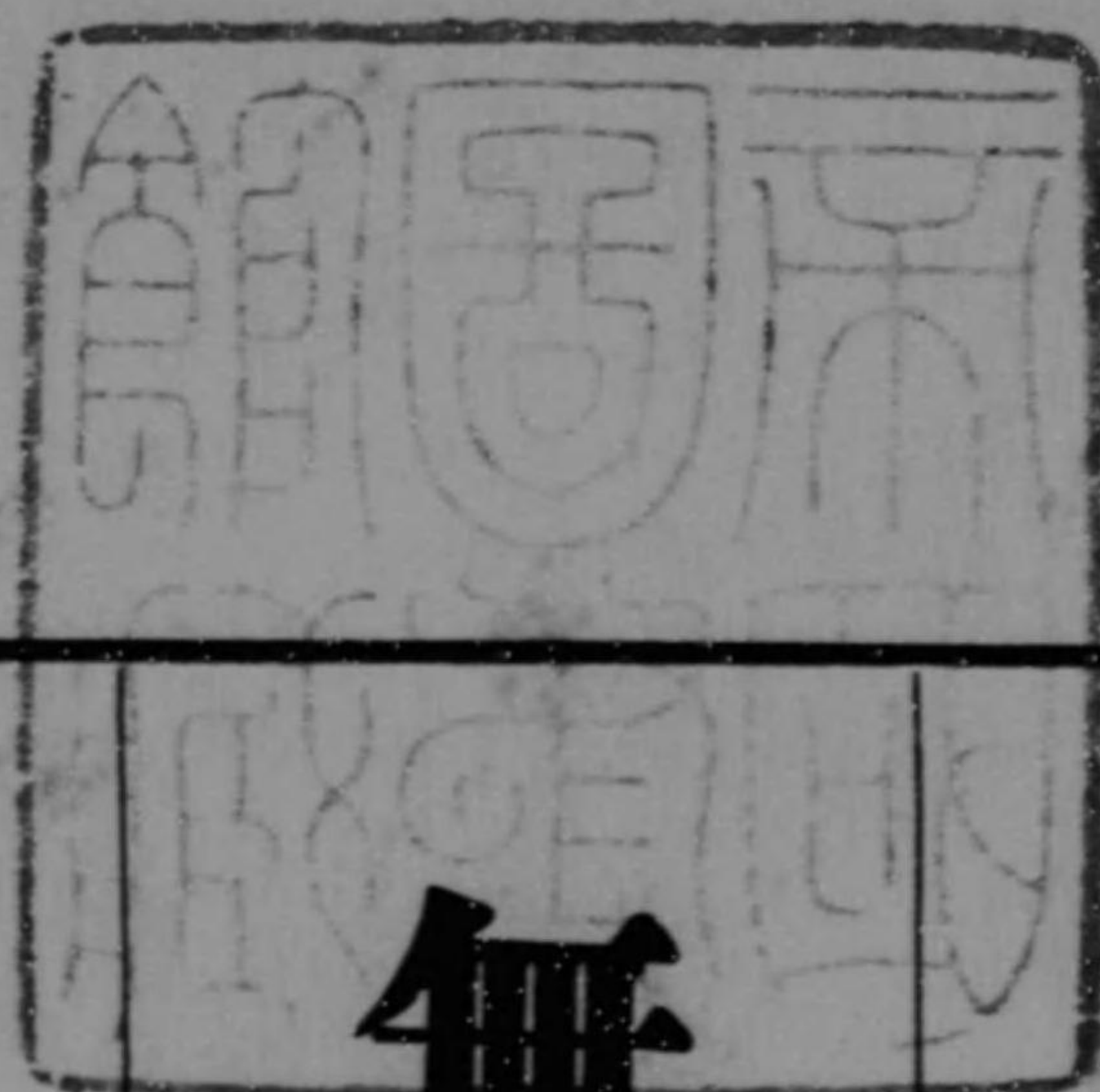
ADI

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



3-2326

(7)



小坂珠城著

無盡業態の研究

東京 文雅堂藏版



600-129

序

三千年の古き歴史ある我國に傳統的制度として取立て、云ふ程の金融機關の見當らない中に、獨り無盡のみが、既に五百年近くの歴史を持ち、一般大衆に廣く利用せられつゝある事實を見ると、若干の心強さを感じざるを得ぬ。その無盡を營業化せられたる無盡業が、翻譯制度の銀行、信託、信用組合等に伍し、僅かに命脈を保つて居たに過ぎないにも拘はらず、庶民金融機關の不備に恵まれて、近時漸く其存在價值を現はし、之が利用者の増加に連れ、世の注視するところとなつた。

過去の無盡業には、大なる弊害もあり、罪惡もあつた。然しそれは現行無盡業法實施前に屬することとて、之を以て直ちに現在の業者を責むるは當らない。勿論現在業者の中にも、亦現在の營業組織に於ても、内容を整備し、改善を加へ、時代に適應せしめなくてはならぬものゝある

べきは、否定すべくもない。唯此事實を見て、過去の弊害を責むるはあまりにも苛酷であると言はなければならぬ。

今や我國の庶民金融機關が甚しく一方に偏し、融通機能に缺ぐるところあることが如實に示され、朝野を擧げて其改善を論議せられておる。然るに現在の無盡業者は十數年の體驗を唯一の力として、何等の保護も受けず、助長策も講ぜられず、嚴格なる無盡業法取締の下に、着々庶民金融の實を擧げておる事實あるに拘はらず、あまりにも顧みられない實狀にある。

本書は現在の無盡業態を率直に記述し、併せて之が改善すべき點を研究せるものである。今之を公にすることは自ら顧みて甚だ忸怩たるものがあるが、若し之に依つて無盡業を廣く理解せしむることを得ば著者望外の幸である。尙不備誤謬の點あらば、大方の叱正を仰ぎ、訂正する機會を與へらるゝならば、幸甚とするところである。

終りに臨み本書執筆に當つて、多大の便宜を與へられたる關西商工無盡株式會社常務取締役中川元氏の厚意に對し深く感謝の意を表するものである。

昭和五年初夏新緑の候

大阪 田邊在

著 者 識

凡例

一、本書執筆に當つては左記著書を参考とせり。茲に謹んで著者並に編者に對し深甚の謝意を表す。

大藏省發行 大臣官房銀行課

無盡に関する調査

池田龍藏氏著

無盡の實際と學說

栗栖尠夫氏著

無盡及無盡會社論

淺野信一氏著

無盡の記帳と監理法

九沖無盡協會編

無盡研究錄

前田繁一氏著

庶民金融

全國無盡集會所編

無盡論文集

同

全國無盡會社要覽

同

無盡業法

一、全國に涉り多數會社より考課狀、營業案内、契約々款等の寄贈を乞ひ有力會社若くば特色ある會社のものを参考とせり。

一、書中會社名を掲出せるものあるも、特に優良會社のみものを掲げ、不良と認むべきものは社名の掲出を避けたり。

無盡の業態の研究

目次

第一章	總論	(一)
第一節	無盡の概念	(一)
第二節	無盡の沿革	(六)
第三節	無盡の目的	(一一)
第四節	無盡の種類	(一三)
第五節	無盡の組織	(一八)
第六節	無盡の方法	(二〇)
第七節	無盡の利害得失	(三五)
第二章	無盡業の現状	(三一)
第一節	概論	(三一)

第一款	無盡業法の制定	(三)
第二款	無盡業者	(三)
第三款	資産の運用と重役の責任	(三)
第四款	取扱及び処理方法	(三)
第五款	監督並に罪則	(三)
第二節	庶民金融機關としての無盡業	(三)
第一款	庶民金融機關の現状	(三)
第二款	無盡業者の機能	(四)
第三節	現在の無盡業社	(五)
第一款	業法實施後の移動	(五)
第二款	現在の業社數及契約高	(五)
第三款	契約高壹千萬圓以上の會社	(六)
第四款	個人經營無盡業の狀態	(六)
第五款	特異の無盡業者	(七)

第一項	相互組織的の大明無盡	(七)
第二項	個人經營無盡業者の異彩	(八)
第六款	無盡業者の資産狀態	(九)

第三章 無盡會社の見方

第一節	概論	(九)
第一款	資本金	(九)
第二款	契約高	(一〇)
第二節	考課狀の見方	(一〇)
第一款	概説	(一〇)
第二款	縦の見方	(一六)
第三款	横の見方	(二一)
第四款	考課狀の大體觀察	(二五)
第三節	其他の見方	(二四)

第四章 無盡業の損益

八

第一節 概論……………(一四七)

第二節 無盡利益金……………(一四八)

第一款 無盡掛金……………(一四八)

第二款 無盡益金……………(一五七)

第三節 収入利息其他の益金……………(一七四)

第四節 損失勘定……………(一七六)

第一款 概説……………(一七六)

第二款 會席費……………(一七八)

第三款 募集費……………(一八二)

第四款 集金費……………(一八三)

第五款 其他の經費……………(一八三)

第五章 無盡掛金者の損益……………(一八七)

第一節 概論……………(一八七)

第二節 掛金方法の相違による掛金者の得失……………(一九)

第三節 預金目的掛金者の利益……………(一九六)

第一款 預金利廻り……………(一九六)

第二款 入札差金配當金……………(二〇三)

第三款 奨勵金……………(二〇九)

第四款 當籤權讓渡益……………(二一一)

第四節 資金利用者の得失……………(二二)

第一款 概説……………(二二三)

第二款 無盡による借入金の利廻り……………(二二三)

第三款 契約者に對する便法……………(二二九)

第五節 無盡を不便とする點……………(二三三)

第六章 無盡業の改善策……………(二三五)

九

第一節 概論.....(三五)

第一款 庶民金融機關の不備.....(三五)

第二款 中小商工金融問題.....(三〇)

第三款 無盡業の地位.....(二四五)

第四款 無盡業の開拓方面.....(二五一)

第二節 無盡業法の改正.....(二五六)

第一款 限度貸付の擴張.....(二五九)

第二款 擔保品名柄選擇の自由.....(二六三)

第三款 無盡計理の改正.....(二六七)

第四款 無盡帳簿の改廢.....(二七一)

第五款 資本金の増額.....(二七三)

第六款 利益配當の制限.....(二七八)

第七款 支店出張所の制限.....(二八二)

第八款 其他の改正點.....(二八五)

第三節 業者の改善.....(二九一)

第一款 經營者の人的背景.....(二九一)

第二款 業界に人材を求めよ.....(二九九)

第三款 業者の一致.....(三〇三)

第四節 營業組織の改善.....(三〇九)

第一款 概説.....(三〇九)

第二款 掛金の統一.....(三一)

第三款 掛金の低下.....(三二四)

第四款 経費の節約.....(三二九)

第五節 非營業無盡の取締.....(三三四)

第一款 放任制度の弊.....(三三四)

第二款 取締の勵行.....(三四〇)

第六節 結論.....(三四五)

目次終

無盡業態の研究

小坂珠城著



第一章 總論

第一節 無盡の概念

無盡は我國古來より行はれたる金融機關にして、從來種々なる態様にて行はれたることあるも、現在の無盡業法は、其第一條に之が定義を下して「一定の口數(人員)と給付金額(貸付金)を定め、定期に掛金を拂込ましめ、一口毎に抽籤入札其他類似の方法により掛金者(即ち無盡契約者)に對し金錢の給付を爲すを謂ふ。無盡類似の方法により金錢又は有價證券の給付をなすもの亦同じ。賭博又は富籤に類似するものは此限りにあらず」とし、之に該當するものは無盡としての取扱をなすもの

である。

即ち無盡には必ず一定の人員を必要とする。其人員は十人たると二十人たるとを問ふところではない。それが一定の人員であれば差支へないけれども、無盡業者の取扱ふものは一組の人員は百名を超過しない事を原則とする(無盡業法施行細則第十條)。但し特に大藏大臣の認可を受けたる場合は此制限に依らざることが出来る(同條ノ二)。又無盡の給付金額は其無盡の成立と同時に一定せられて居なければならぬ。故に途中に此金額を變更することは出来ぬ。而して無盡加入者には定期に掛金を拂込せしめなければならぬ。故に加入者が既に無盡給付金を受領したる者と、未だ給付を受けざるものとの別なく必ず定期に掛金の拂込をなすべきものである。又給付金を受く者を定むる方法としては、一口毎に抽籤、入札其他之に類似する方法に依ることを必要とし、此抽籤、入札等により當籤若くは落札したる掛金者に對し金錢の給付を爲すものである。

以上の方法により有價證券の給付をすものを無盡と稱せらるゝものであるけれども、現在に於ては有價證券の給付をなす無盡業者はない(日本國債株式會社が無盡類似の方法にて有價證券割賦販賣を

營みたるも昭和四年十一月八日東京區裁判所に於て破産宣告を受けた。

斯くの如く、無盡には組合的の性質を含み、或一人の特定した出資者によつて資金を融通するものでなく、一定多數人から集めたる資金を其組合員に順次交付するもので、集められたるものは、直ちにそのまゝ融通されることゝなつてゐる。唯無盡を營業とする者に依つて組織せられたるものは、其業者の集めたる資金の中より、加入者へ給付金を交付するものであるから、一回毎に幾分の剩餘金あるを普通とし、此剩餘金は業者の手数料ともなり、利益ともなり、又掛金回収不能の場合に於ける、危険負擔の保険料ともなるのである。現今我國に於て行はれてゐる銀行信託會社、信用組合等は何れも歐米の制度を模倣せるものなるに拘はらず、茲に獨り無盡のみは、我國獨特の金融機關にて、既に五百年の歴史を有し、庶民金融に根強い力を持つてゐる。そこで英米に於ても近時無盡を研究するものあるに至り、之れを「ミューチュアル、フィナンシャル、アツソシエーション」(相互的經濟)と譯してゐる點から見ても、無盡なるものが學問的にも研究の價值あるものと言はれてゐる。次に無盡の法律上の性質に就ては消費貸借説と組合説の二説に分れ、判例の多

くは(明治三十五年六月十二日、同四十一年十月十五日)無盡消費貸借説を採り、石坂、岡松、鳩山、保田の諸學者は無盡組合説を主張してある。然るに無盡業法に依つて、營業として會社が無盡を取扱ふときは、特種の無盡契約だと言ふべきであらう。

茲に参考のため無盡に對する諸家の定義を摘記する。

一、大槻文彦博士著「言海」によれば

數人相結びて先づ期限何ヶ月金錢幾何と定め月毎に各其一分の金を出して圖を引き當りたるもの其金を得て利用し、斯くして順番に且つ出し且つ得る事貧困の人を救ひむとすることなり(又融通盡くることなしとて無盡とも云ふ)。

二、物集高見博士の「日本大辭林」によれば

金銀をかけて圖をひきて、圖にあたるもの、かわるがわるとるやうにしたるもの。

三、落合直文氏著「ことばの泉」によれば

數人相結びて或期限の間、毎月そくばくの金を積みその度毎に抽籤を行ひその金利にて雜費を仕拂ひ、籤のありたるものは、一ヶ月に出すべき金額より多き

豫定上の金を配付する事。

四、金澤庄三郎博士の「辭林」によれば

數人以上にて組合を結び、先づ總金額と期限とを定め、毎月集合して、各自その分擔額を醸出し、抽籤若くば入札を用ひてその總金額を當籤者若くば落札者に交付する組織。窮困者のために融通をはかるもの。

以上の説は、無盡の一面を語るも、その全般に涉らざる憾がある。而して無盡は我國古來よりの金融組織なるにも拘はらず、常に其研究を閑却せられたる所以のもの

一、外國の制度を模倣するに急なるため顧みられざりしこと。

二、斯る制度が外國には缺如せるため學者の注意を惹かざりしこと。

三、外來制度のみに心酔し、舊制度は餘りに通俗的にして、小問題なる如く見られ學術的研究價值なきものと考へられたること。

四、識者の眼に、弊害のみ映ぜし結果、顧るに足らぬ制度なりと速断せられしこと。其他中央の取締法なかりしたため、世人特に法律家の注意を惹かざりしのみならず

ず、其組織が地方により千差萬別にして、研究に困難なりし爲等の事由を擧ぐるを得るであらう。大審院判事尾佐竹猛氏は、古くより無盡の研究をなし、此制度を推稱せる論説を發表せることがある。最近に於ては池田龍藏氏著「無盡の實際と學說」が斯道研究に有益なる資料を提供してある。又東京市にある全國無盡集會所は全國の無盡業者を會員とし、斯業の發展向上に努め、無盡論文集、其他の著述を刊行し、之が研究に資すること多大である。然るに神戸正雄博士の如きは、無盡を時代遅れの有害無益の制度なりと主張してある。

第二節 無盡の沿革

無盡は無盡講又は頼母子講と言はれて、鎌倉時代に創始せられ、室町時代には盛んに行はれたものである。其初期に於ては、其目的が神社佛閣の祈願にありしものゝ如く、之に依つて神社佛閣の建造、修繕等の費を集め、若くば講員が神社、佛閣參拜の資に當つる等、多くは神佛を中心として組織せられたることは、嬉遊笑覽に、今世町人等、數を定め、醴金を集め、これを積み、年を経て伊勢參宮し、大々樂を奉るを太

々講といふ、伊勢講といふことは、斯くありしにや」との記事があり、又今より約五百年前の室町時代、香取文書に、香取神宮の相撲御神樂大饗の頭番が無資力の爲め、無盡を始めて神事を行つたことが現はれてある。鎌倉時代に於ける無盡は無擔保無利息なりしものが、室町時代に及んで漸次擔保を徴し、利息を附する相互救濟的制度となり、個人相互の經済機關となり、非常に重寶なるものとして、都鄙を通じて上下に涉り種々の名稱を以て行はれ、今尙盛んに行はるゝを見ることは、周知の事實である。

徳川時代に至つては、無盡講の利用せらるゝこと、頗る盛んにして、其組織方法も、室町時代に於けるものを繼承しながら、種々なる工風が用ひられた。即ち徳川氏が江戸へ幕府を立てて、江戸を政治の中心とするや、京阪方面の文物を江戸へ移入し、無盡も亦其當時江戸に入つて、盛んに利用せらるゝに至り、其組織方法等も室町時代に於けるものを繼承しながら種々なる工案を加へ、其目的も單なる救濟的、若くば共助的のものゝみに限らず、商工業者の資金融通機關となり、一般の放資機關化し、當時に於ける主要なる金融機關となつたのである。従つて幕府も取退無盡

の如き、變形無盡以外の無盡に對しては、何等干渉を加へず、自由放任主義の下に其自然發達に委して居たものゝ如くである。然るに一方に於ては、取退無盡と稱して、當籤若くば入札後掛錢をなさざるもの、又は富籤類似の、純然たる投機的のものも流行するもの多きを加へ、其弊害の恐るべきものがあるに至つた結果、八代將軍吉宗の享保、元文、寛保、明和年間に、數度に涉つて、嚴重なる取締をなし、幾度も御布令を發したるも、其效果なく、尙禁令を犯す者の多きに惱まされたことがある。

徳川時代に於ても、既に無盡を營業として取扱つたものがあつて、之を無盡世話人と稱し、掛金の取立、抽籤、入札事務を取扱ひ、其他給付金支拂ひ、質物の授受、鑑定等の手續一切をして居たものゝ如くである。

明治時代には、歐米より新たに銀行、信託會社、信用組合等の制度が移入せられ、無盡の活動範圍を侵蝕せられたるも、之等の機關の活動範圍には、一定の限度があつて、無盡は依然として庶民階級の金融機關としての根柢を有し、今尙地方に於ては主要なる金融機關の實を擧げ、一人にして數口に加入したるもの、珍らしくない實狀にある。即ち今日に於ても、地方農民は、無盡を利用して、田地購入其他農業資金

に充當するもの、若くば小商工業者の資金に利用せられつゝあるものは、尠くない。又小工業者が同業組合を作り、組合の名に於て無盡をなし、之に依つて其資金の融通を圖り、又は同部落民若くば同町内の人々が、親睦の目的を以て、無盡講を組織せられてあるものもある。

個人が無盡を營業として取扱ひしことは、前述の如く徳川時代に其端を發し、明治時代に至つても、益々盛んになつてあるけれども、法人組織による無盡を營業とする者の出たのは、大藏省調査に従へば、明治三十四年七月戸田喜三郎氏が、資本金壹萬圓を以て、東京市日本橋區に、共榮貯金株式會社を創始し、無盡の世話人としての事務を取扱つたものを以て嚆矢としたるも、同社は其後無盡業を廢止し、共榮貯金銀行の名の下に貯蓄銀行と化した。

明治三十九年頃には、會社數三、資本金僅々貳萬圓に過ぎざりしものが、其後營業無盡は逐年増加し、大正二年には實に會社數三百八十三、其資本金九百四拾萬餘圓に達した。斯く急激に増加したる理由としては

一、有産階級に對する金融機關の完備したるに反し、中下層金融機關が全然缺如

せること。

二、營業無盡の組織方法が、在來の無盡講と同様なるため一般の理解を得たること。

三、設立が容易にして、何等の制限なく、且つ利潤の多かりしこと。

等を挙げなければならぬ。然るに此時代に至つて頗る惡質の無盡業者が簇生するに至つた。即ち資本金を嘘り、甚しきに至つては幽霊會社名義を用ひ、不正入札、不正抽籤等にて、掛金の持逃げをなす等、其不正は極度に達し、其被害の大なるに鑑み、大正四年には無盡業法を制定せられ、無盡業に對する取締を嚴に行はるゝことになつた。ゆゑ、業法施行直前まで營業者八百三十一社の多さを數ふるに至りたるも、新法の定むる資格を缺如せるもの多數を出し、業務を繼續する能はざるに及んで、多數の廢業者があり、新法實施當時は營業を繼續するもの、僅かに百に足らざる激減振りを見せた。其後新業法による營業無盡は順調に發展して、今や其契約高拾億圓を突破するの盛況を呈してゐる。

第三節 無盡の目的

既に前節に於て述べたる如く、無盡は相互救濟、相互親睦等の目的を以て組織せられ、恰も相互生命保險の組織に似たるものもあるも、相互生命保險は保險金支拂原因が、被保險者の生存若くは死亡にあるため、給付原因が局限せられてゐるに反し、無盡に於ては、加入者の全部に涉つて、一定期間に必ず給付せらるるものである。且つ無盡に於ては、廣く一般的に救濟原因を存し、單に生存死亡のみに限らない。其他の點より見て、相互生命保險と其性質に於て、全然異なるものであることは言ふまでもない。即ち無盡が或特定人を救濟するがために多數人に幾分宛の犠牲を提供せしめ、後日に至つて、被救濟者が返濟に最も簡易とする、なし崩しの方法により決濟せしむることを、根本の主旨とせるもの最も多く行はれたるも、無盡の發達に連れて、種々なる方法を以て組織せられ、單に救濟のみの目的に止まらず、生産資金其他の資金の融通を目的とするものあり、一方には貯蓄を目的とするものがあり、純經濟機關化したものが頗る多い。其最も適例は、現在の營業無盡であること勿

論である。

現今最も廣く行はれておる一般の非營業無盡に就て其目的をみるところを見るに、

一、資金の融通を目的とするもの

小商工業者が、その營業を開始するに當つて、資金を調達し或は一部を整理資金に充て、一部を運轉資金に充つるものがあり、或は營業資金其他の不足を補ふがためにするものもあり、必ずしも一定して居ない。

二、貯蓄を目的とする

今日に於ては信用組合すらないやうな僻村は稀であるから、貯蓄機關の不足を告ぐることもなきが如きも、實際に當つては尙不備を免れず、寧ろ相互信用を基礎とし、確定せる相手方の信用に重きを置く等の關係から、貯蓄機關としては、無盡を利用するを、安全なりとするものも多く、且つ好利廻りにして、到底他の及ばざるものがあるがため、銀行所在地に於ても、眞に利殖のために、無盡に加入するものが多い。故に初めから融通方面に着眼せずして加入するものである。唯無

盡講全體が貯蓄のみを目的とする者のみに依つて、成立せらるゝものではないこと勿論である。

三、隣保罹災者等の救済を目的とするもの

罹災救助、負債償却、家政整理、其他生計上の難儀を救済するため、親戚、知己に援助を依頼して、講會を組織するものであつて、此場合の講員は、全部道義的精神より加入したものである。

四、物品の交付、又は特定行事のために、必要なる資金又は物品を得ることを目的とするもの

此場合の特色は、講員全部が、同一目的を有することである。即ち家屋建築、物品の購入、其他旅行、社寺參詣等の資金を要するとき、其資金を得る方法として組織する無盡にして、布團無盡、家具無盡、本願寺講、伊勢講、觀音講等其他種々なる名稱が用ひられてある。

第四節 無盡の種類

無盡は其觀察點を異にするにより、種々なる區別をなすことが出来る。

第一、目的より見て、種類を區別すれば、資金融通、貯蓄、救済、物品無盡となるものである。

第二、無盡の組織より見れば、

一、親無盡

二、親なし無盡

となり、親無盡とは、講の中心として親の存在するものである。親の名稱に關しては地方により異り、頭取、講元、講主、親元、親方等と稱せらるゝものにて、多くは無盡の被救済者を親と稱せられてある。救済無盡には、常に親の存在を前提として成立するも、爾餘のものには、必ずしも親が存在するものとは限らない。親の意義に關しては時により、地方により、一定したものがない。親が世話人なり、管理人となるものと、然らざるものがある。親なし無盡とは、親が存在しないで多くは第一回から抽籤、入札等によつて、被給付者を決定せられ、別に世話人、管理人があつて満會までの面倒を見るもので、現今の營業無盡は之に該當するもの

である。

第三、存續期限より見れば

一、短期無盡

二、長期無盡

三、無期限無盡

短期無盡には、數ヶ月を以つて満會となるものがあり、長期無盡には十數年に及ぶものがある。今日營業者によつて行はれて居るものでは、三ヶ年までのものを短期無盡と稱し、それ以上長期に渉るものを長期無盡としてあるやうである。營業無盡における最長期は十ヶ年となつてあるけれども、非營業無盡には、二十年以上に及ぶものすらあつて、斯る長期のものは、年掛とするを普通とせられてある。營業無盡に於ては、長期十ヶ年のものでも、月掛、二十日掛等に限られ、年掛とするものはない。又無期限無盡も非營業無盡に於てのみ見られ、一定の期限を定めず、順次繰返へしてあるもので、往々にして神佛に關する無盡に於て發見せられる。

第四、給付順序により分類すれば

- 一、抽籤無盡
- 二、入札無盡
- 三、抽籤、入札併用無盡
- 四、順番無盡

被給付者の順序を決定するには、抽籤、入札の方法によるを普通とし、多くは二者併用せられ、入札のみによるものもある。順番無盡は、非營業無盡にのみ稀に見るに過ぎない。無盡業法に於いては抽籤、入札の何れか、若くば之に類似する方法を以て、被給付者を決定することを必要としてある。又入札に就ても、無制限の入札を許さないうで、最低手取金高を契約々款に明記しなければならぬことになつてある。

第五、擔保の有無によりて分類すれば

- 一、擔保付無盡
- 二、無擔保無盡

給付金を交付するに際し、擔保を徴収するものと、被給付者の信用によるものと、別に保證人を立てしむるものがある。非營業無盡に於ては、月掛の短期なるものは、無擔保を普通とし、營業無盡に於ては五百圓未滿のものには保證人を立てしめ、それ以上には擔保を提供せしむるものが多いやうである。

第六、給付金使途により

- 一、條件付無盡
- 二、無條件無盡

とに分類せらるゝも、普通に行はるるものは、その使途には何等條件を付けない。給付金使途に條件を附するものは、伊勢講、本願寺講等の如き、特種の目的を以て、組織せられたる無盡に於てのみ見る現象である。

第七、營業者により組織せられたるものと、然らざるものにて

- 一、營業無盡
- 二、非營業無盡

との分類をなすものであつて、現行無盡業法によつて營業を認可せられたる業

者によりてなされる無盡を、營業無盡と稱せられ、業法の制限なく無盡講、頼母子講と言はれて、廣く非營業者によりて、行はるる無盡を、便宜上非營業無盡と稱せらるる。無盡業者にあらざるものが、無盡を營業として取扱ふことは禁止されてある。茲には營業無盡に關する記述を主とするものである。

第五節 無盡の組織

無盡講の成立は、各地の地方的慣習により、甚しく異なるものなるも、大體に於て、之を二種に區別することが出来る。即ち一は親無盡の組織にして、他は親なし無盡の組織である。之に對しては既に前節に於て略述せるも、其組織方法に就て詳述することとする。

親無盡は關西方面に於ては因講とも稱せられ、親又は講元となるべき者が、親戚知己の加入を乞ふため、大體の主旨を申出で同意を求め、或は初めより保證人を立てて、加入者を集むるものである。此場合の主意書は、各種各様のものがあるが、最も興味あるものとしては、大藏省調査に拘はる秋田縣の一例にして、小生の營業は

現在のままにては到底相立ち難く候に付此際商法に必要な資金を得度く候間御一人前金參圓掛の月無盡を御願申度候間特別の御援助相成度保證人連署を以相願候又かねて手許不如意の所近來一層の困難に陥り候に付御一人玄米一石宛の無盡御願申度候間特別の御援助を賜はり度保證人連署を以て相願候等の文言を用ひられてある。斯くして親戚知己の賛同があり、豫定數の加入人員に達するときは親の家に集合し、合議の上講會の規約を作成し、各自記名調印し、其場に於て第一回の講會を開くことを普通としてある。茲で定める講會の規約は、既に集會前に大體の骨子が定めてあるから、集會の席上では、細則を議し、且つ加入者全員の記名調印をするに過ぎないことが多い。そして無盡に對する各府縣の取締規則に従つて、管轄警察署へ届出づることを必要とする。

親なし無盡は、親となるべきものが所在しないで、單に講員のみを成立上の人的要素としてあるもので、共同施設に對する其部落民の戸主全部を擧げて講員とするとか、神佛に對する諸種の無盡の如きは、種々なる方法により組織せられるけれども、此無盡には特定人の所在なく、何れも平等の立場にあるものである。而して

親無盡に於ては、第一回講金の被給付者は當然講元であるに反し、親なし無盡は初回から抽籤又は入札の方法によつて被給付者を決定するものである。

第六節 無盡の方法

親無盡が主として親の救済を目的とし、親に組織せられ、親なし無盡が特定の親を有せず、講員全部平等の立場に於て組織せらるゝものなることは前節述べた通りである。斯くして成立した講會は其初回を開いて、規約を議定せられ、掛金、口數、入札、抽籤等他の方法を定めらるゝも、其方法に至つては千差萬別にして、之が説明は容易でない。茲には主要なる點に就て解説を試みるに過ぎない。

(一)會 席

親無盡に於ては、初會を親の家に集合して會食するを普通とし、次回以後は取り當つた者の家に集合するものと、親の家を最後まで會場として、親が會食その他の面倒を見なければならぬものとの別がある。親なし無盡には特定の會場を定めておくことが多い。而して其會食は相互の親睦若くは來會を促すを目

的としてなさるるを普通とする。會食は單に茶菓に止まるものがあり、食膳にも種々なる階級があつて講會の規模によつて異なるは勿論である。此會食の制度は無盡が創始せられたる當時より行はれたるものゝ如く、現今の營業無盡に於ても行はれ、無盡會社の經費としては此會席費が多額に上り、俸給手當費、募集費、集金費に次ぐ經費となつてゐる。

(二)會の期間、一組の口數、一回の掛金

會の期間は數ヶ月を以て、滿了するものがあり、甚しきに至つては五十年に及ぶものすらある。一組の口數は數口に止まるものがあり、百人以上に及ぶものがある。一回の掛金も亦口數、講金の異なるによつて千差萬別であるけれども、地方的慣習により、同一地方では略同一方法によつて行はれるものである。例へば十六人を以て一組とするとか、二十五人を以て一組とするとかの相違はあるが、十六人一組とする地方では、殆んど之に倣ふが如く、殆んど同一地方では口數は同じである。そして一口の掛金は近來頗る多額に上り、一口萬圓に達するものもある由なるも、筆者の知る範圍に於ては一口壹千圓位を最高額とされてゐる。

假に二十五人一組の講會に於て一口壹千圓の掛金だとすれば、總額貳萬五千圓の講會となり、無盡の本質を超越して、有産階級の機關化してゐる。

營業無盡に於ては、此點に關し制限を加へ、期間五年給付金額千圓、口數百を越ゆることが出來ぬ。但し特に大藏大臣の認可を受けたる場合には、此制限に依らざることを得る。

(三)抽籤又は入札の方法

抽籤の方法には別に定まつた形式はない。入札の方法には種々なるものがある。即ち手取金額を入札せしむるもの、或は掛金總額と手取金額との差額を入札せしむるもの等がある。例へば掛金總額百圓の無盡に於て六拾圓ならば借用するといふものは前者にして、講金百圓と借用金の差額が四拾圓ならば借用するとするものが後者に屬する。非營業無盡に於ては、此落札差金に關し何等制限なきため、法外の差額を以て落札するもの多く、殊に年掛長期無盡に於ては、金利採算上若くば長年の間に豫期せざる面倒が惹起するを恐るれ、掛金總額の半額以下を以て手取金額とするものは其例が多い。營業無盡に於ては、入札

差金を三割限度とし、七割以下の手取金とするとは出來ない。

又割増金或は利子の入札を行ひ、多額の割増金又は高歩の利子支拂をなす者を落札者とする場合もある。

(四)花 圖

花圖とは一定の金額を掛金中より除外し、之を人員に應じて差等ある金額に區分したる圖を作り、抽籤の上各自之を取得するものであつて、之により掛金の減少を計り、一面餘興的に、講員の射伴心をそゝり以て缺席者防止の一助とするものである。

(五)擔 保

講會の種類によりて必ずしも一定して居ないが、壹千圓以上の講會に於て講金を受くるときは、未拂込掛金に相當する擔保を提供せしむるを普通とし、壹千圓未滿のものは、其講會の講員を、保證人に立てしむることを要求するものがある。此點は營業無盡も略同様であるが、保證人のみを以てするものは、五百圓以下とするを普通としてゐる。

(六)親及講管理人の責任

親とは前述せる通り、無盡講によりて救済せらるるものの意にして、親が同時に管理人となることがあり、或は他の講員一人、若くば數人を、管理人として選定することもある。此管理人の性質は、單に擔保の鑑定、並に講會の契約書類の保管をなすに過ぎざるものがあり、或は管理人が、講會開催其他事務一切を掌るものがある等、其責任の程度は區々にして、一に無盡講契約によつて定められてゐる。然るに講會規約において、講に關する責任は發起人總て之を負擔す、又は會員中當籤又は落札後萬一返金せざる等の事有之とも會主責任を負ひ他會員へ毫も迷惑損失を掛けざる事等と規定せるもの、如きは、正に營業無盡の域に達したるものと云ふべく、講會の名を藉りて、營業無盡の範圍を犯するものであると云はなければならぬ。

而して親なし無盡に於ては、初回に於て役員を選定する。此役員が營業無盡に於ける業者の事務を掌り、業務執行の任に當るものである。親無盡に於ては親が講管理人になることあるも、必ずしも一定して居ない。又會食其他の費用を負擔するものは、親の場合があり、順次廻り持ちとする場合があり、頗る區々たるものである。

第七節 無盡の利害得失

現在の無盡業法を立法するに當つて、大藏省に於て取調べたる利害得失は就ては、同省發行の「無盡に關する調査」により發表せられてある。之によつて見れば其長所としては

- 第一、商工業資金を得る方法として舊慣の久しきこと。
- 第二、細民の加入に便なること。
- 第三、細民貯蓄心の獎勵となること。
- 第四、質屋又は高利貸よりも低利なること。
- 第五、無盡によつて得る資金は、比較的長期にして且つ定期濟崩拂であること。
- 第六、無擔保の貸付を受くること。
- 第七、共愛的の道德的方便たるの特色を有すること。

次に短所としては
第一、當籤の時期如何により、會員間に資金に對する利率の相異甚しき缺點のあること。

第二、落札金額の甚しく低額に達することあること。

第三、隨時に融通を受く能はざる不便あること。

更に無盡を營業として取扱ふに當つての弊害並に業者の不正に關しては左の數點を指摘してある。

第一、會社基礎の薄弱なること。

第二、會社積立金の不足せること。

第三、會社が手数料其他の名義を以て取得する金額の多きに過ぐること。

第四、會社副業の多きに過ぐること。

第五、概して細民に對して殘酷なる強制を敢てすること。

第六、會員間に相識關係なく又會社の帳簿整理不備なる結果會員は不測の損害を受くることを知らざること。

第七、會社の資本金拂込を詐はること

第八、役員の身元不確實にして詐欺、文書偽造、横領、窃盜等の前科者多きこと。

第九、一組の不足會員を虛無の會員を以て補足し、又は役員及役員關係者の持口多く、甚しきは一組の半數以上に達するものあること。

第十、役員及役員關係の掛金は、空傳票を以てし、掛金の拂込は之をなさずして、常に抽籤、入札をなし、當籤落札により拂渡金と掛金とを相殺すること。

第十一、前二項の結果又は掛金滞納者多きため、拂渡資金に不足を生ずるとき、又然らざるも故意に言を左右にし、當籤落札者に拂渡をなさざること。

第十二、抽籤、入札に不正手段を施し、會社側に當籤又は落札すること。

第十三、故意に掛金を延滞せしめ、營業規定により退會者と見做し、掛金の一部を手數料として沒收し、殘額は満期迄抑留すること。

第十四、既に拂渡しを受けたる會員に對し、故意に掛金を遅滞せしめ、突然差押へをなすこと。

第十五、拂渡資金缺乏の結果は、種々なる犯罪行爲を誘致すること。

第十六、會員募集に付き、勸誘員に對し、一口幾何の報酬を與ふることとする結果、勸誘員は猥りに會員を勸誘し、會社亦會員の選擇をなさざること。
第十七、猥りに名門名士の名を連れ、會社の信用を維持せんとし一般を瞞着すること。

以上の如く何等取締法規の存せざりし當時の營業無盡は甚しく亂脈に流れ、弊害の多かりしに鑑み、大正四年無盡業法を制定實施せらるるに至つた。それがため以上の弊害を一掃して不正を行ふ餘地なからしめ、契約者に損害を及ぼしたるものを聞かず、堅實なる發展を見るに至つた。尙無盡業法制定に際し、當局より各地商業會議所の意見を徴したるところ、大阪商業會議所よりの意見は左の通りである。

第一、便利とするところは

- 一、細民を加入せしむるに容易なること。
- 二、商工業の小資金を得るに至便なること。
- 三、細民の貯蓄心を奨励すること。

四、金利の比較的低廉なること。

五、返金年限の長くして月賦崩済の便あること。

第二、其弊害とする點は

- 一、講主及管理人の身元資力薄弱なるもの多きこと。
- 二、落札金額の甚しく低額に達する場合あること。
- 三、講會が開講及公正證書作成の費用其他の名義を以て取得する金額の多きに過ぐるること。
- 四、講會の不統一なること。

而して之が改善助長の方法として大阪會議所の意見は

- 一、會社若くは合法的組合組織たらしむること。
- 二、會社又は組合の基礎を強固ならしむるため特別法を必要とすること。
- 三、法律若くは命令を以て或程度迄講會業務の方法を規定すること。
- 四、課税を軽減すること。
- 五、講會の業務執行を監査するがため、講員をして隨時帳簿の臨檢をなさしむ

以上の意見の殆んど全部は新法に採用せられてある。

第二章 無盡業の現状

第一節 概論

第一款 無盡業法の制定

無盡業者の亂興と其弊害に懲りたる當局は、大正四年六月二十一日法律第二十四號を以て無盡業法を公布し、同年十月勅令第七十七號を以て翌十一月一日より實施せられ、其後大正十年三月法律第一號にて改正せられたるものが現行無盡業法である。

既に述べたる如く、無盡業の弊害防止を目的として生れた現行法は、當時に於ては甚しく嚴に失し、或は斯業を保護、助長するの精神を缺き、徒らに壓迫を加へたる嫌があり、單なる取締法に過ぎないものであるが、今日から見れば、斯業の健全なる發達を促したることとなり、免許無盡業者にして、掛金者に迷惑を及ぼしたるものは頗る僅少に止まる状態となつた。

第二款 無盡業者

無盡の營業は、主務官廳たる大藏大臣の免許を受けなければ之をなすことが出來ない(業法第^{二條}第^{二條})。又營業として無盡の管理をなすは、之を無盡業と看做されてあるから、營業無盡は必ず免許を得なければならぬ。營業として無盡の管理をなすものであるか、非營業として管理するものであるかの區別は困難であるが、未だ地方に於ては、講會の名を藉りて無盡の管理をしてあるものが多數に及ぶ由であるが、之等は明らかに脱法行爲であり、之が取締を必要とせられてある。

無盡業を営む會社の、資本金總額は參萬圓、其金錢を以てする拂込金額は壹萬五千圓を下ることが出來ない。會社に非ざる營業者に對しては、別に出資の制限がなく、現在に於ても五千圓の資本を以て免許無盡を營んであるもの全國に數人に及び、相當成績を擧げてあるものゝ如くである。

無盡業を営む會社は、其商號中に無盡なる文字を用ひ、會社にあらざる無盡業者は、其營業を表示する名稱を附し、其名稱中に無盡なる文字を用ひなければならぬ。之に反して無盡業者にあらざるものは、其商號又は營業を表示する名稱中に無盡

なる文字を用ふることは出來ぬ。蓋し無盡業の免許事業たる本質に鑑み、契約者其他一般をして、之を他の類似業務より容易に鑑別せしむる便宜を與へんがため、無盡業に限り「無盡」なる文字の使用を命じたるに外ならぬ。

次に無盡業を営む會社は、他の事業を兼營することは絶対に出來ない。唯會社にあらざる無盡業者が、他の事業を兼營せんとするときは主務大臣の認可を必要とされてある。

無盡業者の營業區域は道府縣の區域内に限られ、會社に於ては其營業區域を定款中に記載しなければならぬ。同業の競争を防止し、支店出張所濫設の弊なからしめ、且つ契約者が營業者の状態を知るに便ならしむるため、區域を限定したものと思はれる。

第三款 資産の運用と重役の責任

無盡業者は左の方法によるの外、其營業上の資金を運用することが出來ない。
一、國債證券、地方債證券、其他特別の法令により設立したる會社の債券、又は株券の買入

- 二、前號の有價證券又は不動産を擔保とする貸付
- 三、掛金者に對し、契約給付金額を限度とする貸付
- 四、銀行への預け金又は郵便貯金

以上の如く、無盡業者の營業上の資産運用は、頗る限定せられ業礎の堅實を期してある。

次に無盡業を營む株式會社が會社財産を以て、其債務を完済すること能はざるに至りたるときは、無盡契約に基く會社の債務に付、各取締役は、連帶して、其辨償の責に任じなければならぬ。取締役が退任の登記をなしたる後、尙二年間は此責任は、存続するものである。故に會社が破産したるときに於ても、取締役は無盡契約に基く債務に對して、無限の責を負はされ、之によつて無盡契約者を保護してある。尙無盡業者は、何人の名義を以てするを問はず、自己の計算に於て、其經營する無盡に加入することが出来ないのみならず、會社の業務を執行する社員、取締役、監査役及使用人は、何人の名義を以てしても、自己の計算に於て、會社との無盡契約は禁止されてある。斯くて明治末年より大正初頭にかけての、無盡業亂興時代に行はれ

たる不正の防止に努めてある。

第四款 取扱及び處理方法

無盡の取扱方法は業者により異り、各種各様になつてある。之等に就ては次章各節に於て記述し、茲には業法に定むるところを述ぶるに過ぎない。

無盡の缺口又は掛金の拂込をなさざる者があつても、第一回の抽籤、入札の後は、給付金額を減少し、又は掛金の増額をしてはならない。即ち給付金額や、掛金は變更することは出来ない。従つて缺口を生じ又は掛金の拂込なきものに對しては、無盡業者が代つて掛金の拂込をなすべきこととなつてある。

無盡業者は、其管理する無盡の加入者に代り、掛金の拂込及給付金の支拂に關し、一切の裁判上又は裁判外の行爲をなす權限を有し、掛金の拂込又は給付金の支拂に關する訴に於ては、無盡の管理者は原告又は被告となることが出来る。そして此訴に於て言渡したる判決は、無盡の加入者に對しても、未拂込掛金を限度として其判決の執行力を生ずるものである。

無盡業者は、毎半年、事業の報告を作り、主務大臣に提出し、併せて貸借對照表を作

つて、新聞紙又は事業方法書に定めたる方法により、公告しなければならぬ。

無盡の掛金者は無盡業者に對し、營業時間内、何時にても、前半年末貸借對照表の閲覽を請求し、又は其加入したる無盡の掛金者五分の一以上の同意を以て、前條の帳簿中其加入したる無盡に關する部分の閲覽を請求することが出来る。

次に無盡業を營む會社は、資本金、又は出資の總額に達する迄は、利益を配當する毎に準備金として、其利益の十分の一以上を積立てなければならぬ。此點は現行銀行法と同様である。

第五款 監督並に罪則

無盡業の堅實なる發達を期し、併せて掛金者の利益を保護する目的を以て、嚴重なる監督が行はれてゐる。即ち主務大臣は何時にても無盡業者をして、其事業報告をなさしめ、又は業務及び財産の狀況の検査をなすことを得るのみならず、事業方法の變更、又は事業の停止を命じ、其他必要なる命令をなすことが出来る。そして法令、定款又は主務大臣の命令に違反し、其他公益を害すべき行爲をなしたるときは、主務大臣は事業の停止若くは役員の改任を命じ、又は免許を取消すことを得

ることゝなつてゐる。此事業報告をなさしめ、又は業務及財産の狀況を検査することは、管轄地方長官をして行はむることが出来る。

主務大臣の免許を受けずして、無盡業を營みたる者は千圓以下の罰金に處せらる。そして左の場合に於ては、業務執行社員、取締役、監査役を十圓以上千圓以下の過料に處せらるゝことに定められてゐる。

- 一、他の事業を兼營し、主務大臣の認可なくして資本金額、營業所、事業方法、無盡契約約款等を變更し、又は資金運用規定に反したるもの及び自己經營の無盡加入、給付金額の變更其他事業報告、公告、法定帳簿の備付等に反したるとき。
- 二、定款規定の營業區域外に於て營業をなしたるとき。
- 三、主務大臣より無盡契約約款の變更を命ぜられ、又は事業方法の變更、事業の停止等を命ぜられ之に違反したるとき。
- 四、掛金者より要求する帳簿の閲覽を、正當の理由なくして拒みたるとき。
- 五、主務大臣より事業報告を命ぜられながら、其報告をなさず、又業務及財産の検査を妨げたるとき。

六、無盡契約を禁止せられたる會社の業務執行社員、取締役其他の使用人が無盡契約をなしたるときは、之等社員、取締役、使用人等が過料に處せられ、又其相手方なる會社の業務執行社員等も等しく過料に處せらるゝものである。

七、法定積立金を怠りたるとき。

以上の外無盡業者に非ざるものが、其商號又は營業を表示する名稱中に、無盡なる文字を用ひたるときは、五圓以上五十圓以下の過料に處せらるゝものである。

第二節 庶民金融機關としての無盡業

第一款 庶民金融機關の現状

庶民階級と稱せらるゝもの、實數を確然たらしむることは困難であるが、大正十三年度大藏省主税局年報に現はれたる第三種所得税の總所得と納税人員別及び無納税者に就て、その大體を観察することが出来るであらう。

一、舊税法の所得法定額に達せず従つて、第三種所得税を納めざるもの
 (イ) 現在の人口百に對し 九六、九七

(ロ) 現在戸數百に對し 八七、六八

二、第三種所得税を納むる者

(イ) 現在の人口百に對し 三、〇二

(ロ) 現在の戸數百に對し 一一、三二

右の内舊税法納税者の總所得額人員表(十三年度)

總所得額	人員	(内家族)
(年收) 八百圓以下	四三、九八二	一、四五七
千圓以下	五一四、七九六	九八、〇八三
千五百圓以下	五五七、七四〇	一三三、六九一
二千圓以下	二二二、二七八	六〇、六八〇
以上合計(月收百六十六圓以下)	一、三四八、七九六	一、三四八、七九六
三千圓以下	二〇三、五七六	五六、〇一四
(右は月收二百五十圓以下)		

東京市政調査會に於ては、年收三千圓月收二百五十圓までを庶民階級と名付けてある。第三種所得納税者中月收二百圓以下のものを庶民と見る場合の庶民階級の員數と、月收二百五十圓以下のものを庶民と見ての納税人員とを算出すれば、左の通りで、第三種所得納税者のみに就て見るときは、その八割内外は庶民階級と

なるのである。

庶民階級	月収二百圓以下を庶民と見る場合		月収二百五十圓以下を庶民と見る場合	
	一、四五〇、五八四	七八、四一	一、五五二、三七二	八三、九一
資産階級	三九九、四三三	二一、五九	二九七、六四五	一六、〇九

斯く多數の庶民階級に對する金融機關としては、貯蓄銀行、信用組合其他多數を算するも、其多くは貯蓄機關としての效用をなすに止まり、融通機關としては未だ全からざるものがあり。ために個人貸金業者が跋扈して高利の貸付をなし、大藏省主税局調査大正十四年三月末現在に於ける、金銭貸付業として納税するもの、實に七萬六千二百餘人の多きに達してある。此中私營質屋業者壹萬七千餘人を除くも、尙五萬八千餘人に及び、之等の貸付金利は日歩三十七錢を普通とし、甚しきに至つては日歩二圓といふ驚くべき高利を貪つてあるものさへある。之等貸金業者の貸付金額を知るは、調査統計が不備なるため、確實なる數字を擧ぐることは出來ないが、大正十四年末大藏省調査によれば、金銭貸付業者七萬六千餘人、其貸付金額七億三千三百二萬圓となつてあり、その中質屋業者が一萬七千八百五十二人、此

運轉資金一億五千五百八十萬圓あるから、それを差引きたる残り五億七千七百二十十數萬圓が、個人貸金業者から融通されてある。最近に於ては、京阪神の間に於て小口貸金業者が跋扈して、年利二十數割といふ不當なる高利を貪つてある事實もある。

茲には現存庶民金融機關の現状に就て簡単に記述する。

第一、貯蓄銀行

大藏省調査昭和元年十二月末現在の貯蓄銀行數、及び資本金其他は左の通りである。

本店數	支店及出張所數		公稱資本金 千圓	拂込資本金 千圓	積立金 千圓
	一、二四	五九五			
預金	拾四億壹千四百參拾九萬參千圓				
貸出	參億八千四百七拾六萬九千圓				

日本銀行調査昭和四年十月末現在の貯蓄銀行の預金及び貸出金總額は

即ち貯蓄銀行は、庶民階級より吸收せる預金の參割七分を貸出せるに止まり、六

割五分を公社債其他へ放資してある現状にある。
 大藏省調査大正十四年十二月末現在にて、貯蓄銀行の預金々額別人員を擧ぐれば、

金額	人員	百分比例
五十圓以下	六、八九八、五四〇人	八四、九六
五十圓以上	同	同
百圓以上	五、四五五、一〇一人	六、七二
同	同	同
五百圓以上	五〇六、六三三人	六、二五
同	同	同
千圓以上	九八、九二二人	一、二二
同	同	同
同	七〇、一五五人	八五

となり、之によつて貯蓄銀行が、如何に零細なる努力の結晶であり、又庶民階級の貯蓄機關として利用しつゝあるかを知り得る譯である。然るに貸出金は、總預金の參割七分に止まり、殆んど庶民階級の利用するところとならない。即ち貯蓄銀行は庶民階級の貯蓄機關としての機能を發揮するに過ぎない實狀にあるものと言はなければならぬ。

第二、信用組合

信用組合は獨逸の協同組合に例に採つて、出資金其他に制限を設け、資産階級の

獨占到歸せしむることを妨ぎ、庶民階級が相互に自己の力に應じて零細なる資金を出し合ひ、預金の取扱をなし、又は資金の融通をなし、組合員の家計を補助改善し、且つ生産的活動を助成し、組合員相互に勤儉力行の氣風を助長して、その地位を向上せしむることを目的とする非營利的な相互扶助機關となしたるものである。信用組合は産業組合法によつて設立すべきものであつて、農林大臣の主管に屬してゐる。而して我國の産業組合数は昭和二年十二月末現在に於て、壹萬四千壹百八拾六個の多數を算し、其内の大部分は信用組合單營、若くば信用組合を兼營するものであつて、産業組合にして信用組合を經營しないものは、僅々壹千七百四拾個に過ぎない實狀にある。

今試みに信用組合の増加數を調べて見るときは、大正十四年までは、左表の通り漸次増加してゐる。

年 末	市町村數	信用組合數 (兼營包含)	同上單營數	市街地 信用組合
明治三三年	一四、〇六九	一三	一	一
同 三八年	一三、四三七	九八六	九八三	一

同 四三年	一二、三九三	五、三三一	二、二一九	—
大正 四年	一二、三二九	九、七三八	三、〇一五	—
同 九 年	一二、一九五	一一、九〇一	二、六五〇	六五
同 一〇 年	一二、一九一	一二、一九二	二、五三三	八五
同 一 一 年	一二、〇九二	一二、四七八	二、四四二	一二六
同 一 二 年	一二、〇九二	一二、七〇七	二、四九一	一七五
同 一 三 年	一二、〇四七	一二、八六四	二、五三六	二〇一
同 一 四 年	一二、一〇九	一二、八八〇	二、正七三	二二四

以上の如く増加せる信用組合も、昭和元年には組合數百四十四個を、昭和二年には百八十七個を減じてゐる。然かも尙且つ一市町村に一個以上の信用組合を有する状態にある。

次に昭和元年十二月末現在の資金状態は左の通りである。

拂込 出資額	借 入 金	準備金積立金	貯 金	金
一六三、八〇八、七二八 ^圓	一一五、五三六、〇二一 ^圓	七三、三七三、六五四 ^圓	四七六、一八八、五一六 ^圓	
貸付	六四一、六〇八、六一七 ^圓			

信用組合の資金は、各組合員が一口以上の出資をなしたものと、組合員及其の家

族のなせる貯金、並に各種團體、又は組合員以外の預金等が主たるものである。組合員の出資額は、大正十三年度末に於て、兼營のものを合算した組合では、一組合員當りが三十八圓餘であり、市街地信用組合に於ては、百四十六圓餘となつてゐる。組合員の預金に至つては、組合の非營利的相互扶助的の性質に鑑み、其利率が銀行預金利子に比して、高率であるのと、資金を必要とするときは、何時でも大體無擔保で借り得るといふ便宜があるために、庶民階級の貯蓄心を助長するに甚だしき効果があつて、年々貯金高の増加を示してゐる。而して組合員の平均貯金高が、僅々百五十八圓に過ぎない點から見て、如何に信用組合の資金が庶民階級の零細な資金の結合であるかを知ることが出来る。

前述せる如く昭和元年十二月末に於て、六億四千百六拾萬餘圓を貸出せる信用組合は、組合員拂込出資額、及貯金の合計額を超過すること壹百六拾壹萬餘圓にして、之れは借入金で以て補充してゐる實狀にあつて、資金融通機關としての機能をも充分發揮せるものと言はなければならぬ。更に資金貸付状況を見るに左の通りである。(大正十三年十二月末現在に於て)

單獨、兼營の信用組合 (調査組合数一、九七九)

四六

擔保の有無別		件数		金額		一組合平均		一件平均	
無擔保	有擔保	一、五九一	五四〇	三二二、六七七	四二一	二五、五二一	一九六	一、六九七	八五四
有擔保	無擔保	一八七	六四六	一四〇、一六五	五六六	一一、七〇一	八五四		
市街地信用組合 (調査組合数一一〇二)		擔保の有無別		金額		一組合平均		一件平均	
無擔保	有擔保	三二	〇四八	一九、六一一	一四五	一	六一二		
有擔保	無擔保	一五	四六七	二六、四四七	八六六	一	一、六九七		

之れに依つて見れば、無擔保貸付が擔保付貸付に比し、遙かに多額を占むることは對人信用組合員の相互扶助を目的とする組合本來の性質上、當然のことといはなければならぬ。又貸付件数の非常に多いことは、庶民階級が如何に生産的資金を要求するもの、如何に多きかを知ることが出来るであらう。唯現今の信用組合は、徒らに數のみ多くして、其内容の充實せざることである。加ふるに其經營者に適任者を得る能はず、單に資金の確實保存をのみ旨として、殆んど死藏的に銀行其他に之を預金し、或は自己のため、若くは自己の情實によつて不健全なる資金運用をなし、爲めに破綻解散の餘儀なきに至るものあるは、信用組合が庶民階級の金

融機關なる本質に鑑み、殊に遺憾とせざるを得ないところである。

第三質 屋

内務省社會局調査によれば、我國に於ける大正十四年三月末現在の私營質屋は壹萬七千八百五十二に達し、其取扱口數貳千四百五十二萬參千七百五十七件、その貸付金額壹億五千五百八十萬九千餘圓に及んでゐる。今假りに私營質屋利用者が一ヶ年平均四回入質するものとすれば、入質者は六百拾參萬餘人となり、一年平均五回の入質と假定して、質屋利用者は四百九十餘萬人となり、質屋利用者の多きを知ることが出来る、質屋利用者の多くは細民である。内務省社會局の調査によれば、一人當りの金額六圓參拾五錢となり、東京市勢調査會の調査によるときは、口數に於て壹圓以上五圓以下のものが最も多い。而して入質物に對しては、時價の三割乃至五割の貸付をなし、利子は普通三割六分(日歩八厘)であるが、質受けに際し利子の「オドリ」があるため、利子も高率となつてくる。利率の如何に拘はらず、細民階級に對する資金融通として重寶がられ、救ひの神とされてゐる。

營利を目的とする私營質屋を以てしては、細民階級の資金融通に缺ぐるところ

あるため、公益質屋の出現を見るに至つた。此公益質屋は大正元年十月、宮崎縣の一漁村畑田村に於て、荒天旬日に及び、漁民の生活が窮乏に頻し、高利に悩み、疲弊は其極に達したる際、同村長が村の基本財産五千圓を繰入れて特別會計を設置し、村民に對し比較的低利に融通することゝした。之が即ち我國に於ける公營質屋の元祖である。其後東京市を初め、各地に設立せらるゝに至つた。内務省社會局調査昭和三年五月末現在に於ける公益質屋數は五十一、其業務所數八十四個所、貸付金貳百六拾貳萬八千圓に達してゐる。此貸付金財源は左の通りである。

預金部低利資金借入

簡保資金借入

基本財産其他

三五八、八二〇

六〇八、四三九

一、六六一、六五〇

公益質屋の貸出率は、質物評價價格の十分の七以内とされてある。私營質屋の中にも名古屋市に評價價格の十分の九五を貸出す例がある由なるも、實際に於ては十分の七以下を普通とし、全國の私營質屋平均貸出歩合は十分の三乃至五位に止まるから、之に比すれば公益質屋の貸出歩合が多い譯である。そして一口の貸出金額は十圓以内を普通とし、五十圓迄貸付けるものは僅かに北海道と長崎縣に其

例を見るのみである。公益質屋の貸出利率は、大體に於て月二分以内である。少額貸付には無利息とするものがあるけれども、何程の金額に對しても、同率の計算をなすを普通とされてある。それに私營質屋の如く、所謂「オドリ」がなく、質屋利用者には最も有利である。然るに公益質屋は僅かに五十一に過ぎないため、未だ利用者を満足せしむることが出来ない。茲に於て政府は公益質屋の普及と改善を圖る目的を以て、第五十二議會に公益質庫法案を提出して協賛を経たるを以て、昭和二年三月三十日法律第三十五號にて公布し、同年四月一日より實施せらるゝに至つた。政府は本法に基いて建設費と諸設備費の半分を國庫から補助し、一方に於ては、大藏省預金部からも、低利資金を融通して、市町村及公益法人の公益質屋の増設普及を助長促進することゝなつたのであるから、今後公益質屋も漸次増加して、細民階級の資金融通を便するであらう。

最近に於ては、私營質屋業者は、公益質屋の擴張に團結して反對の聲を擧げてゐる事實もある。

第二款 無盡業社の機能

無盡は、廣く庶民階級を相手とする金融機關であることは、信用組合、質屋等と同様であるけれども、其組織方法に於て異なるものがあり、且つ質屋と共に、古くより我國獨持の金融機關として、廣く一般に利用せられ、無盡によつて救済せられ、或は營業を繼續することが出来、一面には資金の蓄積をなして營業を開始する等、其效益の大なるものがあり、多數庶民階級を利せしめたることの多大なるは疑ふの餘地がない。諸種の金融機關が整備せられたる現時に於て、尙且つ講會による無盡の數は莫大なるものがあり、その契約金額に至つては何等據るべき統計なきため、精確なる數字を知るは勿論不可能なるも、全國に於ける現在契約高は百億に達するものと言はれ、無盡の潜行式勢力の偉大なるは否定すべくもない。

講會による無盡、即ち非營業無盡は、如何なる地方に於ても行はれ、且會員以外の第三者に、利益を取得せらるゝことなく、會員相互に於て、利害を別ち、且つ之を共にする利益あるは、争はれないところであるけれども、講會の管理、若くは會員募集等、其他に於て、多くの勞力及び費用を要し、種々なる面倒を生ずるため、營業無盡を利用するの利益あるを認めらるゝに至つたものである。

庶民金融機關として期待せらるゝことの多大なる信用組合は今や普通銀行化し、既に頭打ちの感を抱かしむるものあるに拘はらず、中小商工業の金融問題に關しては、常に話題の中心となりつゝあるも、今後に於て果して何程の働きをなし得るやは大なる疑問だと言はなければなるまい。

等しく庶民金融機關にしても、質屋利用者は、東京市政調査會の調査によつても知れる如く、一圓以上五圓以下の借入をなすものが最も多い實狀に照し、無盡の加入すら困難とする階級にあるものと見なければならぬ。加ふるに、質契約には必ず擔保を提供しなければならぬため、無盡によつて融通される程度の資金を得やうとすれば、可成り高價なもの、若くは家財道具や、商賣道具を擧げて提供しなければならぬものもあつて、實際に役立たぬ場合を生ずる。

無盡に於ても、無擔保で無制限に融通されるものではない。況んや僅かなる手數料収入を以て、無盡の管理をなし、給付濟掛金者よりの掛金徴收不能に陥るときは、此損害を負擔しなければならぬ營業無盡に於ては、掛金徴收の安全を期するため、擔保を要求するとか、或は保證人を立てしむる等の方法に據つて、危険防止に努

むるは當然である。唯其程度が他の金融機關に比し緩和され、且又業者の庶民金融に對する經驗と理解によつて、被融通者に比較的便利であるため、中小工業者の金融機關として、利用せらるゝことゝなるのである。尙貯蓄を目的とする機關として、立派な貯蓄銀行があるにしても、營業無盡に比し、金利が悪く、且つ資金の必要に際し役立たない不便があるため、貯蓄機關として營業無盡を利用する者も非常に増加するものと思はれる。今や營業無盡は信用組合、貯蓄銀行等との競合關係にあつて、中小工業者を相手とする金融を掌りつゝあるも、普通銀行とは何等競合關係に立たない。蓋し普通銀行の預金は短期にして、多額のものゝ一時に預け入るゝものであるに反し、營業無盡は小額の積立である。又普通銀行の融通は、短期一時決済であるに反し、營業無盡は長期崩潰である。之等の事情より見て、營業無盡の發達は普通銀行の營業に何等の脅威とならないのみでなく、寧ろ普通銀行は營業無盡を後援し、相携へて一般金融界に臨まば、資するところ多大であると信ずる。現に福岡縣直方町にある共福無盡會社の株式は大半を鞍手銀行が所有して、同行系統の金融機關となつてゐる。

第三節 現在の無盡業社

第一款 業法實施後の移動

無盡會社の亂興と、不正無盡の弊害に懲りたる政府は、之が弊害の一掃を目的として、大正四年無盡業法を制定公布し、同年十一月一日より實施せられたることは、既に前章述べたる通りである。當時に於ける會社組織の無盡業者八百余を算し、個人經營のもの實に壹千七百餘の多數に及び、無盡業者の洪水時代を現出した。然しながら當時の調査は、甚だ不確實にして、的確なる實數を知ることが困難である。當時に於ては貯金會社、金融會社等の名義の下に、無盡業を營む者があり、無盡の名稱を有しながら、事實は無盡業務を扱はないものもあり、之等を嚴密に調査することは不可能である。少なくとも當時は營業無盡の混亂時代にして、且つ不正無盡のために、無盡業に對する世の誤解を受くる因を作つたものと言ひ得るであらう。茲には業法施行後、完全なる統計による會社數の調査に基いて記述することとする。

昭和三年度大藏省調査によれば、大正五年以降の營業無盡業數及資本金は左の通りである。

年	業社數	公稱資本金	拂込資本金	一營業者平均資本金	備考
大正五年	一三六	七、四〇六、五〇〇	二、五七六、三〇六	五四、四五九	
同 六年	一七三	八、八三五、〇〇〇	三、一一一、九三一	五一、〇六九	
同 七年	一九二	九、六四二、〇〇〇	三、八〇六、二三二	五〇、二一九	
同 八年	二〇六	一〇、三七九、〇〇〇	四、一〇九、四〇八	五〇、三八三	
同 九年	二〇三	一一、七七四、〇〇〇	四、四九七、四〇八	五八、〇〇〇	
同 一〇年	二〇九	一二、二四四、〇〇〇	五、三一九、七七二	五八、五八三	
同 一一年	二二四	一四、一四四、〇〇〇	六、二八一、一七二	六六、〇九三	
同 一二年	二一九	一五、〇一四、〇〇〇	六、五〇一、一七一	六八、五五七	
同 一三年	二二七	一八、七四三、六〇〇	八、一〇四、八〇四	八二、五七〇	内個人營業者 二六
同 一四年	二四〇	二二、八八六、六〇〇	九、六一六、二八〇	九三、二八六	同 二四
昭和元年	二四三	二六、〇四二、六〇〇	一一、二〇六、九六四	一〇七、一七一	同 二一
昭和三年	二五八	三三、二八九、〇〇〇	一四、五六九、一二九	一二九、四一五	同 一六

次に無盡契約高は左の通りである。

年	會 數	口 數	給付金契約高	掛金契約高
大正五年	五、七二四	二三五、三五七	四一、五七四、〇四二	四五、四八七、六五九

同 六年	九、〇九〇	二六九、三八五	七一、七一三、七八二	七七、一五〇、一〇六
同 七年	一四、八八〇	五二二、七三九	一一四、七九六、九二〇	一二二、八三一、八三〇
同 八年	一五、六五九	六三三、九二二	一五四、三二九、〇八五	一六五、七八三、六二〇
同 九年	一八、〇六四	七二七、四〇二	一九六、八七七、二九九	二二二、二七四、〇九四
同 一〇年	一〇、六七〇	四一五、四九三	一二九、七一三、三〇六	一三八、〇一一、七一八
同 一一年	一九、九九七	六八五、一四二	二七六、八三九、一二一	二九四、〇四一、八八五
同 一二年	二〇、〇〇二	六八七、一九八	三二九、六二〇、七七九	三二一、七八〇、二二四
同 一三年	二六、六〇八	九二四、〇七七	四八三、二七六、六〇〇	五一二、三八〇、六三〇
同 一四年	二九、九八四	一、〇四五、六九三	六一六、四一九、〇五八	六五七、四一三、九五五
昭和元年	三四、五八九	一、一八五、二九四	七四五、七一五、〇四九	七九一、七一九、四六九
同 二年	三七、一六九	一、二九一、五八一	八三五、三五八、七四五	八九一、九〇三、一一〇
同 三年	四〇、九七九	—	九七〇、六一〇、二一一	—

以上の如く業者數に於ても、契約高に於ても漸次増加してゐる。即ち業法施行直後の大正五年末に於て、業者數僅かに百三十六個、其契約高は給付金に於て、四千五百五拾七萬餘圓、掛金に於て四千五百四拾八萬餘圓に過ぎざりしものが、十年後の昭和元年末には、業者數に於て倍加して二百四十四個となり、其契約高は給付金に於て七億四千五百七拾壹萬餘圓、掛金に於て七億九千百七拾壹萬餘圓に達し、實

に十七倍強の激増振りを示してある。而して其資産、負債状態を見るに、昭和三年末に於て左の如くなつてある。

資 産 之 部		負 債 之 部	
拂込未済資本金	一八、七一九、九七一	資 本 金	三三、二八九、〇〇〇
預 け 金	一一、一三四、六三一	諸 積 立 金	五、八二〇、八〇五
未收無盡掛金	四、二六三、〇〇三	未拂無盡給付金	一四、二〇二、四八三
有 價 證 券	一〇四一、二九〇	未拂入札差金	四、七九五、〇六〇
貸 付 金	二五、二二六、八〇六	未拂解約返戻金	四、六〇七、八六三
土地建物什器	六、一八五、五一二	無盡給付資金	三七、七五〇、一七一
損 失 金	六八七、二五五	借 入 金	二、一四八、七七〇
現 金	一、二八四、〇〇四	各 種 勘 定	六、八四〇、七二二
計	一一一、三四二、七二三	純 益 金	一、八八七、八四九
		計	一一一、三四二、七二三

第二款 現在の業社数及契約高

昭和二年度分より、大藏省調査に拘はる資料なきため、現今に於ける會社實數其他を知ること能はざるも、社団法人全國無盡集會所發行「全國無盡會社要覽」によれば、昭和三年末現在に於て、業者數二百五十八その内株式會社二二〇個、合名會社二

十個、合資會社二個、個人經營のもの一六個となり、前年末に於て個人經營のもの二十一個のものが、一六個に激減してある。試みに業者の會社別に其資本金を見れば左の通りである。

種 類 別	會社數	支店數	公 稱 資 本 金	拂 込 資 本 金	一社平均公稱資本金
株式會社	二二〇	一〇四	三二、一六七、五〇〇	一三、七八五、五〇四	一四六、二一六
合資會社	二〇	一	八二五、五〇〇	六〇五、一二五	四一、二七五
合名會社	二	一	七〇、〇〇〇	五二、五〇〇	三五、〇〇〇
個人經營	一六	二	二二六、〇〇〇	二二六、〇〇〇	一四、一二五
計	二五八	一〇七	三三、二八九、〇〇〇	一四、五六九、二二九	一二九、〇二七

之れによつて見れば、資本金に於て、株式組織のもの最も多く、個人經營のものは最低五千圓より最高五萬圓に過ぎない。鳥取縣倉吉町にある澤無盡商會は資本金五萬圓にして、個人經營無盡業者中に於ける最高資本金である。同商會は明治三十九年頃開業せるもの、如く、昭和二年末現在に於て、給付契約高二百六十餘萬圓掛金契約高二百七十餘萬圓を有してある。又資本金五千圓のものは數社あるも、その中最も契約高の多いものは、山形縣酒田町にある酒田無盡商會にして、設立

は大正九年なるも昭和二年末現在の給付契約高百四十餘萬圓、掛金契約高百五十餘萬圓を有し、會社組織のものに比し、遜色のない契約高を示してゐる。然し概して個人經營のものは成績不良にして漸次廢業するものがある。然るに香川縣琴平町にある琴平無盡融通商會の如きは、業法實施直後の大正五年設立せられ、資本金は僅々壹萬圓に過ぎざるも昭和三年末現在に於て給付金契約高三百九十餘萬圓、掛金契約高四百四十餘萬圓に達し、個人經營の無盡業者中の最高契約高を有してゐる。

昭和三年末現在の無盡組數は四萬五百十五組其口數百四十三萬八千六百八十二口にして其契約金額は、

給付契約高九億七千壹百五拾萬餘圓
 内給付濟高四億四千八百九十萬餘圓
 内給付濟高五億二千二百五十九萬餘圓

業法實施直後の契約高僅々四千萬圓程度に過ぎざりしものが、斯く急激に増加し、最近壹ヶ年の契約高は契約満了のもの多額に達するにも拘はらず、尙且つ純増加額壹億圓以上と云はれ、昭和四年末現在契約高は拾億五千萬圓以上に達したも

のと思はれる。次に地方別に會社數及び無盡契約高を示せば左の通りである。

無盡會社數及契約高順位地方別 (昭和三年末現在)

順位	府縣別	會社數	組數	口數	給付金契約高 千圓	掛金契約高 千圓
一	東京	二七	三、三七二	二〇四、五九一	二、二七、二〇一	二、四六、六六三
二	北海道	一六	一、八三五	六八、六八〇	五五、二七〇	五八、六六一
三	京都	九	二、八一〇	六七、八七二	五一、一四〇	五二、四〇八
四	福岡	一一	九八六	四〇、三四七	四七、三七五	五三、一三八
五	茨城	四	二、一一七	八〇、二七六	四一、六二八	四四、一八四
六	兵庫	一一	二、〇四一	五七、八四八	四一、七七五	四二、四六一
七	大阪	一三	二、〇二五	四九、三六八	三六、一三八	三六、五〇七
八	山形	五	二、二七四	九三、七二二	三二、五三二	三五、四六四
九	富山	七	八九三	三〇、二一四	三〇、五〇四	三三、八三二
一〇	徳島	六	一、三六七	三七、九六〇	二八、九五四	三〇、八一九
一一	和歌山	六	二、一四七	五二、五五一	二八、〇六七	二七、四三九
一二	神奈川	九	七四四	三九、一一一	二七、一五九	二九、二四四
一三	長野	五	七五二	二八、九〇八	二五、九四六	二七、五九六
一四	青森	五	八五〇	三六、三〇三	二〇、七二四	二三、一一五

郡	市	町	村	口数	給付金契約高	掛金契約高
一五	石川	九	八八八	三八、二一四	二〇、四〇一	二一、四五四
一六	新潟	七	一、七三三	二九、七六五	一九、九〇一	二二、七一三
一七	福井	五	五一〇	二九、一一二	一九、八九四	二〇、二四七
一八	秋田	五	六二〇	二二、九六八	一五、三三九	一六、三〇三
一九	岩手	四	六八九	二八、七四七	一五、二四三	一六、五〇一
二〇	三重	六	八七二	三二、一七〇	一五、一三七	一五、五八八
二一	静岡	六	一、二一三	四〇、五八六	一四、一一七	一四、八四六
二二	宮崎	四	三五九	一六、五九五	一三、五四四	一四、四二三
二三	宮城	二	一、一九三	三三、二五五	一二、七六五	一三、九二三

右は壹千萬圓以上の契約高ある府縣を、給付金契約高の順序に従つて掲出したものであるが、千葉、埼玉、群馬、滋賀、愛媛、香川、愛知、岐阜、鳥取、山口、廣島、鹿兒島、沖縄の各縣も五百萬圓以上の契約高がある。鳥根縣には業者數一、其契約高四十八萬餘圓に過ぎないで、甚しく不振の状態にある。尙高知、大分の兩縣には、無盡業者は一個もないけれども、大分縣の如きは、非營業無盡が盛んに行はれてゐる由である。更に無盡契約の給付金を金額別に見れば左の如くである。

給付金額別	組数	口数	給付金契約高	掛金契約高
五十圓迄	二六一	八、三六九	三二〇、三九二	三四六、二七五
百圓迄	四、六三一	一五九、一三九	一五、七七〇、一一六	一七、一一二、四六九
二百圓迄	四、〇三八	一一五、七八三	二二、七八七、二八八	二四、二五四、九〇五
三百圓迄	四、〇一五	一二六、八五二	三七、七五一、七四七	四〇、二四三、二七一
五百圓迄	一六、四四六	五六九、五八三	二八四、九一〇、三五二	三〇一、八八三、三七八
千圓迄	九、四八四	三八五、八三四	三八四、八二五、八〇六	四一一、八四三、三五三
二千圓迄	四六〇	二四、二一九	四七、八四四、四九七	五〇、七七六、五九九
三千圓迄	八四六	三一、八七六	九四、七二一、五〇〇	一〇一、一八一、〇八〇
四千圓迄	—	—	—	—
五千圓迄	三三四	一六、九四八	八二、五七二、〇〇〇	八八、八七〇、〇三四

之によつて見れば、組數に於て五百圓のもの最も多く、金額に於て千圓迄のものが最も多い。百圓未滿のものは、新規に契約するものは殆んど無くなる傾向がある。又營業無盡の最高額の五千圓會を行ふものは、まだ極少數の會社にして、壹千圓乃至參千圓を極度とするものが最も多い。然るに近時無盡業の發達に連れ、漸次五千圓會を創始するものを生じ、且つ一般の理解に伴ふて、高額契約の希望者多

く、今後は契約金額を漸次増加せしむるに至るべきものと思はれる。

第三款 契約高千萬圓以上の會社

普通銀行の大小を論ずるには、其預金額を標準とすることが一般的である。亦生命保險會社も其契約高を標準とせられてある。無盡會社は、恰も生命保險會社の如く、其契約高を標準として大小を定められてある。勿論資産内容に於ては、契約高のみを見て、決定することの不可能なるべきは、往年普通銀行の中、資本金多く、預金額の大なりし銀行にして、休業の止むなきに至り、且つ一般債権者に多大の迷惑を及ぼしたるの事實に徴して、明らかであるけれども、大體としては契約高を標準として觀察するを、正當なりと云はなければならぬ。今我國に於ける、壹千萬圓以上の契約を有する會社を擧ぐれば、左の二十一社を算する。(便宜昭和三年六月末現在)

(一) 相生無盡株式會社 (所在地東京市淺草區東仲町)

資本金 百拾萬圓 (金額拂込) 設立明治四十五年
給付金契約高 七四、〇九五、〇〇〇圓
掛金契約高 八一、二八三、二六〇圓
未收無盡掛金 二、二六九、三六二圓

(二) 臺灣勸業無盡株式會社 (所在地臺北市本町)

資本金 五拾萬圓 (内拂込済拾五萬圓) 設立大正九年

給付金契約高 一一、四四二、〇〇〇圓
未收無盡掛金 一一二、二二〇圓

掛金契約高 一二、四六五、八一五圓

(三) 山形殖産無盡株式會社 (所在地山形市十日町)

資本金 參拾萬圓 (内拂込済貳拾八萬圓) 設立大正三年

給付金契約高 一五、七九六、五〇〇圓
未收無盡掛金 六一六、〇七七圓

掛金契約高 一七、四八九、六四一圓

(四) 常盤無盡株式會社 (所在地水戸市上市裡)

資本金 五拾萬圓 (内拂込済拾貳萬五千圓) 設立大正十三年

給付金契約高 一五、三六三、六〇〇圓
未收無盡掛金 四三八、三一二圓

掛金契約高 一六、三五三、八六五圓

(五) 長崎無盡株式會社 (所在地長崎市酒屋町)

資本金 參拾萬圓 (内拂込済拾五萬圓) 設立大正元年

給付金契約高 一四、八六三、九〇〇圓
未收無盡掛金 三八七、二九九圓

掛金契約高 一六、〇二六、四九六圓

(六) 茨城無盡株式會社 (所在地水戸市上市)

資本金 參拾萬圓 (内拂込済拾貳萬圓) 設立大正十年

給付金契約高 一三、一七六、九〇〇圓
未收無盡掛金 五八九、九三九圓

- (七) 共盛無盡株式會社 (所在地 東京市京橋區新富町)
 - 掛金契約高 一五、〇六〇、八九七圓
 - 資本金 拾萬圓 (内拂込済五萬八千圓) 設立大正元年
 - 給付金契約高 一一、〇二七、五〇〇圓
 - 掛金契約高 一四、六五三、九四七圓 未收無盡掛金 五〇七、七〇六圓
- (八) 相互信用無盡株式會社 (所在地 新潟市東堀前通り)
 - 資本金 五萬圓 (内拂込済壹萬五千圓) 設立大正元年
 - 給付金契約高 一二、四九二、六〇〇圓
 - 掛金契約高 一五、〇六〇、八九七圓 未收無盡掛金 五九〇、〇八六圓
- (九) 帝國共立無盡株式會社 (所在地 京都市下京區烏丸通)
 - 資本金 參拾萬圓 (内拂込済拾貳萬五千圓) 設立大正元年
 - 給付金契約高 一一、〇二七、五〇〇圓 未收無盡掛金 三二六、五八八圓
 - 掛金契約高 一一、七〇七、四五〇圓
- (十) 第一無盡株式會社 (所在地 德島市中通町)
 - 資本金 七萬圓 (内拂込済參萬五千圓) 設立大正四年
 - 給付金契約高 一一、九六二、五〇〇圓 未收無盡掛金 二四七、六三五圓
 - 掛金契約高 一二、七三三、七七四圓
- (十一) 共濟無盡株式會社 (所在地 京府水樂町)
 - 資本金 五拾萬圓 (内拂込済拾貳萬五千圓) 設立大正十五年
 - 給付金契約高 一一、四四二、〇〇〇圓 未收無盡掛金 一一二、二二〇圓
 - 掛金契約高 一二、四六五、八一五圓

- (十二) 帝國無盡株式會社 (所在地 東京市神田區鎌倉河岸)
 - 資本金 貳拾萬圓 (内拂込済八萬圓) 設立明治四十四年
 - 給付金契約高 一一、〇六〇、七〇〇圓 未收無盡掛金 六六二、五六〇圓
 - 掛金契約高 一二、〇六一、〇六五圓
- (十三) 東北無盡株式會社 (所在地 仙臺市大手町)
 - 資本金 拾萬圓 (内拂込済四萬圓) 設立大正二年
 - 給付金契約高 一一、〇〇五、一〇〇圓 未收無盡掛金 五三〇、〇九二圓
 - 掛金契約高 一一、八九九、六五二圓
- (十四) 實業無盡株式會社 (所在地 京都市下京區四條通り)
 - 資本金 拾五萬圓 (内拂込済四拾七萬貳千五百圓) 設立明治四十四年
 - 給付金契約高 一〇、四八五、九〇〇圓 未收無盡掛金 九八六、〇六六圓
 - 掛金契約高 一〇、九五八、八六〇圓
- (十五) 門司金融無盡株式會社 (所在地 門司市大字門司)
 - 資本金 拾萬圓 (内拂込済四萬五千圓) 設立大正二年
 - 給付金契約高 一〇、三八八、四〇〇圓

- 掛金契約高 一一、六九四、五八七圓
未收無盡掛金 二四九、一八三圓
- (十六) 中越無盡株式會社 (所在地 富山市總曲輪)
資 本 金 參拾萬圓 (内拂込濟貳拾壹萬圓) 設立大正四年
給付金契約高 一〇、三三一、一〇〇圓
掛金契約高 一一、四一八、六三七圓
未收無盡掛金 四五七、一三〇圓
- (十七) 東京復興無盡株式會社 (所在地 東京市本所區林町)
資 本 金 拾五萬圓 (内拂込濟參萬七千圓) 設立大正十三年
給付金契約高 九、五五五、〇〇〇圓
掛金契約高 一〇、二二〇、〇七二圓
未收無盡掛金 二七八、五一九圓
- (十八) 相互無盡株式會社 (所在地 東京市神田區一ツ橋通り)
資 本 金 參萬圓 (内拂込濟九千餘圓) 設立明治四十四年
給付金契約高 九、三六四、〇〇〇圓
掛金契約高 一〇、二二〇、〇七二圓
未收無盡掛金 三五二、四七〇圓
- (十九) 大明無盡株式會社 (所在地 東京府下大森町四五〇)
資 本 金 五萬圓 (内拂込濟壹萬八千五百圓) 設立明治四十五年
給付金契約高 九、三四三、九〇〇圓
掛金契約高 一〇、一五九、五〇三圓
未收無盡掛金 一、五二七圓

- (二十) 共福無盡株式會社 (所在地 福岡縣鞍手郡直方町)
資 本 金 拾萬圓 (内拂込濟參萬貳千圓)
給付金契約高 九、三一八、九八三圓
掛金契約高 一〇、五二二、九一四圓
未收無盡掛金 三六〇、四七五圓
- (二十一) 四立無盡株式會社 (所在地 東京市下谷區下車坂町)
資 本 金 參拾五萬圓 (内拂込濟貳拾萬圓) 設立大正三年
給付金契約高 九、二九九、五〇〇圓
掛金契約高 一〇、四二七、〇六五圓
未收無盡掛金 六四四、四〇六圓

以上は、何れも昭和三年六月末現在によるもので、その後二年間に、契約高は増加してあるであらうけれども、的確なる數字を擧げることが出来ない。又當時既に八百萬圓以上の契約を有したる左記諸會社も、昭和四年末には壹千萬圓内外の契約高に達したるものと思はれる。

會社名(順序不同)	所 在 地	資 本 金
函館無盡株式會社	函館市會所町一五	貳拾萬圓 (内拂込濟參萬五千圓)
羽陽無盡株式會社	山形市旅籠町四九九	五萬圓 (内拂込濟四萬八千五百圓)
金港無盡株式會社	横濱市中區羽衣町二ノ三七	拾萬圓 (内拂込濟五萬壹千圓)

富山無盡株式會社	富山市總曲輪一三〇	參拾萬圓 (内拂込濟拾五萬圓)
武生無盡株式會社	福井縣武生町幸一七	拾五萬圓 (内拂込濟拾萬圓)
西遠無盡株式會社	濱松市紺屋町一三九	貳拾萬圓 (全額拂込濟)
商工無盡株式會社	京都市下京區高瀬川川松原上る	五拾萬圓 (内拂込濟貳拾萬圓)
交野無盡株式會社	大阪府北河内郡交野村大字倉治	貳拾萬圓 (内拂込濟拾五萬圓)
三木無盡株式會社	兵庫縣三木町字福井	參拾萬圓 (内拂込濟拾五萬五千圓)
和歌山無盡株式會社	和歌山市新通七ノ八	拾萬圓 (内拂込濟八萬圓)
博濟無盡株式會社	福岡縣嘉穂郡飯塚町三七五	拾萬圓 (内拂込濟六萬四千圓)

無盡會社は、何れも、少額の資本金を以て、經營せられ、別に不都合を生じないけれども、資本金の大なる程、信用を受くることは争はれない。全國中拂込資本金の最も大なる相生無盡株式會社に於ても、其資本金は百拾萬圓にして、普通銀行の法定最低資本額程度に止まつてゐるけれども、其契約高に於ては、同業者中斷然一頭地を抜いてゐる。以下多額の契約を有する、前掲諸會社に就て見るも、資本金の大なるものが多く、小額資本を以て優良なる成績を挙げつつあるものは、其人的背景、若くは其經營上に優れたる所あるがためだと見なければならぬ。

第四款 個人經營無盡業の狀態

無盡業の洪水時代に亂興せられたる、個人經營の無盡業者は、實に千七百餘の多數に及び、その弊害百出に懲り、現行無盡業法の實施を見るに至り、之等業者の廢業するもの續出し、現在に於ては、僅かに數個を止むるに過ぎない。然るに昭和三年末現在に於て十六、其資本金額貳拾四萬六千五百圓、給付金契約高千參百參拾貳萬圓、掛金契約高千四百六拾參萬餘圓を有する狀態にあるも、契約高の大部分は二、三の業者に占められ、殘餘のものは、小額の契約高を有するに過ぎぬ。唯無盡契約による債務に對しては、業者は無限の責を負はなければならぬため、業務執行に當つて最善の注意を拂ひ、給付濟口掛金の未收に終るものなきに努め、従つて契約高に比し、未收無盡掛金が僅少なるため、往年の無盡弊害を、再び繰返へすが如きことは勿論發生しないけれども、新規契約を困難ならしめ、經營不能に陥るものがあり、漸次廢業するものを生ずるに至るべきは、想像に難くない。之れに反し、個人經營にして、尙且つ會社組織の業者に劣らざる成績を挙げつつある、琴平無盡融通商會その他二、三のものは、依然營業を繼續するであらうけれども、大勢は會社組織の經營

を有利とせらるる状態にあるため、早晚組織を改むるに至るものと思はれる。

第五款 特異の無盡業者

現在の無盡業者は、その大多數が、株式組織のものであり、個人經營の無盡業者は、數個を残すに過ぎざる現状にあることは、前款述べたる通りである。然るに株式組織の會社にして、稍相互組織に似たるものがあり、現に堅實なる經營をなすつゝある事實に鑑み、特に之がため一款を設くるも無駄ではないと信じ、茲に記述するものである。又僅かに數個を残すに過ぎない、個人經營のものに付き、其掛金方法並に利廻等を計算することとする。

元來本款は、次章に譲るべき性質のものであるけれども、便宜上本章に挿入してあつた。

第一項 相互組織的の大明無盡

現在の無盡會社中には、相互組織のものは一社もない。然し業者間には、無盡の性質に鑑み、生命保險會社に於て、相互組織の理想が説かれる如く、無盡會社も亦其本質上、相互組織が最も理想的のものであるとの説をなす者がある。東京市外大

森町にある大明無盡株式會社は、現在業者中に於て、最も相互式を多分に含んでおるものと思はれる。當社は現行無盡業法實施前即ち無盡會社亂興時代なる明治四十五年三月設立せられ、現行業法實施當時に大多數が廢業の止むなきに至つたに拘はらず、當社はその時代より堅實なる經營を行つて居たものであるから、引續き免許され、今日に及んである。

當社の昭和四年六月末現在契約高は壹千百萬餘圓で、我國同業者中に於ても一流に屬してある。そして當社の經營者は、頗る宗教的信念に富み、それが無盡に反映して、共存共榮の精神に充ちたる方法が用ひられてある。目下當社の掛金方法を、同業者間に於ては、大明式若くは菊池式と稱してある。即ち當社は専務取締役菊池休松氏によつて經營せられつゝあるもので、氏の誠心誠意の努力は酬ひられ、今日の大をなしたるものであると言ふも過言ではない。

恐らく今日の我國同業者中に、當社ほど、日本固有の無盡の傳統的精神を加味し、庶民金融機關としての理想に生き、そして現行無盡業法に準據せる業者はあるまい。當社が毎期の決算報告表紙裏に、左の文言を載せてある點から見ても、其一半

が窺知されるであらう。

初轉法論の理想

無盡の長所は、最後まで精神的に、物質的に進み得る點にあるので、經濟學を認容し、宗教を包含し、法律を織り込んで、以て其理想を現實化するのが、無盡の特長である。

以上の外、其營業報告書中には、他會社のそれに見られない特色があり、宗教的氣分に満ちてゐる。殊に同社は時折、契約者に宗教的のパンフレットやうなものを配布するものゝ如く、最近は「摩訶般若波羅密多心經」と題し、數千枚を配布せる由である。兎に角非常に毛色の變つた點があり、堅實に經營せられてゐる會社である。茲に當社を、特に引合に出した所以のものは、最近無盡の研究仲間にて、問題となつてゐる、無盡業の相互組織的の經營に就て、當社が常に引例せられてゐるからである。勿論當社は純然たる株式會社であるが、其無盡の組織が相互式となつてあり、それがため研究の對象とせられてゐる譯である。

先づ當社の掛金表を茲に掲出して、それに對し利廻りその他を計算して見ることにする。

大明無盡株式會社無盡掛金表

▲金五千圓會

毎月 四ヶ年 (自四十八回)

合計金五千參百七拾六圓也
壹回掛金百拾貳圓也

内譯

金五千圓也

給付金額

金四拾八圓也

車代 (壹口壹回=付金壹圓)

金參百貳拾八圓也

會社收得諸經費

▲金四千圓會

毎月 四ヶ年 (自四十八回)

合計金四千參百貳拾圓也
壹回掛金九拾圓也

内譯

金四千圓也

給付金額

金四拾八圓也

車代 (壹口壹回=付金壹圓)

金貳百七拾貳圓也

會社收得諸經費

▲金參千圓會

毎月 四ヶ年 (自四十八回)

合計金參千貳百六拾四圓也
壹回掛金六拾八圓也

内譯

金參千圓也

給付金額

金四拾八圓也

車代 (壹口壹回=付金壹圓)

金貳百拾六圓也

會社收得諸經費

▲金貳千圓會

内譯

金貳千圓也
金四拾八圓也
金百拾貳圓也

毎月 四ヶ年 (自一四拾八回) 合計金貳千六百拾圓也
壹回掛金四拾五圓也
給付金額
車代 (壹口壹回ニ付金壹圓)
會社取得諸經費

▲金壹千圓也

内譯

金壹千圓也
金參拾六圓五拾錢
金五拾八圓五拾錢

二十日目毎 四ヶ年一 (自七拾參回) 合計壹千九拾五圓也
二ヶ月三回 ケ月滿會
給付金額
車代 (壹口壹回ニ付金五拾錢)
會社取得諸經費

▲金五百圓會

内譯

金五百圓也
金拾七圓六拾錢
金拾圓四拾錢

二十日目毎 四ヶ年拾壹 (自八十八回) 合計金五百貳拾八圓也
二ヶ月三回 ケ月滿會
給付金額
車代 (壹口壹回ニ付金貳拾錢)
會社取得諸經費

▲金參百圓會

二十日目毎 四ヶ年 (自七十二回) 合計金參百貳拾四圓也
二ヶ月三回 ケ月滿會

内譯

金參百圓也
金拾四圓四拾錢
金九圓六拾錢

給付金額
車代 (壹口壹回ニ付金貳拾錢)
會社取得諸經費
二十日目毎 參ヶ年五 (自六十二回) 合計金二百拾七圓也
二ヶ月三回 ケ月滿會

▲金貳百圓會

内譯

金貳百圓也
金九圓參拾錢
金七圓七拾錢

給付金額
車代 (壹口壹回ニ付金拾五錢)
會社取得諸經費
二十日目毎 貳ヶ年六 (自四十五回) 合計金壹百拾貳圓五拾錢
二ヶ月三回 ケ月滿會

▲金壹百圓會

内譯

金壹百圓也
金六圓七拾五錢
金五圓七拾五錢

給付金額
車代 (壹口壹回ニ付金拾五錢)
會社取得諸經費
◎注意 車代ハ開會當日迄ニ掛金御持參ノ方ニ限リ差上ゲ、其ノ他ハ會社ノ收得トス。
金貳千圓無盡以上ハ初回二回ハ入札デ三回ガ抽籤デアリマス以下之ニ做ツテ致シマス。
金壹千圓無盡以下ハ
〔甲種ハ初回二回ハ入札デ四回ガ抽籤デアリマス以下之ニ做ツテ致シマス。
乙種ハ初回二回ハ入札デ三回ガ抽籤デアリマス以下之ニ做ツテ致シマス。〕

即ち當社は純然たる東京式無盡の掛金方法を採つてゐる。試みに當社の五千圓會を例に採つて、會社の利益を算出して見れば、

- 一、一回の掛金は、給付の前後を問はず、同額の百拾貳圓である。四ヶ年満期で、毎月一回の掛込であり、同時に給付するものであるから、四十八口の加入者があり、其掛金總額は五千三百七十六圓となる。
- 二、會社は給付確定者に對しては、五千圓を給付する。其外に一口當り一圓宛の車代を支給するから、車代合計四十八圓と、給付金との合計五千四十八圓は會社から支出する總額である。
- 三、差引き會社は、三百二十八圓を、一組一回の手數料として徴收することゝなる。

之によつて會社の利益は判明せるも、契約者の利益がどうなつたか、又利廻りは如何なる状態であるを見なければならぬ。之には後に掲出する、當社の無盡契約々款の參照を必要とするが、先づ掛金者の立場からの利益を調べて見る。前記の掛金表で見れば、給付の前後を問はず、同額の掛金であるから、貯蓄目的の掛金者は

結局三百圓餘計に掛込んで、金利の付かぬ五千圓の給付金を受くることゝなり、甚しく不合理の如く考へられる。然し大體としては、東京式無盡の掛込方法は、貯蓄目的の掛金者には、初めから金利採算上の不安があり、當社掛金方法も、亦此缺點あるは、免れぬところである。

前記の掛金表によれば、一、二回入札、三回は抽籤で、最後まで之をくり返へすものであるから、總體で三十三回の入札が行はれ、残り十六回が抽籤である。そして當社約款によれば、入札の場合の落札限度額は七掛であるから、入札の都度、落札限度額まで入札するものがあれば、給付未済者の受くる入札差金の配當は、多額に達するであらうけれども、初期の間は、落札限度額まで入札するものが多いけれども、終期に於ては、到底そんなことは望まれない。然し此入札差金の配當は、給付未済者のみに分配するものであつて、回数に進むに連れて、配當を受くる者は漸次減少する。従つて初回の配當金と同額程度のもは、入札毎に終回まで配當せられるものと見て、大體間違ひないであらう。或は會の初期に於ては、落札限度額まで入札するものが多く、給付未済者が漸次減少するに従ひ、入札差金の配當は多くなり、此

計算に相違を生ずるかも知れない。

- 一、第一回入札に、限度額まで入札すれば、壹千五百圓の入札差金があり、此中會社が二割を收得し、その残額壹千貳百圓を、未給付者四十七名が分配するものであるから、一人當りの配當金は貳拾五圓五拾參錢となる。
- 二、即ち第一回の掛金は、何れも同額の百拾貳圓を拂込みたることとなるも、未給付者に對する前記の入札差金配當金貳拾五圓五拾參錢と、壹圓の車代が拂戻しされるから、實際の掛金は八拾五圓四拾七錢となる。
- 三、未給付者の掛金が最後まで、前記金額で濟むものとすれば、掛金合計額は四千百貳拾八圓九錢となり、之に對し五千圓の給付金があるのだから、差引八百七拾壹圓九拾壹錢が利息金に該當するものである。
- 四、然し當社の掛金表によれば、一、二回入札、三回抽籤、以下之を繰り返へすものであるから、前にも述べた如く、滿會までには十六回の抽籤が行はれるから、此場合には規定掛金を掛込まなければならぬ。然し初期に當籤したときは、資金を必要とする掛金者に譲渡すれば、契約々款に定めたる入札限度額と、給付金

額との差額程度の對價が得らるゝものであり、受取利息が未確定である反面には、斯うした射倖的興味が頗る多い利益がある。

以上によつて見れば、當社の掛金方法は、東京式であつて、それに大明式の特徴が加はつてゐる。従つて東京式無盡の長所と短所の兩面を備へてゐることは免れぬ。即ち掛金が單一制度であるがために、事務處理上に便利であるばかりでなく、會社の收得する利益の算出が容易である。然しその反面には、貯蓄を目的とする掛金者は、受取利息不確定のため不安を感じることも、なり、會員募集には甚しく不便とするところである。

参考のため、當社の無盡契約々款を掲出する。

大明無盡株式會社無盡契約々款

第一章 契約

第壹條 加入者ノ權利義務ハ加入申込者カ當會社ト無盡契約證書ノ作成ヲ終リタルトキヨリ發生スルモノトス

第二章 掛金ノ取立又ハ拂込方法

第貳條 毎回ノ掛金額其ノ拂込期限拂込場所及抽籤入札ノ執行期日並場所ハ無盡契約證書ノ定ムル所ニ據ル可シ

第參條 各種無盡ノ掛金ハ拂込期限迄ニ所定ノ場所ニ拂込ムヘシ拂込ヲ怠リタル加入者ニ對シテハ集金人ヲ以テ取立ツル

第二章 無盡業の現状

モノトス。各種無盡業態共拂込期日迄ニ掛金ヲ拂込ミタル加入者ニハ通車料トシテ左記ノ通り支給スルモノトス

金壹百圓會	壹口ニ付	金拾五錢	金貳千圓會	壹口ニ付	金壹圓也
金貳百圓會	同	金拾五錢	金參千圓會	同	金壹圓也
金參百圓會	同	金貳拾錢	金四千圓會	同	金壹圓也
金五百圓會	同	金貳拾錢	金五千圓會	同	金壹圓也
金壹千圓會	同	金五拾錢			

第參章 抽籤入札其他給付ノ順位ヲ定ムル方法

第四條

當嗽社カ契約金給付ノ順位ヲ定ムル方法ハ本條以下規定スル所ニ從ヒ之ヲ爲ス

本契約約款ニ於テ契約金給付ノ時期ニ付特ニ規定セサル場合ノ契約金給付ノ時期ハ總ヘテ契約金給付ニ關スル手續完了ノ時ヲ以テスルモノトス

第五條

抽籤ノ方法ハ抽籤權ヲ有スル口數ニ一ヲ加ヘタル紙摺籤(順次番號ヲ記載シタル)ヲ作り之ヲ掛金拂込ノ順位ニ從ヒ加入者ヲシテ一口宛抽籤セシメ、殘籤ノ次番號ノ籤ヲ引キ當テタル口ヲ當籤トス

但シ殘籤ニシテ終番號ナルトキハ一番ノ籤ヲ引キ當テタル口ヲ以テ當籤トス
當日缺席シ他ニ抽籤權ヲ委任セサリシ抽籤權アル加入者ノ出席加入者ヲシテ代理抽籤セシメ若シ抽籤權アル加入者一名モ出席セサルトキハ當嗽社ニ於テ便宜前項ノ方法ニヨリ抽籤ヲ行ヒ當籤者ヲ定ム
前項ノ場合ハ當嗽社ハ當嗽者ニ當日ヨリ二日以内ニ其ノ旨ヲ通知スルモノトス

第六條

入札方法ハ入札權アル加入者ヲシテ其ノ氏名住所及入札手取金額ヲ記載シタル一定ノ入札用紙ヲ席上ニ備ヘアル入札箱ニ投入セシメ、全部ノ投入ヲ終リタル上加入者ノ立會ヲ以テ開札シ最低手取金額ノ入札ヲ以テ落札者ト定ム

第七條

左ノ各號ノ一ニ該當スル入札ハ之ヲ無効トス
一、入札手取金額及氏名住所不明ナル入札
二、契約給付金額超過又ハ制限手取金額未滿ノ入札
三、錢位未滿ノ端數ヲ附シタル入札

第八條

當該回ニ於ケル抽籤又ハ入札ノ權アル加入者カ入口カ一口トナリタル場合ハ其ノ加入者ノ出席ノ有無ヲ問ハス之ヲ當籤又ハ落札者ト見做シ契約金ノ給付ヲ爲ス缺席ノ場合ハ當日ヨリ二日以内ニ其ノ旨ヲ通知スルモノトス

第九條

左ノ各號ノ一ニ該當スル加入口ハ抽籤入札ノ數ニ加ハルコトヲ得サルモノトス
一、當籤又ハ落札シ未タ契約金給付手續完了セサル口
二、當該回迄ノ掛金拂込ヲ爲ササル口
三、既往當籤又ハ落札シタルモ加入者カ當該回ニ於ケル契約金ノ給付ヲ受ケルコトノ權利ヲ拋棄シタル口
四、既往當籤又ハ落札シタルモ其ノ加入者カ連帶債務者ヲ立テス、又ハ擔保物ヲ提供セサリシ爲メ當該回ニ於ケル契約金ノ給付ヲ受ケ得サリシ口
五、既往當籤又ハ落札シタルモ加入者ノ連帶債務者又ハ擔保物ヲ當嗽社カ承認セサリシ爲メ當該回ニ於ケル契約金ノ給付ヲ爲ササリシ口

第拾條 當籤者又ハ落札者カ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ抽籤ノ場合ニ在リテハ次位番號ノ籤ヲ引キ當テタル口ヲ當籤者ト定メ入札ノ場合ニ在リテハ次ノ最低手取金額ノ入札(同一最低手取金額ノ入札二口以上アリテ抽籤ヲ用ヒタル場合ニアリテハ次位番號ノ口)ヲ以テ落札者ト定ム

但シ入札ノ場合ニ於ケル前者ト後者トノ入札差金ノ差額ハ之ヲ前者ニ辨償セシム
此等給付順位者ニシテ尙左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ順次此ノ方法ニヨリ契約金給付ノ順位ヲ定ム

- 一、當該回ノ契約金ノ給付ヲ受クルコトノ権利ヲ拋棄シタルトキ
- 但シ當籤又ハ落札ノ日ヨリ五日以内ニ當會社ニ對シ其ノ旨ヲ表示スルニ非サレバ權利ノ拋棄者ト見做サス
- 二、當籤又ハ落札ノ日ヨリ五日以内ニ連帶債務者ヲ立テス又ハ擔保物ヲ提供セサリシトキ
- 三、連帶債務者又ハ擔保物ヲ當會社ニ於テ承認セサリシトキ

但シ當會社カ連帶債務者又ハ擔保物ヲ承認セサリシトキハ當籤又ハ落札ノ日ヨリ十日以内ニ其旨ヲ加入者ニ表示スルモノトス

第四章 入札ノ場合ニ於ケル最低手取金額ノ制限

第拾壹條 入札ノ場合ニ於ケル最低手取金額ハ各種無盡共契約給付金額ノ七割ヲ以テ入札最低手取金額トス

第五章 入札差金分配ノ方法

第拾貳條 入札ノ場合ニ於ケル契約給付金額トノ差額ノ二割ハ當會社之レヲ收得シ殘額ハ左記各號ニ該當スル加入口ヲ除キ其ノ他ノ加入口(給付済口ノ缺口ヲ含ム)ニ對シ平等ニ分配スルモノトス

- 一、給付済口ノ缺口

第六章 掛金ノ保證又ハ擔保ニ關スルコト

二、既ニ當籤ニヨリ契約金ノ給付ヲ受ケタル口
給付未済口ノ缺口ニ對スル入札差金ノ分配金及解約者ヲシテ返戻セシメタル入札差金ノ分配金ハ缺口補充ノ加入者ニ其ノ缺口分ヲ加入ノ時支給ス、若シ缺口ノ儘終回ニ至リタルトキ其ノ缺口分ノ分配金ハ初回ヨリ終回マテ一回モ掛金延滞ナカリシ加入口(之ニ該當ノモノ皆無ノ場合ハ掛金延滞回数最モ少キ加入口)ニ平等ニ分配スルモノトス

第六章 掛金ノ保證又ハ擔保ニ關スルコト

第拾參條 當籤者又ハ落札者ニシテ契約金ノ給付ヲ受ケントスル加入者ニ對シテハ左記各號中當會社ニ於テ適當ナリト認ムルモノヲ選擇シ其ノ當籤又ハ落札ノ次回ヨリ終回マデ拂込ムベキ掛金ニ對シ保證又ハ擔保物ヲ提供セシムルモノトス

- 一、連帶債務者貳名以上ヲ立ツルコト
- 二、不動産有價證券又ハ動産ヲ擔保トシテ提供スルコト

右擔保物件ノ時價カ加入者ノ爾後ニ拂込ムヘキ掛金額以下ニ低落シタルトキ又ハ連帶債務者カ死亡隠居失踪シ破産宣告ヲ受ケ破産宣告ヲ申立テラレタルトキハ擔保物ノ變更又ハ連帶債務者ノ變更ヲ爲サシムルモノトス

第七章 掛金延滞ノ場合ニ於ケル違約金又ハ遅延利息ニ關スルコト

第拾四條 加入者カ期日迄ニ掛金ノ拂込ミヲ爲ササルトキハ其ノ期日ノ翌日ヨリ拂込ノ當日迄掛金百圓ニ付日歩金四錢ノ割合ヲ以テスル遅延利息ヲ徴收スルモノトス

第八章 無盡契約解除ノ條件及效果ニ關スルコト

第拾五條 加入者カ無盡契約ヲ解除セントスルトキハ左ノ方法ニヨリ處分スルモノトス

第二章 無盡業の現狀

- 一、既ニ契約金ノ給付ヲ受ケタル加入者ハ掛金分割拂込期限ノ利益ヲ失ヒ爾後ニ於ケル掛金金額ヲ其ノ解約ノ時拂込ムヘキモノトス
- 二、未タ契約全ノ給付ヲ受ケサル加入者ハ其ノ拂込掛金ノ内ヨリ契約給付金壹百圓ニ付金貳圓ノ割合ヲ以テスル解約手数料ト既往分配シタル入札差金トヲ差引タル残額ヲ其ノ會ノ終回ニ無利子ヲ以テ拂戻スモノトス

第六條 加入者カ引續キ三回以上掛金ノ拂込ヲ怠リタルトキハ解約者ト見做シ既ニ契約金ノ給付ヲ受ケタル加入者ハ前條第一號ニ未タ契約金ノ給付ヲ受ケサル加入者ハ前條第二號ニ準シ處分スルモノトス

第九章 無盡契約ニ基ク權利義務ノ讓渡ニ關スルコト

第七條 加入者ノ無盡契約ニ基ク權利義務ノ讓渡ハ總テ當會社ノ承認ヲ受ケルニ非サレハ之ヲ以テ當會社ニ對抗スルコトヲ得ス

附則

通帳名義書換並ニ通帳再交附ハ各一件ニ付手数料トシテ金貳拾錢ヲ徴收ス

次に當社の資産状態の概略を知るために、最近の貸借対照表を掲出する。

第三十五期貸借対照表 (昭和四年六月三十日現在)

資 産 之 部	負 債 之 部
拂込未済資本金	資 本 金
三九、三〇〇、〇〇	五〇、〇〇〇、〇〇
營業用家屋什器	法定準備金
三九、三四一、三九	一四、〇五〇、〇〇

掛金限度貸付金	八、五一五、一〇	諸 積 立 金	二一、二〇〇、〇〇
借地借家敷金	二、五七五、五〇	未拂無盡給付金	一一、〇四三、〇〇
假 拂 金	二、一二三、五三	期限未到達無盡掛金	一九、一一九、一一
銀行預金	三一、五二四、四二	未拂解約返戻金	一、六四八、六四
現金有高	四、〇八九、一七	假 受 金	二二三、一六
振替貯金	五六七、〇〇	當期純益金	四、四七七、二八
未收無盡掛金	一、四五六、六九	内前期繰越金 (金貳百九拾參圓六拾八錢)	
有價證券	七八、四〇		
合 計	一一一、七七一、二〇	合 計	一一一、七七七、二〇
現在無盡掛金契約高	壹千壹百拾萬五千九百八拾八圓		

此貸借對照表は、他の貸借對照表とは、甚だ其趣を異にしてある。それに無盡會社の最も悩まされてある、未收無盡掛金の少ないことである。即ち全國業者の平均未收無盡掛金は、掛金契約高の四分五厘に當つてあるに拘はらず、當社は僅かに壹千餘圓に止まり、殆んど問題とならぬ。此點に對しては、全國業者が驚異の眼を放つてある。

斯の如き状態にあり、且つ全國有數の契約高を有する當社は、其公稱資本金は五

萬圓にして、拂込高に至つては、儘かに壹萬八千五百圓に過ぎない。それにも拘はらず、東京府郡部に出張所十四ヶ所を設けてある。

唯當社の考課状を一見して、奇異の感を催さしむる點は、他の無盡會社の何れもが、必ず掲上してあるところの、無盡給付資金が毫も計上せられてないことである。勿論東京式無盡の掛金方法を採用する會社にては、掛金契約高が給付契約高に必ず超過し、且つ當社の如く、未收掛金の整理が、殆んど他に例を見ることの出来ない迄に、回収せられてある事實に鑑みるならば、何も無盡給付資金の如き面倒な科目を設けて、事務取扱を複雑化せしむる必要はないけれども、今後に於て掛金不能者を多數に生ずる事情、即ち經濟界の不況が更に一層深刻化し、豫期せざる多數の掛金不能者があるために、給付金に支障を生ずるが如きことあらば、折角堅實に經營せられておりながら、意外の點から、信用を落すに至ることなきを保し難い。故にそれに備ふるがためには、無盡益金の組入れを、幾分手控へることゝなし、給付資金勘定に積立つるか、或は利益配當を減じて、社内保留に努むる等、極力資金の潤澤をはかり、萬一に備ふる用意をなすべき必要あるものと信ずる。

殊に當社の給付金限度貸付金に至つては、僅に八千五百圓の少額に止まり、契約者に對する便法が講じてないものと見なければならぬ。勿論無盡會社の多額の貸付金は、決して感服すべき事柄ではないけれども、壹千萬圓以上の契約高を有する會社としては、多數の契約者の中には、當籤、落札等によらずして、給付金の急需に迫らるゝものもあるべく、之等に對しては、給付金限度貸付をなし、契約者の便利をはかることが、庶民金融機關としての、公的任務なりとも考へらるゝ。單に無盡に基く債權、債務のみを完済するを以て、満足するところなく、一般庶民階級に對する資金の圓滑を期することも、今後の庶民金融機關の等しく心掛くべき點だと言はなければならぬ。斯くするには、どうしても社内保留に努めて資金の潤澤を期せなくてはならない。

最後に當社専務取締役菊池休松氏は、庶民金融機關としての無盡業の使命を全ふすべく、不斷の努力をなすつゝあることは、業界周知の事實にして、未だ一般の誤解があり、冷笑を以て迎へらるゝ氣味ある業者に伍し、固き信念を以て、業界の發展と、庶民階級に對する金融上の利便を興ふることに、盡しつゝある事實に對しては

一面誠なき筆者すら、多大の敬意を表するに躊躇しない。即ち全國無盡集會所發行の「無盡論文集」中には、大乘佛教と無盡」と題し、無盡の性質と大乘佛教との關係並に道徳的關係に就て、氏の主張を述べ、無盡通信一月號には、新年を迎へて無盡業の使命を思ふ」と題して無盡業の公益性を論ずる等、現代唯物萬能の經濟界にあつて、信仰的精神に生き、尙且つ經營をあやまらず、よく其使命を果しつゝあるものである。今や業界に人なきを嘆ぜらるゝのとき、氏の如き人格的經營者を業界に見出すことは、實に業界の發展に曙光を認むるのみならず、庶民階級に對する福音だと云ふも強ち過褒ではあるまいと信ずる。

第二項 個人經營無盡業者の異彩

現行無盡業法制定直前に於ては、實に千七百個の多數を算したる個人經營の無盡業者も、今や僅かに數個を残すに止まり、それも多くは、廢業の氣運にあつて、實際營業をなしつゝあるものは、眞に二、三者あるに過ぎぬ。その中にあつて、よく會社組織の業者に劣らざる成績を擧げてゐるものに、香川縣琴平町にある琴平無盡融通商會がある。

元來無盡が個人相互の救濟的性質を多分に有し、且つ無盡を組立つるに當つては、被救濟者の手を以て、全部の加入者を集むることは、甚だ困難なる事情あるがために、仲介者の奔走により、よく成立するものである。既に徳川時代江戸に於ても、無盡の世話人のありしことは、前述せるところであるが、今日の營業無盡が行はるゝに至りたるまでには、個人の仲介者が、利益を得て無盡の取扱をなしたるもので、今日では營業無盡も亦一つの企業化し、現代式の企業組織を必要とするに拘はらず、今尙個人經營のものでありながら、現代式企業化せられたる業者の間に介在して、相當の業績を擧げてゐることは、無盡の歴史に顧みて、寧ろ興味あるものと言はなければならぬ。

茲には個人經營の無盡業者中に於ける異彩とも見らるゝ、琴平無盡融通商會の現狀並に其無盡組織及方法に就き少しく記述する。

當商會は無盡業法實施直後の大正五年三月、免許を受けて開業せるものであるから、現在業者中では古參に屬する。目下香川縣一圓を營業區域となし、資本金は壹萬圓に過ぎざるも、昭和三年六月末現在に於て、左の契約高がある。

給付金契約高 三、八九八、五〇〇圓
 掛金契約高 四、三四七、二八三圓

未收無盡掛 一九八、〇六六圓

契約高から見れば、會社組織の業者に遜色がない。未收無盡掛金の掛金契約高に對する比率が、四分五厘強に當ることは、決して優良だとは言はれない。然し當商會の考課狀その他資産、負債勘定を知るべき、何等の資料の持合せがないため、其内容に立至つて論評することは不可能である。

今當商會の營業案内を見るに、既に參千圓の大口無盡の免許を受け、參千圓會以下百五十圓に至る各種の無盡が營まれてゐる。その中壹千圓會の掛金表は左の通りである。

給付未済口掛金		給付済口返掛金	
自一回	至一回	自一回	至一回
四四、〇〇	三五、〇〇	三四、〇〇	三〇、二〇
自二回	至二回	自二回	至二回
三五、〇〇	三〇、〇〇	三〇、〇〇	一九、〇〇
自三回	至三回	自三回	至三回
三〇、〇〇	二五、〇〇	二五、〇〇	一四、〇〇
自四回	至四回	自四回	至四回
二五、〇〇	二〇、〇〇	二〇、〇〇	九、〇〇
自五回	至五回	自五回	至五回
二〇、〇〇	一五、〇〇	一五、〇〇	四、〇〇
自六回	至六回	自六回	至六回
一五、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	〇、〇〇
自七回	至七回	自七回	至七回
一〇、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	〇、〇〇
自八回	至八回	自八回	至八回
五、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇
自九回	至九回	自九回	至九回
〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇

此掛金表により、無盡の利廻りを算出して見る。先づ掛金者が終會まで掛込を續け、滿會に於て給付金を受取つたとすれば、掛込金總額九百六拾壹圓に對し、給付金壹千圓を受取るものであるから、その差額の參拾九圓が拂込金に對する確定利息だと言はなければならぬ。之が日歩を算出するときは、日歩七厘七毛となり、年利に換算すれば貳分八厘に當るもので、決して好利廻りとは言はれない。又他の會社組織の無盡業者にも斯くまで低利廻りのものは珍らしい。然し無盡特有の入札差金の配當金は當商會の無盡にもあるから、それを加算すれば、貯蓄銀行預金その他の貯蓄機關金利に比し、決して劣るものではない。

次に借入金金の利廻りを見るに、初回到當籤給付せられた場合には、給付金の壹千圓に對し、滿會までに壹千百拾圓四拾錢の掛金をなすものであるから、差引壹百拾圓四拾錢を、借入金壹千圓に對する利息と見なければならぬ。之に依つて利息を算出すれば、日歩貳錢八厘六毛となり、之を年利に換算すれば、壹割四厘に當ることとなり、崩濟の借入金利息としては、決して高利とは言はれぬ。また會社組織の業者のそれに比し、割高とはなつてゐらぬ。

此借入金利率は、當籤給付の場合に於ける利廻りであるから、業者の定むる入札限度額までにて落札したときは、金利は頗る高率となる。

尙當商會の契約約款を見るに、契約者に對しては、車代その他の獎勵金名義を以て、何等の支給をしてもらぬ。その結果として、預金利廻りを低下することとなり、借入金利率を、給付を受けたる者に有利に轉換せしめない。

第六款 無盡業者の資産状態

無盡業者が、其營業上の資金を運用するには、無盡業法に嚴格なる制限が設けられ、それがため多額の資金を擁する會社は、自個資金の運用に窮し、既に業者間の問題となつてゐる。即ち業法第九條によれば、左記四項の運用のみに限られてゐる。

- 一、國庫債券、地方債證券その他特別の法令により設立したる會社の債券又は株券の買入。
- 二、前號の有價證券又は不動産を擔保とする貸付。
- 三、掛金者に對し、契約給付金額を限度とする貸付。
- 四、銀行への預け金又は郵便貯金。

而して第三項の掛金者に對する、契約給付金を限度とする貸付は、その總額が拂込濟資本金及諸準備の總額を超ゆることが出来ない。だから如何に多額の資金を有する會社と雖も、掛金契約者よりの申込に對し、無制限に貸付に應ずることが出来ない状態にある。之に關し、大阪市に於て、最も理想的に、堅實なる經營をなしつつある、關西商工無盡株式會社の實例を見るに、昨年十二月末現在の拂込資本金は七萬五千圓、法定積立金五千圓、別途積立金六千圓、此總額八萬六千圓である。即ち之だけは業法第九條に定むる、契約者に對する契約給付金限度貸付をなし得るも、之を超過して貸付をなすことを禁止されてゐるため、同年末の此種貸付金は、八萬參千四百拾五圓となつて、殆んど拂込資本金、その他の總額に達してゐる。然るに同社は、銀行預金振替貯金、有價證券、現金等に拾九萬四千餘圓の資金を所有し、此資金を契約者に對する貸付金に運用すれば、最も有利とされ、且つ一般契約者の便利とするところなるのみならず、現實に資金を有しながら、契約者よりの申込を拒絶することとなり、會社の信用上に於ても、甚しく不利を蒙むることあるは免れない。

然るに現在の業法を改正して、掛金者に對する契約金限度貸付を無制限に認むるときは、折角堅實なる發展途上にある無盡業者をして、往年の弊害を再びすることなきを保し難く、現在の制限があまりにも嚴に失すること論を俟たないけれども、今直ちに全然之を無制限とすることは、無盡業界の實狀に照し、時期尚早の感なしとせぬ。

無盡業者に對しては、叙上の如き資金運用上の制限がある結果として、多額の資金を擁しながら、庶民金融機關としての本質に副ふこと能はず、主として不動産擔保貸付が行はれ、庶民金融機關である反面には、不動産金融機關の觀を呈するに至つてある。今昭和二年末現在に於ける、全國無盡業者の資産及負債を見れば左の通りである。

資 産		負 債	
之 部		之 部	
拂込未済資本金	一七、〇八三、四五四	資 本 金	二九、九三二、〇〇〇
未收無盡掛金	三八、四三七、〇三八	諸積立金	四、八一四、七七六
有價證券	七九七、九四九	未拂無盡給付金	一一、一三三、三二五
貸 付 金	二二、二七五、四七五	未拂入札差金	四、四一八、二五二

預 け 金		未拂解約返戻金	
土地建物什器	七、八七四、六三七	無盡給付資金	三一、六五一、五八七
各種勘定	五、〇七一、六五三	借 入 金	二、〇一六、九五六
損 失 金	四、一七九、九三〇	各種勘定	七、二四五、〇四七
現金有高	七一九、〇九七	純 益 金	一、九五九、四九四
總 計	一、〇三四、〇六九	總 計	九七、四七三、三〇二

之に依つて見れば、未收無盡掛金が最も多い。此勘定の中には、既に給付を済して、返掛金となるもの、即ち貸金に該當すべきものがあり、又給付未済口のものにして掛金をなさざる者がある。給付を済したる分に對しては、會社は完全なる債權を所有し、徹底的回收方法を講ずることが出来るけれども、未だ給付金を交付せざるものに對しては、現行業法を以てしては、強制回收の方法がない。即ち債權的効力が發生してゐらぬから、右に掲げたる數字の全部が、會社債權と見ることは出来ない。が、何れにしても此未收無盡掛金の多いことは、決して業界の前途のため、樂觀を許されない。之に次いで多額に上るものは、貸付金である。此貸付金の中には、業法第九條第二號による、契約者に對する契約給付金を限度とする貸付、有價證

券擔保貸付の全部が包含せられてあるものではあるけれども、其大部分は不動産擔保の貸付金であると思なければならぬ。次に預け金勘定に屬するものは、殆んど銀行預金だと言つても差支へない。

右の表で特に目に付くは、所有々價證券の尠いことである。信用を重んずる業者としては珍らしい現象である。然かもその所有々價證券の大部分が、勸業債券であることも一驚に値するなしとせぬ。

次に昭和三年末に於ける全國業者の利益金處分方法を見る。但し前記數字とは幾分相違する點があるけれども、便宜上全國無盡集會所發行の全國無盡會社要覽に掲載せられてあるものを、その儘掲記して、處分方法を知る大體の便に供する。

昭和三年末全國業者純益金總額	百九拾參萬四千貳百拾五圓
之を處分するに——法定積立金	貳拾貳萬六千六百六拾圓
各種積立金	四拾六萬貳百八拾參圓
賞與金	拾五萬參百九拾五圓
配當金	六拾貳萬參千九百七拾九圓
雜	六萬壹千百六拾六圓

後期繰越金

四拾壹萬壹千七百參拾壹圓

之を以て、拂込資本金に對する利益率を算出して見るときは、年壹割六分に當り、純益金の三割二分六厘を積立金に充てゝある。又全國業者の配當金平均率を見るときは、年三分八厘強となつてゐる。

第三章 無盡會社の見方

第一節 概論

無盡會社は、無盡を營業として取扱ふものであり、其無盡は非營業無盡のやうに、講員相互の關係でなく、會社對契約者との直接關係となつて、會員相互間には、何等權利義務の關係を残さない。此會社對契約者間の債權、債務は複雑となつてゐる。無盡に特殊なる此債權、債務の關係を除けば、一般の銀行會社と異なつたところはない。従つて無盡會社の見方も、銀行會社の見方も、其根本は大同小異だと言はなければならぬ。

第一款 資本金

無盡業法に定むる無盡會社の公稱資本金は參萬圓以上であることを要し、其拂込額は壹萬五千圓を下ることを得ない。現在無盡會社の資本金は此制限によつて、何れも公稱資本金は參萬圓以上となつてゐる。銀行の資本金に比し甚しく貧

弱であると云はなければならぬのみならず、銀行が資本金を大にして、信用保持に努むるため、都會地銀行の多くは、法定資本金を遙かに超過してあるに反し、無盡會社は、都會地に於て、法定資本金の最低額を以て、一流會社に伍して優良なる成績を擧げてある。即ち東京市神田區一橋通にある相互無盡株式會社がそれである。

無盡會社は一方から集めた資金を、他の一方へ給付するものであり、掛金未納者に代つて支拂をなし得る資力あれば足り、多額の資本金を必要としない。殊に會社の取締役は、無限責任を負はされ、辭任後も二年間は此の責を負ふものであるから、契約者は會社取締役の個人的信用に重きを置き、其資本金は問題としないとの論を耳にするも、信用を重んずる無盡會社としては、資本金の大なる程經營上に有利であること勿論であると云はなければならぬ。

現今無盡業者にして最も大なる資本金を有するものは、公稱資本金百五十萬圓の京都市にある實業無盡株式會社である。然し當社の拂込高は四拾七萬貳千五百圓であるから、拂込資本金額に於ては、東京市の相生無盡株式會社の、百拾萬圓の資本金全額拂込に比すれば遙かに劣つてある。

何れの銀行會社と言はず、資本金の多いことのみを以て、信用あり、堅實なりとすることは出来ないことは、數年來打續く大會社、大銀行の窮狀暴露せる事實に見ても明らかである。無盡會社も亦資本金のみを以てしては、到底會社内容の眞實を知る標準とはならない。殊に現今の如く、多くの無盡會社が、資本金の小額なる點から見れば、殆んど資本金の比較をなす程の問題とはならないで、寧ろ無限責任を負ふべき役員の、個人的信用に重きを置くを便宜ともされてある。

全國の業者を通覽するに、未だ最低法定資本金を以て經營されてあるもの多數に及び、何れも相當成績を擧げつつあるのみならず、無盡會社としては資本金の大なる方に屬するものと見られてある。廣島市にある共益無盡株式會社の如きは、公稱資本金參拾萬圓(内拂込高貳拾四萬圓)を有し、大正二年設立せられたるものであるに拘はらず、既に行詰まりの状態となり、昭和三年六月末現在に於て給付契約高九萬六千圓、掛金契約高拾壹萬九千餘圓あるに對し、未收無盡掛金は拾萬餘圓の多額に上り、昨冬整理したるときは、債務超過となつて、僅かに某有力者が犠牲的に整理の任に當り、漸く目鼻を付けたけれども、公稱資本金は全部切崩し、新たなる資金の拂込をし

なければならぬものゝ如くである。此事實に據つて見れば、資本金額は殆んど信用の對照とならないやうであるが、之を以て直ちに全班を率することは出来ないこと勿論である。

要するに、無盡會社の見方としては、先づ第一に資本金額を見ることを必要とし、之が如何に利用せられておるかを研めなければならぬけれども、資本金額に捉はるることは大なる禁物である。

第二款 契約高

銀行信用の標準を、資本金額と、其預金總額においてあることは、最も一般的である。預金額の大小を以て、絶對的に信用上の尺度とすることは出来ないこと勿論であるけれども、預金額は一般人氣の消長により増減するものであり、従つて之を一般信用の反映とも言はなければならぬ。而して無盡會社の無盡契約高は、恰も銀行の預金と同様のものと見らるるものであり、會社信用の消長によつて、契約高の増減あるべきは争はれない。現在契約高の多額なることは、信用厚く營業も盛んな方であると見なければならぬ。然かも年々契約の増加する方は、業績の向上

を意味するものであるが、他會社に比し、多額の契約高を有しながらも漸次減少する方にある會社は優良なりと言はれない場合が多い。

第二節 考課状の見方

第一款 概説

無盡會社の考課状を見るに當つては、無盡會社獨特の科目の内容を知らなければならぬ。無盡會社には特殊の記帳方法があり、其主要の點に於て、一般の會社と異つた方法が採用せられておるから、一般銀行會社の考課状を見る積りで見たのでは、其真相を解することが出来ない。

第一に其最も重要な相違點は、會社の實際の資産負債が、考課状の資産負債と一致して居ない點である。此點に關しては最近業者間の問題となつて其改正を叫ばれておる。

第二には會社が實際缺損をして居ないに拘はらず、缺損として計算しなければならぬと言ふ點である。尤も此點は第一の資産負債の不一致から生ずる問題

ではあるが、之は現状に於ても黙過し難い點だと言はなければならぬ。之等の點に關しては主務官廳である大藏省の方針を改めなければ、此不合理を敢てするも止むを得ないものの如くである。

斯の如き記帳方法が採用せられたる理由は、大正七年大藏省に開催せられたる地方無盡主任官協議會に於て、菅谷銀行検査官が無盡計算に關し説明をなしたることがある。今其説明の要領を記述すれば左の如くである。

『今日ハ現行ノ無盡計算法ノ大體ニ付少シク述ベル所アルベシ、現行ノ無盡計算法ヲ決定スルニ際シ、參考トシテ舊來當業者ノ用ヒ來タリシモノヲ研究セシニ、不備ノ點アリテ範ト爲スニ足ラズ。今試ニ舊來ノ計算法ノ二三ヲ舉ゲンニ

甲法 無盡取引ハ、一方預り金ト、一方貸金ノ取引ナリトノ觀念ニ基キ、給付未済口ノ掛金ヲ預り金トシ、給付金ノ一部ハ預り金ノ拂戻トナシ、一部ハ貸金ト看做シ、給付済ノ掛金ヲ貸金ノ辨済トシテ計算スルモノナリ。

此方式ニアリテ缺點ト認ムベキモノヲ舉グレバ

一、計算ノ精神ガ無盡業法第一條ニ副ハズ、即チ同法ニ依レバ無盡取引ナルモノハ預り及貸付ニアラズ、特

殊ノ取引ナリ、然ルニ之ヲ預り金及貸金ト同様ニ計算整理スルハ不適當ナリ。

二、無盡ノ計算上最モ重キヲ置クベキハ、將來給付ヲ爲スベキ資金ノ計算ヲ明確ナラシムルニ在リ、元來其責任準備ナルモノハ無盡ノ掛金ノ金額又ハ其大部分ヲ以テ之ニ充ツベキモノニシテ其掛金ハ既ニ徴收シタルモノハ勿論、延滞ノモノト雖モ、豫定收支ノ計算上ヨリ之ヲ準備金ニ充當シ居ルヲ常トスルヲ以テ、是等ノ計算ヲ明カニスルニアラザレバ計算ノ整理ヲ期スルヲ得ズ。然ルニ前述ノ計算ニアリテハ、掛金ハ既收ノモノノミヲ掲ゲザルト 給付済者ノ掛金ハ、貸金ノ返済ノ如ク、計算上ニアリテハ隠レタルモノトナリテ貸借對照表上ニモ其額ヲ判明ナラシムル能ハズ。随ツテ無盡給付資金ノ計算明ナラザルガタメ、無盡會社ニ於テ勝手ナル計算ヲ以テ利益ノ配當ヲナシ、之ガタメ利益ノ喰込ミヲナシ、其結果資産ノ確實ヲ缺グニ至リシモノ尠カラズ。

乙法 無盡ノ掛金ハ負債トシテ之ヲ掲ゲ、給付金ハ貸金ト類似セルモノトシテ資産ニ掲グルコトハ甲法ニ同ジキモ、其異ル點ガ、掛金ハ最後ニ至ル迄負債トシテ掲ゲ、給付金ハ返債積立アルニ拘ハラズ、其額ヲ動カサズシテ給付ノ金額ヲ掲ゲ、最後ニ至リテ兩者ヲ引落スノ計算方法ナリ。

此方法モ、責任準備計算明ナラザルト、其掛金及給付金ノ計算上ノ觀念ガ、業法第一條ノ定義ト一致セザルノ缺點アルノミナラズ、貸借ノ金額ヲ徒ニ増大ナラシムルノ缺點アリ。即チ給付済者ヨリ徴スル掛金ノ如キハ最後迄之ヲ負債トシテ計算スルハ無盡取引ノ性質上適當ヲ缺クノミナラズ、給付金即チ會社カラ云へバ義務履行ノ金額ノ全部ヲ資産トシテ掲グルガ如キモ穩カナラズ。尙其資産負債ノ全額ガ契約満期ニ至リ一時ニ消滅ス

ルガ如ク計算スル點モ亦理論上適當ナラズ。如此乙法モ缺點尠カラズ。

丙法 徒ニ資産負債ヲ澎大ナラシムルモノニシテ、契約上ノ掛金ノ總額ヲ資産トシ、給付スベキ總額ヲ負債トシテ掲グルモノ。此法ハ契約ニ基キ徴收スベキ掛金ヲ、最後ニ至ル分迄資産トシテ計上スルモ其掛金ノ内ニハ返済積立金ノ如キ、元金ト利息ニ相當スルモノアリ、是等ハ其全額ヲ掲クベキモノニアラズ。何トナレバ農工銀行ノ年賦金ノ如キ、例ヘバ壹萬圓ノ貸出シニ十ヶ年間ニ元利合計貳萬圓ヲ拂込ムモノニアリテハ、之ヲ元金ニ相當スル壹萬圓ノ資産トシテ掲グル例トスルモ、若シ其元利合計タル貳萬圓ヲ以テ資産トスルトキハ、實價ナキ資産ヲ掲クルコトトナリ適當ナラズ。換言スレバ拂込ノ如キ將來ニアル債權ノ如キハ之ヲ相當割引スルニアラザレバ其實價ヲ得ル能ハズ、然ルニ之ヲ割引セズシテ掲グルノ不便アリ。尙此計算ニ於テハ、契約當初ニ於テ、無盡契約期間即チ三年又ハ五年間ノ利益全部ガ掲上セラルル計算トナルヲ以テ、利益ヲ先ンジテ配當スルニ至ルノ不便アリ。此他尙本法ニアリテハ、缺口又ハ權利義務ノ讓渡ニ依リ、掛金者ニ變更アルベキニ拘ハラズ、之ヲ確定セルモノトシテ計算シ、或ハ大阪式無盡ニ在リテハ、給付済者ノ返済積立金ガ増加スル場合ニ於テ、徒ラニ繁雜ナル計算ヲ爲サザルヲ得ザル等ノ不便アリ。

從來ノ計算法ハ以上ノ如ク缺點尠カラザルヲ以テ範トナスニ足ラズ。無盡ノ掛金ハ保險ノ掛金ニ似タル所アリ、又給付金モ保險金ニ似タル所アルニヨリ、保險ノ計算ヲ適用スベキカト云フニ、保險ニ於テハ掛金ヲ利益ト看做シ、保險金ヲ損失ト看做シテ計算スルヲ以テ、之ヲ無盡ト比較スレバ、無盡ハ斯ク極端ニ解スベキモノニアラズ。然ラバ定期積立金ニ似タルモノトシテ其計算法ニ依ルベキカト云フニ、定期積金ハ預金的性質ヲ具フルモノナルコトハ、供託ノ規定等ニ依リテ見ルモ知ルベク、又積立金ノ觀念ニ於テモ預金ト同様ニ看做シ居ルヲ以テ、之ガ拂込金ヲ負債トナスヲ適當トスルモ、無盡觀念ハ之トハ少シク異リテ幾分カ保險ニ近キモノアリ。茲ニ於テハ保險ト定期積立トヲ折衷シタルモノヲ採用スルヲ適當ト認メテ現行ノ計算法ヲ採ルコトトナレリ。

之に依つて見れば、現行の計算法は、保險と定期積金との兩計算方法を折衷したるものとせられてゐる。即ち保險會社が徴收保險料を利益とし、支拂保險金を損失と看做して計算するため、其計算方法は頗る簡單であるが、新規契約多くして、徴收保險料は漸次増加するに反し、支拂保險金が、舊契約高に應じて左のみ増加しない場合がある。更に之を詳言すれば、新規契約増加に伴ひ、時期不確定の債務、若くは或期間經過後發生する債務は、當然増額するものであるに拘はらず、新規契約増加に伴ふ收入保險料の全額を、利益に計算することは、必ずしも正當なる計算方法とは言はれない。無盡の計算方法を之に據ることは、勿論不適當であるけれども、無盡の計算が保險の計算に似たものあることは争はれない。

前にも述べたる如く、現行無盡計算法に對しては、之が改正を唱導するものがあり、菅谷銀行検査官の説明に對しても少からず異論を有するものがあるけれども、現在行はれてあるものは、前掲説明の通りである。茲には参考のため計算法の根本的説明を掲出する。

(一) 現行無盡ノ計算法ニアリテハ、毎回期限到達シタル掛金ヲ以テ一團ノ無盡ニ對シテ、會社ノ確定シタル債權トシテ資産ニ掲グルト共ニ、其給付ノ豫算ニ基ク掛金拂込高ハ勿論、掛金延滞未納高ヲモ之ヲ給付資金トシテ計算シ、給付金額給付者ノ確定シタル場合ニ於テ、無盡給付資金中ヨリ之ヲ拂出シテ、未拂無盡給付金ナル債務トシテ之ヲ負債ニ掲グルモノニシテ給付金ノ交付ヲナシ、給付ノ義務ヲ履行シタル場合ニ至リテ、其科目ハ消滅ス。尙無盡給付資金中將來ノ給付豫定額ニ超過スル金額ハ、強テ其全部ヲ存置セシムル必要ナキヲ以テ、一部ハ之ヲ利益ニ組入ルルヲ妨ゲズ。又未收掛金ヲ徴收シタル場合ニハ無盡給付資金ニハ増減ヲ來スベキモノニ非ズシテ、現金在高ニ夫レ丈ケ増加ヲ來スニ過ギズ。

更に無盡の記帳計算上其根幹をなすところの「無盡給付資金」に關し、當局の記明は左の通りである。

(A) 無盡ノ計算中、其性質最モ複雑セルモノハ無盡給付資金ナリ。無盡給付資金ハ、將來給付ノ準備トシラ備フベキモノナルモ、財産其モノヲ指スニ非ズ。會社ノ各種ノ資産中將來ノ給付ノ資産ニ充ツベキ、豫算額ヲ指スモノニシテ無形ノ勘定ナリ、故ニ未收掛金ガ延滞スルモ又到底徴收ノ見込ナキニ至リ、缺損ニ歸スルコトアルモ、會社ノ財産ノ總額ガ、無盡給付資金ノ額ヲ超過スル以上ハ、無盡給付資金ハ存在スルモノト謂ハザルベカラズ。從來掛金ガ不足スル場合ニハ、會社ノ財産ヲ以テ立替ヲナシテ給付金ヲ仕拂ハザルベカラズト謂フモノアルモ、無盡給付資金ナル勘定ヲ設クルトキハ、計算上ニ於テハ特ニ立替ヲ俟タズシテ、其他ノ財産ガ當然無盡給付資金トナルガため、財産ノ所屬區分判明シ之ヲ流用消費スル能ハザルニ至ル。

(B) 元來無盡給付ニ備フベキ資金ノ額ハ、豫定收支計算書ニ於ケル掛金ノ範圍内ニ在ルベキコトハ明カナルモ、給付スベキ現金ハ、強テ掛金ノ受入レヨリ生ジタル現金ヲ以テスルノ要ナク、株金ノ拂込ミニヨリテ取得シタル現金ナリ、又ハ有價證券ノ買却代金ナリ、放資方法トシテノ回收金ナリ、又ハ借入ニヨリテ得タル現金ナリニテ、仕拂ヒ支障ナキモノナルヲ以テ、掛金其他ノ財産ガ減少スルコトアルモ、資金ハ之ニ伴フテ減額スルモノニアラズ。即チ給付ノ義務額ガ減少セザル限りハ、掛金其他ノ財産ガ減少スルモ、資金ハ減少スルモノニアラズ。未收掛金ガ缺損ニ歸スルコトアラバ、會社ノ利益ハ減少スルコトアルモ、資金ハ減少スルコトナシ。(C) 尙給付金ノ性質ヲ明カナラシムルため、之ヲ保險ノ責任準備金ト對照スレバ、責任準備金ハ保險掛金ナル利益中ヨリ其一部ヲ特ニ積立ツルモノナルヲ以テ、積立テ得ベキ最尙限度ニ付、嚴格ナル制限ヲ加フルノ必要アルモ、無盡給付資金ハ、掛金ノ期限到達高ガ當然資金ノ額トナリ、之ヲ他ニ支出スルコトナキ以上ハ、資

金ハ常ニ豊富トナルベキモノナルニ付唯資金ヨリ利益トシテ控除スベキ最大限度ニ付嚴格ナル制限ヲ加フレバ足ルコトトナル。

(D)更ニ資金ヲ定期積立ノ仕拂準備ト比較スレバ、茲ニ定期積立ニシテ毎月二圓六十錢宛三年拂込ミ三年ニ至リ百圓ヲ渡スモノニアリテハ、拂込高計九十三圓六十錢ト六圓四十錢ノ給付補填備金ヲ以テスレバ足レリ。即チ受入金ト補填備金ヲ備フレバ足レリ。然レドモ無盡ニアリテハ、一團ノモノノ掛金ノ内延滞スルモノアルモ、損失ニ歸スルモノアルモ、之ガ爲給付ヲ減ズル能ハザルヲ以テ、受入金ト補填備金トノ外ニ延滞掛金ト缺損ニ歸シタル掛金トヲ加ヘタル金額ヲモ備ヘ置クノ必要アリ。之レ兩者ノ著シク異ナル點ナリ。

(E)無盡給付資金ハ、如何ナル場合ニ増加スルカト云フニ、第一ハ掛金ノ期限到達スルニ因リ、第二ハ缺口其他ノ事由ニ依リテ、豫定ヨリモ利益ガ減少セシ場合ニ於テ、最初資金ヨリ利益組入レタル高ガ過多ナリシ結果ヲ生ジテ、利益ヨリ更ニ組戻ス場合等ナリ。又其減少スベキ場合ハ、給付又ハ解約返戻若クハ延滞掛金ノ免除確定シ、之ガ決済ノ手續ヲ爲ス場合及利益トシテ其一部ヲ損益勘定ニ組入ルル場合等ニシテ其殘額ハ必ず將來ノ給付義務ヲ履行シ得ベキ、充分ノ額ナラザルベカラズ。

(F)無盡給付資金ノ勘定ハ、無盡ノ一組毎ニ爲スベク、隨ツテ之ガ不足モ一組毎ニ補填スベキモノニシテ、甲組給付資金ヲ以テ、乙組ノ給付資金ヲ補填スルコト能ハズ。

次には入札の場合に於ける解約の處理方法に關し左の如く説明せられてある。

(一)入札ヲ爲シタル場合、例ヘバ百圓ノ給付金ニ對シ、八十圓ニテ落札セシ場合ニ於テハ、一應百圓ヲ給付金ヨリ拂出シテ、之ヲ未拂無盡給付金トシテ掲ゲ、其内八十圓ヲ給付手取金トシテ交付シ、残り二十圓ヲ未拂入札差金トシテ拂出シ、未拂給付金ノ債務ヲ決算シ置キ、入札差金ヨリ會社ニ於テ利益ニ組入ルル額及掛金者ニ交付スベキ金額ハ、交付ノ都度未拂入札差金ヨリ拂出スベキモノナリ。

(二)給付未済口ニシテ、解約ヲナシタル場合ニ於テハ、既ニ徴收シタル掛金ハ返戻シ、延滞掛金ハ之ヲ免除シ解約手数料ヲ徴セル場合ニアリテハ、掛金返戻高ト差引スルヲ常トス。此場合ニハ解約者ニ對スル無盡給付資金ハ不用ナルヲ以テ掛金拂込高及延滞高ニ相當スル金額ヲ無盡給付資金ヨリ拂出シテ、之ヲ未拂解約返戻金トシテ掲ゲ、其内手数料ヲ徴スル場合ニハ之ヲ差引クモノニシテ、延滞掛金ニ相當スル金額ハ、之ヲ未收無盡掛金ヨリ控除スベキモノナリ。

尙最後に未收無盡掛金に就て左の如き補足的説明がある。

(四)未收無盡掛金ニ付テハ、期限到達シタル毎回の掛金ノミヲ掲ゲテ、其以後ノ分ヲ債權トシテ財産ニ掲ゲザルハ、將來ニアリテハ一團ノ掛金高ハ、掛金者ノ解約ニヨリ口數ニ異動ヲ生ジ、又ハ權利義務ノ讓渡ニ依リ納人ノ交代スルコトアリテ、納人及納付金高確定セザルモノヲモ揚グルコトトナリ、不適當ナルノミナラズ、前ニ述べタルガ如キ種々ナル缺點アルト又一ハ無盡業法第十八條ニ於テ、無盡業者ハ各無盡ニ付、抽籤入札ノ都度其收支ノ計算ヲ帳簿ニ記載次回ノ抽籤入札ノ前日迄ニ之ヲ營業所ニ備ヘ置クベシトアル趣旨ニモ基キタル

モノナリ。」

一一二

以上の説明によりて、當局の現行記帳法を採用したる理由と併せて記帳の根本法則、並に科目の内容を知ることが出来るであらう。而して無盡會社の考課状を見るに當つては、此記帳の根本法則、並に科目の内容を明らかにせられてあるが、茲には便宜上、重ねて無盡會社特有の科目に付き、各別に摘記して参考に資する。

第一、資産の部

資産之部に於て無盡會社特有のものは、未收無盡掛金である、此未拂無盡掛金には、給付済口と給付未済口とがあり、何れも掛金拂込期日が到達したものであるが、給付済口は既に契約金額の支拂をなしたるものであるから、會社から見れば貸金の回収であるに反し、給付未済口は、未だ契約金が交附されていないから、其性質に於て甚しく異なる所があるものと言はなければならぬ。従つて會社の内容を調ぶるに當つては、給付済口の未收掛金の如何が、主として問題となるけれども、多くは之を區別して居ない。故に之れは給付済口と未済口との合計せられたものに據つて、大體を見ることとする。昭和二年十二月末現在に於て全國業社の平均未

收無盡掛金は其掛金契約高に對し、四分四厘弱の比率に當つてあり、給付金契約高に對しては四分六厘の比率に當つてある。茲には一般の例に従つて、掛金契約高の比率四分四厘を標準として記述する。

第二、負債之部

負債之部に於て、無盡會社特有の科目は、無盡給付資金、未拂無盡給付金、未拂解約返戻金、未拂入札差金の四科目がある。

無盡給付資金は無盡の計算中其性質最も複雑せるものであつて、實際の負債と言はれない性質のものである。即ち將來給付の準備として備ふべきもので、將來に於て發生する給付の資金に、充つべき豫算額を指すものと見られる。又會社の利益となるものが含まれてあるものである。此無盡給付資金は、多額なる程良いものと言はなければならぬ。掛金契約高との比率が四分五厘以上あれば良い方であり、之に達しないものは、其差の甚しい程不良だと見られてゐる。此無盡給付資金は、多い程其經營振りが堅實であると言はなければならぬ。未拂無盡給付金は、當籤、落札等によつて給付者確定せるも、保證人、擔保差入等不

備のため、給付せざるもの若くは落札者が給付を受くることを好まず、未給付者としての取扱を望むものに對し、掛金の差額を會社が負擔し、給付金を此科目にて處理する場合もある。斯く給付を受くることを避くるもの多數に及ぶときは、會社は此資金の運用をなすこと能はざるに、掛金の差額を負擔せねばならぬ不利を蒙むることとなる。尤も此點に關しては、會社約款には明記してないけれども實際は契約者の希望に従ふものゝ如くである。此未拂無盡給付金の多額なることは感心したものでなく、甚しきに至つては、給付すべき條件を具備してありながら、支拂資金のないために、言を構へて給付しないものもある。會社としては給付が圓滑に行はるゝやう努めなければならぬ。

未拂解約返戻金は中途解約者に對する返戻金を、講會の満了するまで會社が預つてあるもので、此點に關しては、各社共其約款に於て、滿會の際支拂ふべき旨を明記してある。無盡會社としては中途解約者の出ること、甚だ不利とするところで、加入者の選擇には、相當苦心を拂ひつゝ、尙且つ解約者の出することは、實際上免れないものゝ如く、各社共此科目に屬する勘定を相當多額に掲上してある。

給付済口の解約分は、未收掛金の全部を一時に徴收し、契約者は拂込期限の利益を拋棄することとなり、従つて未拂解約返戻金は、給付済口分には起らないで、給付未済口分のみ生ずるものである。此科目に屬する勘定が、あまり多いことは感心されない。

未拂入札差金は入札差金を、入札の都度掛金者に交付するときは、殆んど此勘定を残さない。然し多くの會社は入札差金を次回に分配するものである。斯る方法を採る會社にして、多數の契約があり、毎月講會が多く開かれるものには、此科目に相當多額のもの掲上してある。此標準を定めるには、掛金拂込を毎月する會社に於ては組數を以て、契約高を除し其五パーセント以内を正當と見られる。但し會社の約款の異なるに従ひ其額を異にするものであることは勿論である。

右の内無盡給付資金のみは、債權者未確定のもので、必ずしも會社の負債とならないものであるに反し、未拂無盡給付金、未拂解約返戻金、未拂入札差金等は何れも債權者は確定したものである。

以上の外未拂掛金者特別配當金、未拂滿期獎勵金等の科目を附するものがあつ

て、各會社必ずしも同一ではないから、一概に説明することは困難であるが、大體に於て以上の科目が根本となつて、其他の科目をも用ひらるゝを普通とする。故に之に基き次款に於て、考課狀の縦の見方、横の見方並に具體的實例を擧げて説明を試みることにする。

第二款 縦の見方

前款に述べたる如く、無盡會社の計算方法が一般銀行會社の計算方法と相違する點があつて、眞の貸借關係が現はれて居ないため、單に考課狀のみを以てしては、其眞想を知り難い。然し考課狀による方法が最も捷徑であり、且つ之に依つて大體を知ることが出来るものであるのみならず、之れ以外の方法は、其調査が困難であるから、先づ考課狀の見方を知ることが必要である。茲に言ふ縦の見方は、之れ迄の動き方を見やうといふので、それには少なくとも六期以上の考課狀が必要であるけれども、容易に手に入れることは出来ない。單に一期間丈けでは頗る不充分であるから、茲に數期間の考課狀が揃つたと假定して次のやうな表を作成する。

各期間營業成績比較表

1. 資 産				負 債						
資 産	未收無 盡掛金	比 率	何 比	合 計	負 債	無盡給 付資金	比 率	何 比	比 率	合 計
期					期					
期					期					
期					期					
期					期					

2. 損 益											
利 益	無利 盡益	比 率	何 比	比 率	合 計	損 失	勸誘費	比 率	何 比	比 率	合 計
期											
期											
期											
期											

3. 利益處分				
科 目	期	期	期	期
法定積立金	圓	圓	圓	圓
別途積立金				
退職慰勞基金				
株主配當金				
役員賞與金				
後期繰越金				
合 計				

此表に、數期間の、主要科目に屬する勘定の金額を各期別に掲上して、最初の期の比率を百とし、次期以後の員數を、最初の期の員數を以て除し其割合を記せば各期間の關係は一目して明瞭となる。例へば未收無盡掛金に於て最初の期が五萬圓であつたとして其比率を百となし、次期四萬五千圓となれば其比率は九十に下り、更に其次の期に四萬圓に減少すれば最初の期との比率は八十に低下することになる。

斯くして出來上つた表を如何に見るべきであるか。資本金、積立金等は、一般銀行會社と何等異るところはない。唯無盡特有の科目に就ては、既に前款述べたる如く、未收無盡掛金は小額なるものがよいのであるから、漸次減額する方がよい。之に反し無盡給付資金は多額なるものがよいのであるから増加する程よい。先づ總體から見て、左記科目は増加する程成績がよいと見られてゐる。

一、無盡給付資金 一、各種積立金 一、預金 一、有價證券

次に減少する方が、良好なる成績だと見られてゐるものは左記科目である。

一、未收無盡掛金 一、未拂無盡給付金 一、未拂入札差金

一、借入金 一、内容不明の假拂、假受金

而して各期間の數字を通覽して、其差の著しきもの、若くは新なる科目を設けたる場合等に於ては、特に其理由を探究する必要がある。又損益表に於ける各科目金額の漸次増加するものは會社業績の順調なる發達をなしつゝあるものであり、各期間に増減あるは、内容の整はないことを示すものと見なければならぬ。

會社は每期不良資産の銷却に努めなければならぬ。故に未收無盡掛金、所有不動産、營業用什器等資産勘定に屬するものが銷却が行はれてゐるかを調べ、之等が充分に行はれてゐるものは、堅實なる經營方針なりと見らるゝに反し、每期銷却どころか、却つて財産の増加益を掲上するが如き會社は、既に經營上の苦境にあつて行詰つてゐるか。或はそれまでに行かなくとも經營方針としては堅實なりと言ふことは出來ない。

次に無盡會社に於ては、無盡契約の増加が活動の眼目であり、信用の對象となるものと言はなければならぬ。故に契約高の増減の具合を各期に涉つて取調べる必要がある。近時一般の趨勢としては、増加の一途にあるも、總體に於て減少の傾

向のあるもの、若くは著しく減少したものは、其理由を探究しなければならぬ。茲に重要なものは無盡掛金の拂込状態にして、掛金拂込は會社經營の生命とも言ふべく、未收掛金の多きこと若くは漸次増加することは甚だ不堅實であり、之に反して未收が少なく、又漸次減少するものは堅實なる營業振りであると言はなければならぬ。今一二の例を擧げて見るならば

期 別	掛金契約高	未收無盡掛金高	割合
昭和四年上期末	一、七九四、一〇〇圓	四五、一八〇圓	〇二五
同 下期末	二、一二二、六〇〇圓	一一四、七六六圓	〇五四

契約高は順調なる足取りを示してゐるに反し、未收無盡掛金が甚しく増加してゐることは感心されない。當社は設立後間もない會社で、契約増加を焦つてゐる氣味があるものと見られる。

期 別	掛金契約高	未收無盡掛金高	割合
昭和四年上期末	四、二八四、〇四七圓	五〇、四〇五圓	〇一一
同 下期末	四、五五五、八八七圓	六四、〇二九圓	〇一四

未收無盡掛金の比率が幾分増加の氣味があるけれども、契約増加額の順調なる

足取りと、未收無盡掛金の少ない點から見て堅實なる經營だと言はなければならぬ。

期 別	掛金契約高	未收無盡掛金高	割合
昭和四年上期末	一、二、一一二、一〇〇圓	三四四、六三〇圓	〇二八
同 下期末	一、二、三三二、七〇〇圓	三一四、八三九圓	〇二五

契約高の増加した點は僅かであるが、未收無盡掛金は漸次減少してゐる。前者に比して、未收掛金が多い氣味があるけれども、整理の實を擧げ、堅實なる經營をしてゐるものと見なければならぬ。次に無盡會社の主たる資金となるものは掛金であるから、此掛金受入總高から、給付濟高を差引いた残りが、無盡の利益となるものであり、之に依つて種々なる費用を支拂つて行かなければならぬ。若し此差引残がないときは、會社資金に喰込むか、借入金となすこととなるか、或は未收掛金が一層増加するか、何れにしても成績は良くないこととなるものである。

第三款 横の見方

横の見方とは、現在の資産、負債の状態、損益の具合、營業の盛衰、整理の良否等あら

ゆる方面から現状を解剖分析し、最後に之等の結果を綜合して、會社を觀察批判する方法である。之がためには會社に於ける記帳整理方法の良否を調べることを必要とする。無盡會社の記帳法は、甚だ複雑となつてあり、少しく整理を怠るときは、實際と帳簿が不一致となつて、眞實の資産、負債が不明瞭となるものである。斯る會社は經營が堅實であつても、甚しく不仕末であると言はなければならぬ。然るに此記帳整理の良否を調ぶることは、實際上不可能な場合が多いから、茲には資産、負債の状態のみを見ることにする。

〔第一〕資産、負債の状態

未收無盡掛金の多いことは、無盡會社として最も好ましくないものであり、全國平均比率が四分五厘に當つてゐることは既に述べた通りである。此未收無盡掛金の中にも、給付済口と給付未済口とに分れ、給付済口の未收掛金が、給付未済口の未收より多いことは良くない。即ち給付済口は既に契約金を給付したるもので、其掛金は恰も銀行の貸金回収に當るものであるから、之が未收になることは給付に當つて調査が不充分であつたり、或は緣故者に對する給付であるために、嚴重な

る督促をなし能はぬ等の事情があるものと認めなければならぬ。

試みに一、二の例を擧げて見るならば

	未收無盡掛金	給付済口	給付未済口
甲	一一〇、四三七圓	九一、七九〇圓	一八、六四七圓
乙	三〇四、九〇五圓	一八一、八九一圓	一二三、〇一三圓
丙	三九、一四二圓	二四、九五四圓	一四、一八八圓

右の三社は何れも給付済口の未收が多い。之丈けで見ると、何れも感心出來ないけれども、給付するに際し、擔保を徴したるものと、信用によつて給付したものの別があるから、更に擔保の有無をも取調べなければならぬ。そこで前記三者の給付済口の未收掛金に對する擔保別の百分率を見ると左の通りとなる。

	不動産擔保	有價證券擔保	動産及債權擔保	信用
甲	・二〇	・〇一	・〇三	・七六
乙	・六九	・〇四	・〇八	・一九
丙	・〇八	・一四	・〇六	・七二

之に據つて見るときは、甲會社は未收掛金の八割三分強が給付済口であるに拘

はらず、次の擔保別を見ると、殆んど擔保がなく、七割六分が信用となつてゐる點から見て、甲會社は先づ未收掛金の成績不良であると言はなければならぬ。乙會社は給付済口が未済口より少し多く、五割九分強となつてゐるけれども、次の擔保別を見れば、有擔保八割一分で信用は僅かに一割九分に過ぎない點から見て、先づ乙會社の未收掛金の回収は左のみ困難ではない。丙會社は甲會社に比すれば稍良好であるけれども、乙會社に比するときは甚しく劣つてゐると言はなければならぬ。

更に無盡會社の主たる資金となるべき掛金が、果して會社經營上充分であるか否かを調べて見る。即ち無盡掛金入金高と、諸支出高及差引剩餘高を調べ、無盡掛金入金高に對する差引剩餘高の割合を各期別に見て、資金の過不足の状態より、會社の將來を卜する資料とするものである。試みに二、三の例を擧げて見やう。

甲	無盡掛金入金高		諸支出高		差引剩餘高		割合
	上期末	下期末	(A) 諸支出高	(B) 二差引剩餘高	Aに對するBの場合		
甲	四五六、三三〇	四一四、〇五五	四一八、七五一	三七、五六九	〇八二		
乙	一、二五六、五五〇	四五六、三三〇	九九五、二八一	二六一、二六九	〇七九		
丙	一八二、六三一	四一八、七五一	一六六、六八五	一五、七八〇	〇八六		

右の例は何れも成績良好の會社で、充分の餘裕があるものと認められる。そして甲會社に就て二期間のものを見れば左の通りとなつてゐる。

甲會社	無盡掛金入金高		諸支出高		差引剩餘高		割合
	上期末	下期末	四一四、〇五五	三八一、四一〇	二二、六四五		
甲會社	四五六、三三〇	四一八、七五一	四一八、七五一	三七、五六九	〇八二		

之によつて見れば當社は順調な發展をなしつゝあるものと見られる。但し右の支出の中には給付金をも含まれてゐること勿論である。

次には給付金關係を調べなければならぬ。即ち給付金は無盡契約上當然支拂ふべきものであり、それが果して當然支拂はれてゐるか如何か、給付確定高と當期給付高との割合を調べ、給付する義務を完全に履行されて居ない場合は、資金不足のためであるか、不動産擔保主義を採つてゐるがために調査に時間を要するものか等の原因を探究する必要があるであらう。そして給付確定高と未拂無盡給付金との割合は左表に依つて知ることが出来る。

甲	給付確定高		未拂無盡給付金		割合
	上期末	下期末	未拂無盡給付金	割合	
甲	三六〇、四〇〇	四〇〇、四〇〇	二五、四一〇	〇七〇	

乙 一、〇〇一、七〇〇圓
丙 一五八、〇〇〇圓

一五〇、五六〇圓
四三、八〇五圓

〇一四
・二七七

之れによれば丙會社が最も成績不良である。而して此丙會社の二期間の比較を見るに、上期貳割四分八厘の比率であつたものが、下期に至つて更に貳割七分七厘の比率に昂騰してゐることは益々悪化するものと見なければならぬ。

更に會社が履行の義務ある給付金に對し、給付する資源が充分であるか否やを調べる必要がある。その資源となるものには銀行預金、未收無盡掛金、貸付金、有價證券、代理店貸、振替貯金、現金等であるが、未收無盡掛金や貸付金、代理店貸等は其一部分が直ちに資金化することが出来るにしても、其全部を計上する譯に行かぬ。直ちに支拂資金に充當し得るものは、預金、有價證券、現金である。又未收無盡掛金、貸付金等は直ちに資金化することが出来ないまでも、其七掛程度は、支拂資金として見ることを必要とするであらう。

又契約高と無盡給付資金との割合を調べ、其割合が漸次増加するのは良成績であり、其反對に減少するものは良くないものと見なければならぬ。

其他營業用土地建物及所有不動産、有價證券等の評價格が適當なりや否やをも檢して見る必要があること勿論であるけれども、之等は一般銀行會社の見方と何等異るところはないから、茲には省略する。

契約給付金限度貸付及其他の貸付は、契約給付金即ち壹千圓會なれば壹千圓まで貸付くるものであり、此貸付總額は拂込済資本金額及諸準備金の總額を越ゆることが出来ない。従つて之は貸借對照表を見れば直ちに判明する。唯之に對して注意を要する點は、無盡會社が未收無盡掛金の増加するを恐れて、其掛金の一部を此貸付金に振替へ整理するものゝある事實である。之を知らんとすれば利益の部にある貸付利子を貸付金額で除して其割合を調べ、それが果して正當なる利率となつてゐるか、どうかを見れば判明する。

無盡會社にして借入金あるものは、會社の立替拂が多く、資金不足の證據であり創業當時は止むを得ない點があるとするも、何時までも借入金を残すことは、營業成績の不良を語るものと言はなければならぬ。故に借入金があり、支拂利息のあるものは注意を要する。

假受金は掛金の前納があり、調査費、公正費等があり、又申込證據金を此科目に處理するものがあり、其額は一定して居ない筈である。中には借入金を表面に現はすことを避くるため、此科目を利用することがあり、著しく金額に増減のある場合はよく調べて見なければならぬ。

〔第二〕損益關係

損益の關係は資産負債の状態と同様重要なものであるに拘はらず、稍閑却せられたる氣味ありしも、財界不況となり、且つ原價計算の高調せらるゝに及び、此點に關しても注意をなすに至つた。即ち現在の資産状態が堅實であつても、収益が之に伴はなければ、決して發展するものでなく、収益が上らないために資産の喰込みをなすときは、會社内容を悪化せしむるものであるから、充分取調べなければならぬ。無盡會社の利益の主たるものは、無盡利益であり、此無盡利益は、給付資金より振替へらるゝものである。而して此繰入方に付ては各會社毎に夫々事業方法書に規定せられてあり、必ずしも同一ではない。然しながら無盡給付資金中から振替へらるゝものであるから、無盡給付資金との關係を見れば、其正否は大體に於

て、判明するものである。無盡利益は、損益計算書の無盡利益より、未拂入札差金支出額の二割を控除したる額を掲げ、無盡給付資金は、無盡利益と期末無盡給付資金を加へたるものを掲ぐる。之は大概期末に於て満會分の給付資金の残分と、残高より右残分を差引きたる残額の十分の七前後を、無盡利益に繰入するを例としてある。今一例を擧げて見れば左の通りである。

期 間	無盡給付資金	無盡利益	割 合
昭和四年上期	二五一、六〇二圓	二三、五八八圓	〇・九三
同 下期	四三八、一六八圓	一九、九〇九圓	〇・四五

此數字で見れば、此會社は利益に繰入れてある額は頗る少ない。此利益繰入れの少ない程好成績であり、従つて支拂準備金が豊富となるものであると同時に、少ない繰入利益で間に合ふことは會社の堅實を示すものと言ひ得る。試みに他の二、三社の繰入割合を擧げて見やう。

	無盡給付資金	無盡利益	割 合
甲	一一二、五九五圓	二〇、六三九圓	・一八四
乙	八六二、六五九圓	一四五、六二三圓	・一六九

丙 六二六、五四七圓

七五、一二三四

・一一一

一三〇

右によつて見れば、丙社が最も堅實なる繰入方法を採用してあるものであり、會社内容に於ても優れてゐる。甲社の繰入には幾分の無理があるものと見なければならぬ。

無盡利益の外に、収入利息、手数料雑収入等がある。手数料収入の多いことは、無盡會社經營上感心することは出來ぬ。収入利息に付ては貸付金、預金等に區別し、利息収入額と元本とを對比し、正當なる利息収入があつたかどうかを調べる。而して全體の利益と契約高との割合を調べて見る。

		無盡契約高		利益金		割合			
甲	上期末	一、七九四、一〇〇圓	二、三、七七九圓	〇・二三	乙	上期末	一一、二三三、七〇〇圓	二、三三、〇一四圓	〇・一九
	下期末	二、一二三、六〇〇圓	二、三、七四二圓	〇・一一		下期末	一一、一一一、一〇〇圓	二、三二、〇〇九圓	〇・一九
乙	上期末	四、二八四、〇四七圓	四、六、〇二九圓	〇・一七	丙	上期末	四、五五五、八八七圓	四、九、七三四圓	〇・一八
	下期末	四、五五五、八八七圓	四、九、七三四圓	〇・一八		下期末	四、五五五、八八七圓	四、九、七三四圓	〇・一八

右に依つて見れば、甲社は利益が漸次低下して成績はよくない。乙社は契約高

利益金共に異動がなく、利益率は同様である點から見て現状維持であり、兩社は契約利益金共に増加したるのみならず、利益率は増加傾向にある等から見て、兩社は發展の氣運にあるものと見なければならぬ。

利益率低下の傾向ある甲會社の如きは、假に配當をして居ても油斷は出來ない。之に反し現在缺損であつても、前者の増加割合が、後者の増加割合より少いか、或は前者の割合が減少して行く場合には、此缺損はやがて利益と變ることが必然である。此前後の増減割合が甚しく凹凸あるは、何等か其所に問題があることが判る。次に損失の部に就て見るに、無盡會社には、無盡會社特有の費用が支出されてゐる。即ち勧誘費、集金費、無盡會場費、又は出席獎勵金、車代等があり、之等一切を營業費と見て之を一括して研究するを便宜とする。そこで無盡契約高に對する營業費の割合を見る。

期別		無盡契約高	營業費	割合
甲	上期	一、七九四、一〇〇圓	一八、三九〇圓	〇・一〇
	下期	二、一二三、六〇〇圓	一八、三七六圓	〇・〇八

乙		丙	
上期	下期	上期	下期
一、二、三三二、七〇〇圓	一、二、一一二、一〇〇圓	四、二八四、〇四七圓	四、五五五、八八七圓
二〇三、〇七七圓	二一三、〇四六圓	四六、〇二九圓	四三、六二四圓
〇一六	〇一七	〇一〇	〇〇九

之れに依つて見れば、丙社が最も経費を要しない。それに營業費が低下することとは眞面目に經營されてあるものであることが知られる。而して此經費の率と前掲利益の率とを比較して其差の多い程、經營が眞剣だと見なければならぬ。

最後に拂込資本金に對する利益の割合を見る。前掲契約高に對する收益率が略同様であるに反し、拂込資本金に對する収益は甚しく不同であり、従つて配當率に相違を生ずるは免れない所である。

試みに前掲三社の、拂込資本金に對する收益率を擧ぐれば左の通りとなる。

甲		乙	
上期	下期	上期	下期
一、二五、〇〇〇圓	一、二五、〇〇〇圓	一一二、五〇〇圓	一一二、五〇〇圓
五、八一五圓	五、五八〇圓	二九、九三七圓	一八、九六三圓
〇四六	〇四四	〇二六	〇一八
〇	〇	〇二〇	〇二〇

丙	
上期	下期
七五、〇〇〇圓	七五、〇〇〇圓
六、五七四圓	六、一一〇圓
〇八七	〇八一
〇八〇	〇八〇

之によれば甲社最も利益が少なく、無配當となつてゐるが、當社は創業日尙淺きため此成績は止むを得ない。成績の最も優良である乙社は下期に於て一割近くの収益減となつてゐるが、之れは所有不動産及び未收無盡掛金の銷却が多額に行はれた關係上止むを得ない。斯く減收となり、前期通りの配當を繼續してゐるが、尙且つ充分の餘裕を残してゐる。兩社は利益の殆んど全部を配當してゐるから一見不眞面目のやうであるけれど利益を表面に出さないで、内容の整備に努めてある氣味がある。配當率の多いことを以て、必ずしも會社の良否を判断する譯に行かぬ。又利益の多いことを以て堅實とも見られない。會社財産の銷却が充分に行はれてゐるか否か、更に無盡利益算出が當を得て居るか等を調べなければならぬこと勿論である。

〔第三〕會社の眞實の資産負債額

現在の貸借對照表は、無盡會社の眞實の資産負債を現はして居ないことは既に

前述せる通りである。それは現在の記帳法に關する當局の説明にある如く、一團一組の無盡を主眼とし、悟も會社は單に無盡の管理をして居るやうな方法となつてゐるがために、無盡に關する全般の眞の資産負債は蔭にかくされて居るのである。故に會社の良否を判別するには、實際の資産負債を見なければならぬ。

無盡會社に於ける無盡關係の眞の資産は給付済口(既に現金を渡したものに對する受入未済の掛金であり。負債は給付未済口(金を未だ渡さないもの)に對する受入済の掛金である。現在の未收無盡掛金の中には、給付未済口の掛金が含まれてゐるが、之は貯蓄銀行の定期積金の期限が來た掛金と同様、若し、此加入者が終つて掛金をしなければ、最後に無盡給付金と相殺せられ、消へて終ふ性質のものである。現行無盡業法に於ては、強制徴收の方法がないから、資産の如く見へて、實は會社に取つて眞の資産とは言はれない。又給付済口の受入未済の掛金は、會の日が來ないからと言つて、既に渡したものの返済金であるから、會社に取つては完全な債權である。但し會日の來ない分は、貸借對照表の上には現はれないに過ぎぬ。故に此空な資産を消し、其代りに實際にある債權を表に上せれば、茲に眞實の資産

が表示されることとなるのである。

又負債に付ても同一意味に於て、無盡給付資金、未拂入札差金、未拂無盡給付金といふが如き勘定を無くして、實際現在に於て會社の預りであり、若し解約すれば返済せねばならない所の給付未済口の掛金のみを負債として、現はさなければならぬものである。

第四款 考課狀の大體觀察

前款に於て述べたる「横の見方」「縦の見方」は會社の内容を知るには徹底的方法であり、最も眞實に近い状態を知り得る可能性があるけれども、數期間に渉る考課狀を手に入れることは容易でない。加ふるに數會社の考課狀を集めることも困難である。又會社が一般に配布する營業報告書は、簡單なる貸借對照表のみを記載し、各科目別に詳細なる勘定を記載して居ないものが多く、正式の營業報告を手に入れることは容易でない。單に貸借對照表のみを記載したるものでは、前款記述した方法に據つて、探究することは不可能である。従つて茲では何人でも容易に手に入れることの出来る、簡單な營業報告書によつて其大體を觀察する方法を記

述するものである。

試みに前款に掲示した甲、乙、丙三社の昭和四年下半期の考課状を擧げて之が批評をして見やう。

甲會社第四期末貸借對照表

資産之部		負債之部	
拂込未済資本金	三七五、〇〇〇、〇〇	資本金	五〇〇、〇〇〇、〇〇
契約金限度貸付金	九三、三二八、〇〇	法定準備金	一、一〇〇、〇〇
不動産擔保貸付金	一一六、七五七、〇〇	別途積立金	五、〇〇〇、〇〇
證券擔保貸付金	二、〇〇〇、〇〇	無盡給付資金	七九、五五二、一九
未收無盡掛金	一一四、七六六、八〇	未拂無盡給付金	一五一、二〇〇、〇〇
銀行預金	五九、二八九、三六	未拂解約返戻金	四、四七四、〇〇
振替貯金	一五五、四九	未拂無盡入札差金	八、〇七〇、八五
借地借家敷金	五〇〇、〇〇	假受金	三、五一六、九三
假拂金	五〇七、一八	社員保證積立金	七九〇、一一
營業用什器	二、一〇七、〇〇	無盡前納掛金	七、二四六、八〇
現金有高	二、一二〇、六五	繰越金	二一五、三四
		當期純益金	五、三六五、二六
合 計	七六六、五三一、四八	合 計	七六六、五三一、四八

合 計 七六六、五三一、四八
 期末現在契約高貳百拾貳萬貳千六百圓

之に依つて見れば、漸く四期間を經過したばかりの、創業後尙日淺き會社としては、契約高は頗る良成績を擧げてある。當社の契約限度貸付極度は拂込資本金拾貳萬五千圓、諸積立金六千壹百圓、合計拾參萬千百圓であるに反し既に九萬參千餘圓の貸付が行はれてある。未收無盡掛金拾壹萬四千餘圓に達してあることは契約高に對し五分四厘の比率に當り、決して良好の方ではない。寧ろ全國比率四分五厘に比すれば良くない方である。恐らく契約増加に急なりしたため、契約者の質を撰擇することを怠つたものと見なければならぬ。營業用土地、建物や其他の不動産を所有して居ないことは此考課状に計上せられて居ないで借家敷金が計上せられてある點から見て明らかである。

次に負債の方を見るに、無盡給付資金七萬九千餘圓は契約高の比率、三分七厘に過ぎないことは決して充分ではない。それに未拂無盡給付金が既に拾五萬壹千餘圓に達してあることは、甚しく不堅實を思はしむるものがある。殊に當社の支

額の銷却を行つてあることも、其堅實性を語るものである。

負債の方を見るに、無盡給付資金を百九拾餘萬圓を計上し、契約高の比率は實に一割五分七厘に當り、全國平均に比し頗る高額の計上だと言はなければならぬ。而して未拂無盡給付金は僅かに壹萬九千八百圓に過ぎない。之れならば銀行預金のみでも四拾萬圓近くを有する當社としては支拂上に何等の痛痒を感じない。此程度は當社の如く多額の契約を有する會社としては、如何に給付を敏速に行つても止むを得ないものと見られる。未拂入札差金が稍多額に失する氣味があるけれども、之亦當社の契約高に比して多きに過ぐることはない。

斯く大體の觀察としては、當社は成績優良だとの結論に到達することゝなる。而して之を前款記述せる方法により、調べたるところに據つても、矢張り優良である。

丙會社第九期末貸借對照表

未拂込資本金	二二五、〇〇〇、〇〇	資	本	金	三〇〇、〇〇〇、〇〇
資産之部		負債之部			

貸付金	三五三、一九七、五二	法定積立金	五、一〇〇、〇〇
未收無盡掛金	六四、〇二九、一〇	別途積立金	六、〇〇〇、〇〇
銀行預金	一六一、五九四、九二	職員退職手當基金	二、〇〇〇、〇〇
振替貯金	七六四、七九	無盡給付金	四一二、六八七、〇〇
假出金	二、一四七、四〇	未拂無盡給付金	七六、一〇〇、〇〇
營業用什器	五、九一二、九〇	未拂解約返戻金	二六、二一〇、三九
有價證券	一、八八九、八三	未拂入札差金	二、八六〇、五〇
敷金	二、〇〇〇、〇〇	假受金	一、七二二、五四
現金有高	三〇、〇二七、三〇	信認金	四、五一一、八八
		前期繰越金	三、二六一、三五
		當期利益金	六、一一〇、一〇
合 計	八四六、五六三、七六	合 計	八四六、五六三、七六

期末契約高四百五拾五萬七千五百圓

當社はまだ第九期の決算を了したるばかりの新會社であるが、頗る堅實なる經營をしてあるものと、既に充分の信用を得てある。創業後、四年半を經過せるに過ぎない當社としては、其契約高に於ても既に四百五拾萬圓に達し、異常な發展だと言はなければならぬ。未收無盡掛金は、六萬四千餘圓にして契約高の比率は、僅々

一分四厘に過ぎない。此點に於て優良なる前乙社に比し、更に一層小額であることは、當社の最も強味とするところである。而して當社は、契約限度貸付金を分離しないで、總貸付金一口に計上してある。當社は限度貸付金は擴張の方針なるも業法に制限あるため、資金を有利に運用することが出来ないことを遺憾とする意見をも有するものゝ如くである。

次に負債の部に於て無盡給付資金四拾壹萬餘圓、此契約高との比率は九分七厘に當つて、全國平均に對しては遙かに多額を計上してあるけれども、前乙社の一割五分餘に比すれば遙かに劣つてある點がある。然し創業後、未だ日の浅い當社としては、寧ろ優良な成績であり、堅實な經營をしてあるものと言ふことが出来る。又未拂無盡給付金を七萬六千圓計上せる點から見れば、給付が嚴格であるかに窺はれる。唯當社の資産状態を見れば、銀行預金に於て既に拾六萬餘圓を有し、支拂資金には、毫も不自由はないのであるから、故意に給付を遅延さしてあるものでないことは明らかである。未拂入札差金は當社の契約高に比し、貳千八百餘圓の現在高は決して多いことはないけれども、未拂解約返戻金は稍多きに過ぐる嫌がある。

第三節 其他の見方

數期間に涉る考課狀により會社の資産並に營業状態を探究し、更に進んで、實地に當つて、調査するならば、眞に徹底を期し得るけれども、實地調査は官權を有せざる限り、容易に行はれるものでない。即ち現金在高、所有有價證券、證書の照合、各主要帳簿の残高と元帳の照合、未收無盡掛金及貸付金の状態及び假拂、所有財産の内容等を調べ、更に損益方面に於ては、勸誘費、會席費、利益處分其他の支出が正當なりや否やを検査する必要があり、それが完了せらるゝことに依つて、初めて眞の内容を知り得るものであること勿論である。然し此事は普通人の容易に實行されないものであるから、茲に詳述することを避ける。それにしても經營者の人格、性行、資産信用の如何を調査することは、小額なる資本金を以て信用業務を取扱ふ無盡業者に於て、一層其必要を痛感するものである。況んや明治末年より大正初頭にかけて行はれたる不良無盡は、殆んど其罪經營者側にあつた事實に鑑み、特に此感を

深うする者である。

無盡業が公共的性質を多分に含んである事情から見ても、其經營者は手腕の人よりも誠實の人であり、資産信用ある人であることが、特に必要であると言はなければならぬ。

無盡會社の見方に就ては大體以上述べたる通りであるが、今之を要約すれば左の如きものとなる。

科 目	良好なりと見られる方	不良なりと見られる方
契 約 高	漸増するもの	漸減するもの
未収入無盡掛金	少額なるを要す	多額(契約高に對し四分五厘以上)
同	漸減するもの	漸減するもの
給 付 資 金	漸増するもの(契約高に比し四分以上)	漸減するもの
未拂無盡給付金	少額にして漸減するもの	多額にして漸増するもの
假 拂 金	少額(他の科目の類に比して)	多額なるもの
代 理 店 貸	少額なるもの	多額なるもの

借 入 金	無いもの	有るもの
預 金 及 現 金	多額にして漸増するもの	少額にして漸減するもの
利 益	漸増するもの	漸減するもの
損 失	漸減するもの	漸増するもの
銷 却	未收掛金其他の銷却多きもの	無きもの
當籤落札の權利買溜	なきもの	有るもの
眞 の 資 産	眞の負債より多額	眞の負債より少額

大體を調ぶるに當つても右の標準に據つて調べ間違ひないものと信ずる。

第四章 無盡業の損益

第一節 概論

無盡業が特種の營業であり、其損益が他の事業に比し、異なる所あるは勿論である。無盡業による利益の主なるものは、云ふまでもなく、無盡取扱による利益、即ち無盡益金である。其他の利益に至つては、無盡取扱に伴ふ諸種の手数料、及び所有資産の運用益であつて、無盡益金に比しては言ふに足らぬ。而して其損失金の重なるものは一般銀行會社と同様に、諸給與金であるが、更に無盡業獨特の募集費、會席費等が、何れも諸給與金と、略同額に支出されてゐる。其他各種の科目によつて費用を支出されてゐるが、本章に於ては、主として無盡益金の算出方法を記述し、無盡其ものによる業者の利益が何程であるか、又如何なる状態にあるかを探究し、其他の損益は、其概略を述ぶるに止め、それが改善に就ては、後章に譲ることとする。

無盡會社に於ても、創立後久しきに涉つて、堅實なる經營をなし、自個資金を充分

に蓄積せるものは、其収益に據つて、優に経費を償ひ得るため、益々有利となることは、何れの事業を經營する場合と異るところはない。恰も今日の優良保險會社が自個資金の運用により、優に経費を支辨し、尙且つ剩餘を存し、保險其ものの利益に手を染むることなく、社費一切を支辨せるものあると同様である。然し無盡其ものは、我國に古くより行はれて居たけれども、今日の營業無盡は現行無盡業法實施以後に整備されたもので、其點から見れば銀行、保險等に比し頗る新らしい、言はゞ過渡時代にあるもので、自個資金の運用益に據つて、社費一切を支辨し得るものは、數社を算するに過ぎない状態にある。

第二節 無盡利益金

第一款 無盡掛金

無盡會社に於ける利益金の主なるものは無盡利益金であり、その根本をなすものは、言ふまでもなく、無盡掛金である。會社は契約者から一定の掛金を徴し、其總額の中から、給付を受くる者に對し、一定の給付金を交付せるその殘額が、會社の所

得となるものである。

無盡掛金は、種々なる方法に據つて行はれ、各社共、各々異つた掛金制度を執つてあるけれども、大體に於て、東京式、大阪式に區分せられ、更に東京式、大阪式を折衷せるものがあり、之を中京式とも稱せられてゐる。然し實際、現に行はれてゐるものが、全部此式に、確然と區別されるものでなく、漸次東京、大阪式を混用せらるるものが多い傾向にある。

第一、東京式無盡

東京式無盡の掛金は、終回到契約金の給付を受くる加入者の掛金が、契約給付金額以上に達するものである。

此式による掛金表は頗る簡單である。即ち其掛金は給付前と、給付後とを問はず、同一率によるもので、左に一、二の例を擧げて見る。

(イ)帝國無盡株式會社掛金表(東京市神田區所在)

回数

會日

期間

掛金額

七十回

二十日

三年十ヶ月

壹千圓に付毎回金拾五圓宛給付済後は貳圓増し

(口)相生無盡株式會社掛金表(東京市淺草區所在)

回数	會日	期間	掛金額
百二十回	二十日日	八十ヶ月	五千圓に付毎回金四拾五圓宛

右によれば(イ)は給付前と給付後との間に掛金を異にするも、(ロ)に至つては、給付の前後を問はず、同額である。斯くては貯蓄を目的とする契約者に、甚しく不利益なるが如きも、給付前の掛金者に對しては、入札差金の配當があつて、相當の利廻りとなるものである。

而して東京式掛金の長所ともいふべき點は、(一)掛金が均一なるを以て、事務處理上の能率を増し其當然の結果として、事務費を節約することが出来る。前掲相生無盡會社の掛金方法は、純東京式とも云ふべく、給付の前後を問はず、掛金均一なるため會計整理、掛金回収等事務取扱が頗る簡便である。(二)抽籤に當れば頗る有利にして、多額の利益を擧ぐることが出来るため射倖的興味を起し、無盡本來の性能を發揮するものである。従つて募集上に便利とする點がある。(三)東京式に於ては、一回でも早く給付を受け、之を利用することが、採算上有利であるため、給付拒絶

の憂ひが無く、給付金の受渡しも、極めて圓滑に行はれるものである。此給付を拒絶せらるることは、會社の最も苦痛とする所で、之が圓滑に行はるゝことは、經營上直接、間接に多大の利益であると言はなければならぬ。又假に給付を拒絶せらるることあるも、東京式に於ては、豫定の無盡利益を收得する上に、何等の支障を生じない。

次に東京式の短所とも云ふべき點は、(一)東京式に於ては、其掛金表が、簡單明瞭であるがために、一見して何人も、直ちに業者の受くる豫定利益率を知ることが出来る。前掲の相生無盡會社の掛金表の例に見ても、百二十人の契約者から、四拾五圓宛徴收すれば、合計五千四百圓となり、此中から五千圓を給付するものであるから、會社の利益は、此無盡により、一回毎に利益金四百圓を受くるものであることが、直ちに判明する。斯く會社の利益を知らるることは、事業經營上苦痛とするところで、自然高率の利益を獲得する譯に行かなくなる。然しそれがために、會社は營業政策上、利益率を低下せしむることとなつて、勢ひ契約者に對しては、有利となることは争はれない。東京式を採るものは、概して、大阪式掛金のものより、低廉である

ことも事實である。之を短所と稱するは、經營者側から見たもので、契約者とすれば、此東京式を利益とするは勿論である。(二)東京式は抽籤會が多いに反し、大阪式は入札會が多い。入札制を採用するものは、缺口補充が、比較的容易であるが、抽籤會に於ては、當籤權の價值が早い程、高價であるにも拘はらず、既に其權利を獲得する機會を失つた、缺口に對する、補充が困難である。(三)大阪式が掛金遞減するに反し、東京式は均一なる關係上、新口を加入せしむるに困難なる嫌がある。

第二、大阪式無盡

大阪式無盡の掛金は、終回に契約金の給付を受くる契約者の掛金が、契約給付金額に達せざるものである。

此式による掛金表は、東京式に比し頗る複雑せることは、左表を見れば分る通りである。茲に一、二の實例を擧げて見る。

(イ)關西商工無盡株式會社掛金表(大阪市東區内本町所在)

金壹千圓會(イ組) 五年滿期、毎月一回掛金		給付済後の掛金	
自一回	自一回	自一回	自一回
自四回	自二回	自三回	自三回
二五圓	二〇圓	一五圓	一〇圓
		五圓	

第一、二回に給付決定者は三回迄二十五圓宛、第四回目より二十一圓、第三回以後給付決定者は終回迄二十一圓宛

そして、第一回より第三回迄は、抽籤によつて給付を決定し、其以後は全部入札とするものである。

(ロ)商工無盡株式會社掛金表(京都市河原町所在)

金壹千圓會、五十ヶ月、毎月一回掛金			
自一回	自一回	自二回	自三回
至一〇回	至二〇回	至三〇回	至四〇回
二八圓	二五圓	一八圓	一〇圓
		五圓	

給付を受けたる者は其次回より終回迄毎回金二十四圓宛

以上(イ)(ロ)共容易に會社の受くる利益を算出することが出来ない。そして(イ)の掛金表によれば、給付を受けたる者は、次回より掛金が變更せられ、未給付者に比し高率となるけれども、(ロ)によつて見れば、給付未済者は、第一回より第十回迄、毎月貳拾八圓の掛金をするに反し、第一回に給付決定せる者は、次回より貳拾四圓宛を終回まで返掛をなすもので、拾回迄の掛金は、未給付者より少額である。

之に據つて見れば(イ)に於て、給付金を最後に受くるものは、合計八百六拾圓の掛金をなし、壹千圓の給付を受くることとなり、(ロ)も亦合計八百六拾圓の掛金にて、壹千圓の給付を受け、何れも百四拾圓が利息に當つてゐる。

此大阪式掛金の長所とも言ふべき點は(一)掛金を遞減せしむることにより、預金目的の會員を、満期前新に加入せしむる可能性が多い。(二)此式によれば容易に利益率を算出することが出来ない。従つて會社に取つては、契約者から無盡益金を窺はるるおそれがない。それが無盡豫定利益率を比較的多くすることとなる。之は業者にとつて、有利である反面には、契約者は東京式に比し、高い掛金をしなければならぬ不利がある。(三)給付資金が、潤澤となるのみならず、資金の剰餘を運用する利益がある。(四)大阪式によれば、初期の間に、高額掛金を拂込ましめ、漸次減少するもので、最後の掛金は、極く小額である。従つて早期の中に、多くの掛金を徴してあるから、給付濟口の危険率を減少せしめ、未給付口の中止率を、低下することが出来る。

次に大阪式の、短所とも見るべきものは(一)給付を拒絶せられたるときは、無盡豫定利益を減少することとなる。即ち東京式では、缺口を生ぜざる限り、給付の有無に拘はらず、豫定利益を減少するものではない。然し大阪式に於ては、無盡利益を擧ぐるには、圓滑なる給付が行はるることを、必要とするもので、給付を拒絶せられ、

或は不能に陥るときは、會社自ら此資金を運用しなければならぬ。現行無盡業法に於ては、此資金運用に關し、窮屈なる規定あるため、到底豫期の利益を擧ぐる事が出来ないで、結局無盡益金を減少しなければならぬ。(二)東京式掛金が單一制なるため、事務處理能力を増進することを得て、事務費の節約となるに反し、大阪式は掛金が複雑せるため、會計整理其他の事務處理上、多大なる手数を要し、經費を増加するに至るは免れない所である。(三)大阪式は入札制を採る結果、抽籤式によるが如き射倖的興味を失はしむる嫌がある。此射倖的興味は無盡の妙味を増すもので、之なきものは、募集上に不利であることは免れない。

東京式は射倖的性質を多分に有するも、大阪式は、初めから、採算本位の掛金方法を採用してあるものと見なければならぬ。

最後の折衷式掛金方法を見る。

第三、東京、大阪折衷式

謂ふ所の中京式にして、東京式、大阪式を折衷せるものであるが、漸次此折衷式が廣く一般的に行はれるやうになつてある。會社により、獨自の折衷方法が行はれ

てあるもので、之亦區々なる掛金方法となつてある。此折衷式と見らるる一、二の例を擧げて見る。

(イ)三重無盡株式會社掛金表

金壹千圓會、五ヶ年満期、毎月一回掛金

給付未済口掛金

自一回	自一回	自一回	自一回	自一回	自一回
至一回	至一回	至一回	至一回	至一回	至一回
一五圓	一四圓	一三圓	一二圓五〇	一〇圓	八圓五〇

給付済口掛金

自二回	自三回	自四回	自五回	自六回	自七回
至二回	至三回	至四回	至五回	至六回	至七回
一三圓	一四圓				

(ロ)中越無盡株式會社掛金表(富山市總曲輪所在)

金壹千圓會、五ヶ月満期、毎月一回掛金

自一回	自一回	自一回	自一回	自一回	自一回	給付済後の掛金
至一回	至一回	至一回	至一回	至一回	至一回	
二四圓	二二圓	二〇圓	一八圓	一六圓	二二圓宛	

(イ)三重無盡株式會社に於ては、給付未済口總掛金九百五拾五圓であるが、(ロ)中越無盡株式會社は給付契約高と同額の掛金をなすものである。前掲二社は、何れも給付済後の掛金を變更せるも、前社は二種に別ち、後者は單一としてあるところに幾分の相違がある。

此折衷式は東京、大阪式の長所を採つて、契約者の理解を早やからしめ、一面には事務處理上、其他に便せんとするものであつて、漸次此式になる氣味があるものと思はれる。

第二款 無盡益金

無盡益金は、無盡取扱による利益であり、無盡業収益の根原をなすものであることは、前款述べた通りである。而して此無盡益金算出方法は、東京式の如く、掛金の單一制度を採つてあるものは、何人が見ても、直ちに業者の利得額を知悉することが出来るけれども、大阪式に至つては、容易に之を知ること不可能である。即ち東京式に於ては、給付の前後に拘はらず、同額の掛金をなすを普通とし、掛金總額が、契約給付金額を超過するもので、その超過額が、會社の利得となるものである。例へば前款例示せる相生無盡に於ける、五千圓會の一口掛金が、毎回四拾五圓であり、一組が百二十口であるから、其總掛金五千四百圓に達し、其中から給付契約高五千圓を給付した殘額四百圓が會社の利益である。故に會社が利得するところは、此一組の無盡により一回四百圓、百二十回には四萬八千圓となり、之を八十ヶ月の間に

利得するものであるから、一期間には參千六百圓の無盡益金を計上することが出来る譯である。然し之れは、初回から、終回まで、何等の事故なしに無盡會が順調に行つた場合の事で、實際は缺口が出来たり、未收掛金が生ずる等のため、之れに對し會社が責任を負ふて、契約者には、無盡が完全に進行するものとして、給付をするものであるから、前記の豫定利益金は、容易に得られない實狀にある。之を要するに東京式掛金は、利益算出方法が、頗る容易であることは事實である。唯實際に當つては、種々なる事情のため、此豫定利益を獲得することが困難な場合が多いことも否定せられない事實である。

東京式に反し、大阪式は、掛金が複雑せるため、掛金表を見たのみでは、業者の利益を知ることが不可能である。之にはどうしても、無盡收支計算表を作成しなければ、眞實の無盡益金を知ることが出来ないから、大阪式掛金の代表的とも言ふべき二、三の會社掛金表によつて、無盡收支計算表を作成して、之が説明を試みることにする。

先づ無盡業界に於て長期無盡と云はれる五年満期のものを掲出する。之は前

款に例示せる、關西商工無盡會社の、壹千圓會の掛金表によつて、作成せるものである。(別表甲號表参照)

無盡收支計算表

(甲號表)

關西商工無盡株式會社

回数	抽籤 入札	給付未済口掛金		給付済口掛金		合計	給付金	差引過 不足金	差引累計 剩餘金	流 日 數	枚 數
		一口	小計	一口	小計						
1	抽	60	1,500	1	25	1,500	1,000	500	500	30	15,000
2	抽	59	1,475	25	25	1,500	1,000	500	1,000	30	30,000
3	抽	58	1,450	25	25	1,500	1,000	500	1,500	30	45,000
4	入	57	1,140	20	21	1,203	1,000	203	1,703	30	51,900
5	入	56	1,120	20	21	1,204	1,000	204	1,907	30	57,210
6	入	55	1,100	20	21	1,205	1,000	205	2,112	30	63,360
7	入	54	1,030	20	21	1,206	1,000	206	2,318	30	69,540
8	入	53	1,080	20	21	1,207	1,000	207	2,525	30	75,750
9	入	52	1,040	20	21	1,208	1,000	208	2,733	30	81,990
10	入	51	1,020	20	21	1,209	1,000	209	2,942	30	88,290
11	入	50	1,000	20	21	1,210	1,000	210	3,152	30	94,560
12	入	49	980	20	21	1,211	1,000	211	3,363	30	100,890

13	入	48	20	960	12	21	252	1,212	1,000	212	3,575	30	107,239
14	入	47	20	940	13	21	273	1,213	1,000	213	3,758	30	113,640
15	入	46	20	920	14	21	294	1,214	1,000	214	4,002	30	120,060
16	入	45	20	900	15	21	315	1,215	1,000	215	4,217	30	126,510
17	入	44	20	880	16	21	336	1,216	1,000	216	4,433	30	132,991
18	入	43	20	860	17	21	357	1,217	1,000	217	4,650	30	139,500
19	入	42	20	840	18	21	378	1,218	1,000	218	4,868	30	146,040
20	入	41	20	820	19	21	399	1,219	1,000	219	5,087	30	152,610
21	入	40	20	800	20	21	420	1,220	1,000	220	5,307	30	159,210
22	入	39	20	780	21	21	441	1,221	1,000	221	5,528	30	165,840
23	入	38	15	570	22	21	462	1,032	1,000	32	5,560	30	166,800
24	入	37	15	555	23	21	483	1,038	1,000	38	5,598	30	167,940
25	入	36	15	540	24	21	504	1,044	1,000	44	5,642	30	169,280
26	入	35	15	525	25	21	525	1,050	1,000	50	56,92	30	170,760
27	入	34	15	510	26	21	546	1,056	1,000	56	5,748	30	172,440
28	入	33	15	495	27	21	567	1,062	1,000	62	5,810	30	174,200
29	入	32	15	480	28	21	588	1,068	1,000	68	5,878	30	176,310
30	入	31	15	465	29	21	609	1,074	1,000	74	5,952	30	178,560
31	入	30	15	450	30	21	630	1,080	1,000	80	6,032	30	180,960
32	入	29	15	435	31	21	651	1,086	1,000	86	6,118	30	183,540
33	入	28	15	420	32	21	672	1,092	1,000	92	6,210	30	186,300

34	入	27	10	270	33	21	693	963	1,000	△37	6,173	30	185,190
35	入	26	10	260	34	21	714	974	1,000	△26	6,147	30	184,410
36	入	25	10	250	35	21	735	985	1,000	△15	6,132	30	183,960
37	入	24	10	240	36	21	756	996	1,000	△4	6,128	30	183,840
38	入	23	10	230	37	21	777	1,007	1,000	7	6,135	30	184,050
39	入	22	10	220	38	21	798	1,018	1,000	18	6,153	30	184,590
40	入	21	10	210	39	21	819	1,029	1,000	29	6,182	30	185,460
41	入	20	10	200	40	21	840	1,040	1,000	40	6,222	30	186,660
42	入	19	10	190	41	21	861	1,051	1,000	51	6,273	30	187,190
43	入	18	10	180	42	21	882	1,062	1,000	62	6,335	30	190,050
44	入	17	10	170	43	21	903	1,073	1,000	73	6,408	30	192,240
45	入	16	10	160	44	21	924	1,084	1,000	84	6,492	30	194,760
46	入	15	10	150	45	21	945	1,095	1,000	95	6,587	30	197,610
47	入	14	10	140	46	21	966	1,106	1,000	106	6,693	30	200,790
48	入	13	10	130	47	21	987	1,117	1,000	107	6,810	30	204,300
49	入	12	10	120	48	21	1,008	1,128	1,000	128	6,938	30	208,140
50	入	11	10	110	49	21	1,029	1,139	1,000	139	7,077	30	212,310
51	入	10	10	100	50	21	1,050	1,150	1,000	150	7,227	30	216,810
52	入	9	10	90	51	21	1,071	1,161	1,000	161	7,388	30	221,640
53	入	8	10	80	52	21	1,092	1,172	1,000	172	7,560	30	226,800
54	入	7	10	70	53	21	1,113	1,183	1,000	183	7,743	30	232,290

55	入	0	5	30	54	21	1,134	1,164	1,000	164	7,907	30	237,210
56	入	5	5	25	55	21	1,155	1,180	1,000	180	8,087	30	242,010
57	入	4	5	20	56	21	1,176	1,196	1,000	196	8,283	30	248,490
58	入	3	5	15	57	21	1,197	1,212	1,000	212	8,495	30	254,850
59	入	2	5	10	58	21	1,218	1,228	1,000	228	8,723	30	261,690
60	入	1	5	5	59	21	1,239	1,244	1,000	244	8,967	30	269,010
合計				31,78			37,182	68,967	60,000				

△ 四 算 出

此甲號表を見れば、此會の初期に於ては、多額の剰餘金あるも、中期に至り漸次減少し、三十四回より、三十七回迄は、掛金額よりも、給付金の方が多額となつて、會社が其不足額を支辨しなくてはならぬ。終期に至るに従つて、剰餘金が増額し、結局に於て、此一組が、最後まで、何等の事故なく、終つたものとすれば、八千九百六十七圓の剰餘金が生ずる、此剰餘金の一回平均が、百四十九圓四十五錢であり、之れ丈は會社の利益と見なければならぬ。故に此收支計算表を無視して、第一回到剰餘金が五百圓あつたものの全部を利益金に繰入るときは、掛金に不足を生じたる場合に、前に利益へ繰入れたものを、吐き出さなければならぬ。即ち無盡收支計算表は

無盡利益の豫定ともなり、且つ無盡益金繰入れの基礎となるものである。前表の場合に於て、一回平均利益金百四拾九圓四拾五錢の全部を、利益金に繰入れをなすならば、初回に於ては、尙且つ剰餘を生ずるも、途中にて缺口を生ずるか、或は回收不能の掛金を生ずるときは、直ちに行詰りとなつて了ふ。故に此平均利益金の中から、三割を無盡給付金として積立となり、残額七割を利益金に繰入るものである。最後の積數欄には、剰餘金の利用日數に應じて、其積數を算出せるものであるが、之は便宜掲出せるに過ぎない。實際は、利益金に繰入れ、若くは無盡給付資金となつて残るものであつて、此資金全部を、直ちに眞に會社の利用し得る資金とは見られないこと勿論である。

一組の無盡會が、何等の事故なしに満了したときは、曩に積立となつてある無盡給付資金は、其會に該當するものだけは、之を無盡利益金に組入るものである。

右の外に、無盡益金に計上するものに、入札差金の若干を會社が收得する。此入札差金に就ては、次章に於て詳述するところあるべく、茲には單に會社の利益となるものの説明に止むる。

入札差金中から、會社に收得する利益の割合は、主務省の例示せる、事業方法書、並に無盡契約約款第三項の二に規定せられたる範圍内に於て定めなければならぬ。之によれば、各種無盡の入札の場合に於ける、契約給付金額と、入札手取金額との差額、即ち入札差金の二割は之を當業者の所得とし、給付金、給付の後、利益に組入るるものとする事となつてゐる。故に二割以上を收得することは出来ない。普通には此極度額を、會社の收得とするものである。

東京式の如く、抽籤會を多く用ふるものに於ては、入札差金の收得が少ないけれども、大阪式は入札制を多く用ふるため、當然入札差金の收得が多い譯である。一組の會に於て、果して何程の入札差金があるかは、其一組の加入者の、資金需給の状態によつて自ら異なるものがあり、豫定することは困難であるが、大體としては、前掲甲表の無盡に於て第十回までは入札限度額まで入札するものが多い由であるから、之れから判断すれば、一回六拾圓の利益として、第十回までは入札が七回行はれ、四百貳拾圓の収益を得ることが出来る勘定である。第十回以後は漸次入札差金の減少することとなり、自然此方面の収益減となるものである。但し右に述べた

ることは、無盡會が何等事故なく、順調に進んで、資金需給の状態が、普通の場合に於ける収益であつて、實際に當つては、斯く豫想通りには行かないものであることは、前述せる通りである。

前掲甲號表は、五年満期の長期無盡收支計算表であるが、次には等しく長期無盡ではあるが、前表より稍短期である四年二月満期の、前款第二大阪式無盡(口)に例示せる商工無盡株式會社の掛金表によつて、收支計算表を作成して見る。即ち乙號表の通りである。

無盡收支計算表

(乙號表)

商工無盡株式會社分

回数	抽籤 入札	給付未済口掛金		給付済口掛金		合計	給付金	差引過 不足金	差引累計 剰餘金	流用 口數	積 數
		口數	一口	口數	一口						
1	抽	50	28	1,400		1,400	1,000	400	400	30	12,000
2	入	49	28	1,372	1	1,396	1,000	396	796	30	23,880
3	入	48	28	1,344	2	1,392	1,000	392	1,188	30	35,640
4	抽	47	28	1,316	3	1,388	1,000	388	1,576	30	47,280

5	入	46	28	1,288	4	24	96	1,384	1,000	384	1,060	30	58,800
6	入	45	28	1,260	5	24	120	1,380	1,000	380	2,340	30	70,200
7	入	44	28	1,232	6	24	144	1,376	1,000	376	2,716	30	81,480
8	入	43	28	1,204	7	24	168	1,372	1,000	372	3,088	30	92,640
9	入	42	28	1,176	8	24	192	1,368	1,000	368	3,456	30	103,680
10	入	41	28	1,148	9	24	216	1,364	1,000	364	3,820	30	114,600
11	入	40	25	1,000	10	24	240	1,240	1,000	240	4,080	30	121,800
12	入	39	25	975	11	24	264	1,239	1,000	239	4,299	30	128,670
13	入	38	25	950	12	24	288	1,238	1,000	238	4,537	30	136,110
14	入	37	25	925	13	24	312	1,237	1,000	237	4,774	30	143,220
15	入	36	25	900	14	24	336	1,236	1,000	236	5,010	30	150,300
16	入	35	25	875	15	24	360	1,235	1,000	235	5,245	30	157,350
17	入	34	25	850	16	24	384	1,234	1,000	234	5,479	30	164,370
18	入	33	25	825	17	24	408	1,233	1,000	233	5,712	30	171,360
19	入	32	25	800	18	24	432	1,232	1,000	232	5,944	30	178,320
20	入	31	25	775	19	24	456	1,231	1,000	231	6,175	30	185,250
21	入	30	18	540	20	24	480	1,020	1,000	20	6,195	30	185,850
22	入	29	18	522	21	24	504	1,026	1,000	26	6,221	30	186,630
23	入	28	18	504	22	24	528	1,032	1,000	32	6,253	30	187,590
24	入	27	18	486	23	24	552	1,038	1,000	38	6,291	30	188,720
25	入	26	18	468	24	24	576	1,044	1,000	44	6,335	30	190,050

26	入	25	18	450	25	24	600	1,050	1,000	50	6,385	30	191,550
27	入	24	18	432	26	24	624	1,056	1,000	56	6,441	30	193,230
28	入	23	18	414	27	24	648	1,062	1,000	62	6,503	30	195,090
29	入	22	18	396	28	24	672	1,068	1,000	68	6,571	30	197,130
30	入	21	18	378	29	24	696	1,074	1,000	74	6,645	30	199,350
31	入	20	10	200	30	24	720	920	1,000	80	6,565	30	196,950
32	入	19	10	190	31	24	744	934	1,000	86	6,499	30	194,970
33	入	18	10	180	32	24	768	948	1,000	92	6,447	30	193,450
34	入	17	10	170	33	24	792	962	1,000	98	6,403	30	192,270
35	入	16	10	160	34	24	816	976	1,000	104	6,385	30	191,550
36	入	15	10	150	35	24	840	990	1,000	110	6,375	30	191,250
37	入	14	10	140	36	24	864	1,004	1,000	116	6,379	30	191,370
38	入	13	10	130	37	24	888	1,018	1,000	122	6,396	30	191,880
39	入	12	10	120	38	24	912	1,032	1,000	128	6,429	30	192,870
40	入	11	10	110	39	24	936	1,046	1,000	134	6,475	30	194,250
41	入	10	5	50	40	24	960	1,010	1,000	140	6,485	30	194,550
42	入	9	5	45	41	24	984	1,029	1,000	146	6,514	30	195,420
43	入	8	5	40	42	24	1,008	1,048	1,000	152	6,562	30	196,860
44	入	7	5	35	43	24	1,032	1,067	1,000	158	6,629	30	198,870
45	入	6	5	30	44	24	1,056	1,086	1,000	164	6,715	30	201,450
46	入	5	5	25	45	24	1,080	1,105	1,000	170	6,820	30	204,600

47	入	4	5	20	46	24	1,104	1,124	1,000	124	6,944	30	208,320
48	入	3	5	15	47	24	1,128	1,143	1,000	143	7,087	30	212,610
49	抽	2	5	10	48	24	1,152	1,162	1,000	162	7,249	30	217,470
50	入	1	5	5	49	21	1,176	1,181	1,000	181	7,430	30	222,900
計				28,030			29,400	57,430	40,000				

▷ 四 五 五

此乙號表を見れば、之亦大阪式無盡の特色とする、初期掛込金が多く、中期に至つて掛金よりも、給付金額の方が多しこととなつてゐる。而して此無盡による一回の利益金は、百四拾八圓六拾錢となり、前甲號表の場合と多く異なるところはない。然し當社は、掛金者が期日拂込みをなしたるときは、一人に付金七拾五錢の車代を支拂ふものであるから、一回の掛金者全部が、完全に期日拂込をなすものとするれば、參拾七圓五拾錢の車代を支拂はなければならぬから、結局之れ丈は、一回平均豫定利益から、控除しなければならぬ譯である。

尙甲號表のものは、最初三回迄抽籤をなし、以後全部が入札であるため、入札差金の利益があるに反し、乙號表のものは、三回に一回の抽籤をするため、入札が少ない、

従つて入札差金の利益を多く見込むことは出来ない。

次は短期無盡に付て調べて見る。茲には長崎市にある長崎無盡株式會社の掛金表により、收支計算表を作成する。同社は、大正元年の設立に拘り、拂込資本金は拾五萬圓に過ぎざるも、契約高に於ては、既に貳千萬圓以上に達し、我國に於ける二位を争ふ會社であり、重役には地方の名望家を列し、長崎縣下に於ける有力なる金融機關となつてゐる。殊に同社は、無盡に對する研究機關を備へ、其進歩發展を圖り、無盡業の向上に努めつつあるものとして、全國同業者間に知られてゐる。即ち九州全體と、沖繩縣とを聯合せる九州無盡協會を設け、同社専務取締役酒美保造氏自ら會長となり、「無盡研究録」といふ著書を發行し、或は研究会を開く等、種々なる方法により、斯業の發展に盡せる事實もある。斯くて同社の經營は、最も進歩せるものとして、同業者の模範となつてゐる。

長崎無盡株式會社掛金表 (短期)

金壹千圓會 四十ヶ月満期 掛金毎月一回
給付未済口掛金

第四章 無盡業の損益

無盡業態の研究

一七〇

自一回 三三圓	自二回 三一圓	自三回 二二圓	自四回 一〇圓
自一回 三三圓	自二回 三〇圓	自三回 二三圓	自四回 一八圓
自一回 三三圓	自二回 三〇圓	自三回 二七圓	自四回 一九圓

給付済口掛金

此掛金表により、收支計算表を作成すれば、別表丙號表が出来上る。

此丙號表によつて見れば、四十ヶ月の間に、會社は契約者から合計四萬五千七百拾圓の掛金を徴し、之に對する給付金支拂總額は四萬圓であるから、此表の上から見れば會社は此無盡の一組から、五千七百拾圓を利益することとなり、此一回平均が百四拾貳圓七拾五錢である。

無盡收支計算表

(丙號表)

長崎無盡株式會社分

回数	給付未済口掛金			給付済口掛金			合計	給付金	差引過不足金	差引累計 剩餘金	流用 日數	積 數
	抽籤 入札	口數	一口 小計	口數	一口 小計							
1	入札 同	40	33	1,320	1	32	1,320	1,000	320	320	30	9,600
2	同	39	33	1,287	1	32	1,319	1,000	319	639	30	19,170
3	同	38	33	1,254	2	32	1,318	1,000	318	957	30	28,770
4	同	37	33	1,221	3	32	1,317	1,000	317	1,274	30	38,220
5	同	36	33	1,188	4	32	1,316	1,000	316	1,590	30	47,820
6	同	35	33	1,155	5	32	1,315	1,000	315	1,905	30	57,420
7	同	34	33	1,122	6	32	1,314	1,000	314	2,219	30	67,020
8	同	33	33	1,089	7	32	1,313	1,000	313	2,532	30	76,620
9	同	32	33	1,056	8	32	1,312	1,000	312	2,844	30	86,220
10	同	31	33	1,023	9	32	1,311	1,000	311	3,155	30	95,820
11	同	30	33	990	10	32	1,310	1,000	310	3,465	30	105,420
12	同	29	33	957	11	32	1,309	1,000	309	3,774	30	115,020
13	同	28	31	868	12	30	1,250	1,000	250	4,024	30	124,620
14	同	27	31	837	13	30	1,249	1,000	249	4,273	30	134,220
15	同	26	31	808	14	30	1,248	1,000	248	4,521	30	143,820
16	同	25	31	775	15	30	1,247	1,000	247	4,768	30	153,420
17	同	24	31	744	16	30	1,246	1,000	246	5,014	30	163,020
18	同	23	31	713	17	30	1,245	1,000	245	5,259	30	172,620
19	同	22	31	682	18	30	1,244	1,000	244	5,503	30	182,220
20	同	21	31	651	19	30	1,243	1,000	243	5,746	30	191,820
21	同	20	22	440	20	23	1,055	1,000	55	5,801	30	201,420
22	同	19	22	418	21	23	1,056	1,000	56	5,857	30	211,020
23	同	18	22	396	22	23	1,057	1,000	57	5,914	30	220,620

回数	給付未済口掛金			給付済口掛金			合計	給付金	差引過不足金	差引累計 剩餘金	流用 日數	積 數
	抽籤 入札	口數	一口 小計	口數	一口 小計							
1	入札 同	40	33	1,320	1	32	1,320	1,000	320	320	30	9,600
2	同	39	33	1,287	1	32	1,319	1,000	319	639	30	19,170
3	同	38	33	1,254	2	32	1,318	1,000	318	957	30	28,770
4	同	37	33	1,221	3	32	1,317	1,000	317	1,274	30	38,220
5	同	36	33	1,188	4	32	1,316	1,000	316	1,590	30	47,820
6	同	35	33	1,155	5	32	1,315	1,000	315	1,905	30	57,420
7	同	34	33	1,122	6	32	1,314	1,000	314	2,219	30	67,020
8	同	33	33	1,089	7	32	1,313	1,000	313	2,532	30	76,620
9	同	32	33	1,056	8	32	1,312	1,000	312	2,844	30	86,220
10	同	31	33	1,023	9	32	1,311	1,000	311	3,155	30	95,820
11	同	30	33	990	10	32	1,310	1,000	310	3,465	30	105,420
12	同	29	33	957	11	32	1,309	1,000	309	3,774	30	115,020
13	同	28	31	868	12	30	1,250	1,000	250	4,024	30	124,620
14	同	27	31	837	13	30	1,249	1,000	249	4,273	30	134,220
15	同	26	31	808	14	30	1,248	1,000	248	4,521	30	143,820
16	同	25	31	775	15	30	1,247	1,000	247	4,768	30	153,420
17	同	24	31	744	16	30	1,246	1,000	246	5,014	30	163,020
18	同	23	31	713	17	30	1,245	1,000	245	5,259	30	172,620
19	同	22	31	682	18	30	1,244	1,000	244	5,503	30	182,220
20	同	21	31	651	19	30	1,243	1,000	243	5,746	30	191,820
21	同	20	22	440	20	23	1,055	1,000	55	5,801	30	201,420
22	同	19	22	418	21	23	1,056	1,000	56	5,857	30	211,020
23	同	18	22	396	22	23	1,057	1,000	57	5,914	30	220,620

24	入札	17	22	374	23	23	684	1,058	1,000		58	5,972	30	179,160
25	同	16	22	252	24	23	707	1,059	1,000		59	6,031	30	180,930
26	同	15	22	330	25	23	730	1,060	1,000		60	6,091	30	182,730
27	同	14	22	308	26	23	753	1,061	1,000		61	6,152	30	184,560
28	同	13	22	286	27	23	776	1,062	1,000		62	6,214	30	186,420
29	同	12	10	120	28	18	794	914	1,000	△	86	6,128	32	183,840
30	同	11	10	110	29	18	812	922	1,000	△	78	6,050	30	181,500
31	同	10	10	100	30	18	830	930	1,000	△	70	5,980	30	179,400
32	同	9	10	90	31	18	848	938	1,000	△	62	5,918	30	177,540
33	同	8	10	80	32	18	866	946	1,000	△	54	5,864	30	175,920
34	同	7	10	70	33	18	884	954	1,000	△	46	5,818	30	174,540
35	同	6	10	60	34	18	902	962	1,000	△	38	5,780	30	173,400
36	同	5	10	50	35	18	920	970	1,000	△	30	5,750	30	172,500
37	同	4	10	40	36	18	938	978	1,000	△	22	5,728	30	171,840
38	同	3	10	30	37	18	956	986	1,000	△	14	5,714	32	171,420
39	同	2	10	20	38	18	974	994	1,000	△	6	5,708	30	171,240
40	同	1	10	10	39	18	992	1,002	1,000		2	5,710	30	171,300
計				23,422			22,288	45,710	40,000					

△印減額

此掛金表も亦大阪式であつて、前二者より異なる處は、給付済掛金を、給付期の異なるにより、四段に別つて遞減せることであり、又一回も抽籤を行はず、全部を入札としたことである。其點から言へば、前者より一層大阪式色彩が濃厚だと見られる。それで居て最後に給付金を受くる者の、一人當り掛金總額が、九百四拾圓で、給付金壹千圓との差が、六拾圓に過ぎない點から見れば、稍東京式に似た點もある。元來同社の掛金表は、東京、大阪兩式の折衷式が用ひられたもので、此表に摘出したもののみが、大阪式となつており、外にも種々なる掛金表があつて、契約者の希望に應じて、撰擇せしむるものである。

甲、乙兩表に於ては、初期の掛金總額は、給付金額より多いけれども、中期には給付金額が多くなり、終期に又々掛金額が増加するものであるに、丙表によれば、二十八回までは掛金に剩餘があるが、二十九回から三十九回までの十一回分は掛金が不足してあり、最後の四十回に僅か貳圓の剩餘金があるのみである。

此丙號收支計算表の上から見れば、此無盡一回の利益が百四十二圓餘であるけれども、掛金拂込獎勵金名義で、一口一回毎に貳拾錢を支拂ひ外に満期獎勵金名義

で、一口に對し、拾圓を支出してあるから、之等は前記利益から減じなければならぬ。加ふるに、同社は入札差金を全部加入者に分配するため、全部を入札制度としてあるが、會社に於ては入札差金による利益はない。前章にも述べた通り、無盡掛金は、一先づ無盡給付資金に組入れ、其中から給付金を支拂ひ、或は無盡利益として、前表による一回平均利益の七割を無盡利益に振替へ、残額は當該無盡會が滿會に達し、其一團が完全に拂込完了せるとき、無盡利益へ振替へをなすものである。

以上により無盡利益に關する概略を記述せるも、要するに無盡益金は無盡會社収益の根幹をなすものであるから、此收支計算表による收支を明らかにし、無盡利益金の算出等を嚴にし、大阪式に於ては、初期に多額に拂込があるまゝに、此剩餘金を利益金と看做し、經費に使用するか、或は利益金に計上して配當するが如きことあらば、終期に至つて、給付金の支拂不能に陥ることなきを保し難い。

第三節 收入利息其他の益金

無盡會社に於ては、無盡利益に次で、最も多くの収入を得るものは、茲に述ぶる諸

貸付金並に銀行預金等より受入るる利息、及び所有有價證券等よりの受入諸利息である。

無盡業法に於て、無盡會社の資金運用に對する嚴重なる制限あることは既に述べた通りである。之があるがために、無盡會社の資金は、主として不動産貸付、並に契約金限度貸付に運用してある。次で銀行預金となし、所有有價證券は實に僅少である。試みに昭和二年末に於ける資金運用状態を見るに、

諸 貸 付 金	貳千七百七拾萬參千九百貳拾貳圓
預 金	七百八拾七萬七千七百九拾九圓
有 價 證 券	七拾八萬七千百拾七圓

となり、之による收入利息も又多額のものあるべく、既に無盡益金よりも、收入利息の方が、多額に達してあるものがある。即ち京都市にある實業無盡株式會社の如きは、昭和四年六月末の損益計算書に、無盡利益金六萬貳千餘圓に對し、諸利息收入金六萬六千餘圓を計上してある事實もある。然し無盡會社が、比較的新しいものが多い關係上、多數の會社は、未だ資金運用益金を多額に計上することが出来な

い實狀にある。無盡會社が堅實なる經營を續け、今後數年を経過せば、所有資金の運用利益によりて、優に諸經費を支拂ひ、尙且つ利益分配をなすを得るに至るもの多數を生ずるに至るべきは想像に難くない。

無盡會社の不動産擔保貸付に對する利率は、各地各様で、必ずしも同一率によるものでないこと勿論であるが、多くは日歩三錢以上の由であるから、一般市場金利に比し、稍高率に失する嫌あるも、貸付金額が幾分寛大なるため、需要者多き由である。受取利息以外の収入としては、殆んど論ずるに足らぬものである。即ち少額の手數料其他を計上するに過ぎぬ。

第四節 損失勘定

第一款 概 説

無盡會社も亦一般銀行會社と同じく、諸給與金、旅費、税金其他の諸雜費を要すること勿論にして、何れの會社も諸給與金に最も多額を支出せるも、之に關しては、別に記述するまでもないことであるから、茲には主として無盡特有の經費に就て述

べることとする。

保險會社の計算方法が、収入保險料を益金に計上し、支拂保險金を損失勘定として處理するものなるも、無盡會社の計算方法は、前節述べたる通り、總掛金より、給付金を給付せる殘額を、無盡利益に繰入るゝものであるため、掛金並に給付金は、全然損益勘定から除外せらるゝものである。

尙無盡會社に於ける諸給與金、即ち人件費は何程を要するものなるかを調べることも、決して無駄ではあるまい。それには契約高に應じて、事務の繁閑を生じ、無盡利益の消長あるものなれば、契約高と對比するを正當なりと信じ、左に二、三の實例を擧げて其比率を見ることとする。

會 社 名	掛 金 契 約 高	諸 給 與 金	契 約 高 と の 比 率
長崎無盡株式會社	二〇、四九〇、〇〇〇圓	六八、三七〇圓	〇〇・三三
關西商工無盡株式會社	四、三二〇、〇〇〇	一四、一九六	〇〇・三二
實業無盡株式會社	二二、四四二、〇〇〇	三〇、四六九	〇〇・一三

會社により社員の待遇が異り、經費支出の名目を異にして、俸給名義以外を以て支出するものもあるであらう。前掲の諸給與金は、俸給費並に手當名義で、支出せ

るものゝみを計上せるものであるから、眞の諸給與金が包含せられておるかは疑問であり、幾分の相違あることは免れない。唯之に據つて、無盡會社の支出の主なものである諸給與金支出の割合を知ることが出来る。

第二款 會 席 費

無盡會社特有の経費として、多額に支出されておるものは、本款述べんとする會席費である。關東方面に於ては、既に會席費の支出をなさざるものもあるも、關西方面では今尙盛んに行はれておる。然し此會席費も、漸次廢止の氣運にあることは争はれない。又廢止せられないまでも、簡單なものとなりつゝある傾向がある。

無盡の起源に於て述べたる如く、無盡が相互扶助を目的とし、親戚、知己が集つて、困窮者救助のために、資金の融通をなしたるものにて、初期に於ては、無擔保、無利息を原則とせる關係上、被救助者は酒食を提供して、救助者に謝意を表したるものであるが、無盡が純經濟的に利用せらるるに至つても、尙此風習は一層盛んとなり、今尙非營業無盡に於ては、必ず講會の金額に應じたる饗應をなし、一口壹千圓掛の無盡の講會などに至つては、一人當り一回數十圓に當る費用を掛けて、饗應をなす事實

もある。蓋し非營業無盡に於ける加入者は、其多くが平素より知り合の關係があるため、無盡會の機會に一堂へ集まり、相互の親善を圖ることは、頗る有意義だとされておる。其因習が現在の合理化されたる經營であるべき筈の、營業無盡にまで及び、之が不合理を知りつゝも、舊慣に囚はれ、今尙廢止し得ざる實狀にあることも否定せられない。

茲に參考のため、會席費の支拂をなしつゝあるものと、全然此支拂をなさざるものと、更に諸給與費との割合を掲出する。

會社名	所在府縣	諸給與費	會席費	割合	備考
長崎無盡	長崎	六八、三七〇	九一、〇八〇	一三・三一	之れには募進費を含むものゝ如し。
關西商工無盡	大阪	一四、一九六	五、八〇〇	四・〇八	雜費名義にて支出する。
實業無盡	京都	三〇、四六九	四、一二五	一・三五	營業費名義にて支出せるものを掲ぐ。
下關無盡	山口	五、一三二	五、五九八	一〇・九七	前に同じ。
彌生無盡	東京	二七、五一一	五、九五六	二・一六	開會費名義。
平和無盡	東京	一七、七六二	なし		外に特別配當名義の支出がある。
扇港無盡	兵庫	六、二五九	二、二一五	三・五四	

右によつて見れば、會席費の支出が、甚だ區々に分れ、全然支出せざるものがある